

KAMA      TA      MIZU      GA      MOTO  
蒲田水ヶ元3

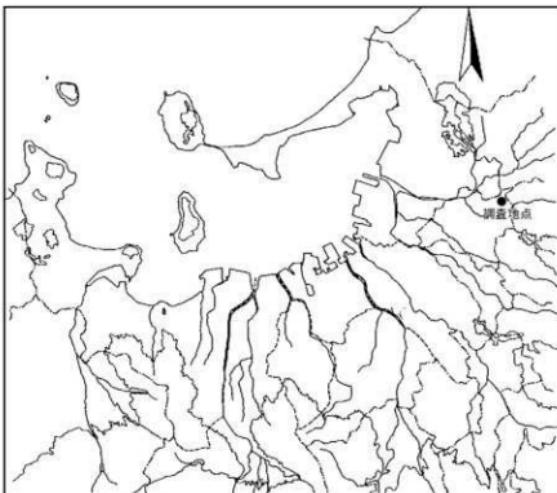
- 蒲田水ヶ元遺跡第3次調査報告 -

2012

福岡市教育委員会

KAMA TA MIZU GA MOTO  
蒲田水ヶ元3

- 蒲田水ヶ元遺跡第3次調査報告 -



調査番号 0851

調査略号 KMT-3

2012

福岡市教育委員会





1. 調査区上面全景（北から）



2. 繩文住居 SC104（南から）



3. SC104 新（右）・旧（左）炉（北西から）





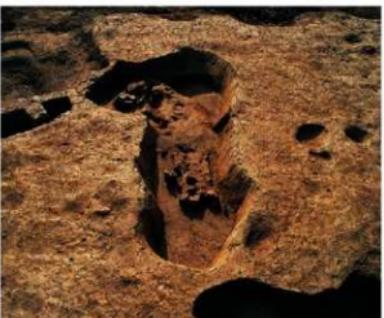
1. 縄文住居 SC294 (南から)



2. SC294 石組炉 (南から)



3. 石棺墓 SQ34 (西から)



4. 木棺墓 SM174 (南東から)



5. 焼土壙 SK284 (南東から)



6. SK284 出土新羅土器



## 序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は増加の一途をたどっており、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、東区蒲田において発掘調査を実施した蒲田水ヶ元遺跡第3次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、市域で初めての縄文時代後期の竪穴住居址をはじめ、古墳時代までにわたる住居群と甕棺・石棺・木棺・土壙墓からなる集団墓などが確認され、長きにわたって本地域が発展し続けてきたことを示す良好な資料を得ることができました。

最後になりましたが、調査に際し快くご理解とご協力をいただきました株式会社キヨーワ様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が文化財に対する認識と理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

## 例　　言

1. 本書は株式会社キヨーワが実施した東区蒲田203番1他地内において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課が平成20年度に実施した蒲田水ヶ元遺跡第3次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は磁北で、座標北はこれに $6^{\circ} 0'$  東偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の5m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は北交点とした。
4. 遺構の呼称は略号化し、甕棺墓→ST・木棺墓→SM・石棺墓→SQ・土壙墓→SR・竪穴住居→SC・掘立柱建物→SB・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SP・他はSXとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・山崎純男・山崎龍雄・長家伸・瀧本正志・加藤隆也・板倉有大・坂口剛毅・藤野雅樹・田尻直子・中村尚美による。
6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子・相原聰子による。
7. 製図は加藤・井上・相原・熊埜御堂和香子・撫養久美子・米倉法子・大庭友子による。
8. 本書に用いた写真は加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

調査番号	0851	遺跡略号	KMT-3
調査地地籍	東区蒲田3丁目203番1他	分布地図番号	02(蒲田)0002
開発面積	10,796.09m <sup>2</sup>	調査実施面積	1590m <sup>2</sup>
調査期間	081215~090430	事前審査番号	20-2-530

## 本 文 目 次

I.はじめに .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
II. 調査区の立地と環境 .....	2
III. 調査の記録 .....	3
1. 調査の概要 .....	3
2. 繩文時代の調査 .....	9
3. 弥生前期の調査 .....	54
4. 弥生中期の調査 .....	58
5. 弥生後期の調査 .....	84
6. 弥生終末～古墳前期の調査 .....	87
7. 古墳後期の調査 .....	90

## 挿 図 目 次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	4
Fig. 2 調査区周辺地形図 (1/2,000) .....	5
Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000) .....	6

Fig. 4	縄文時代遺構分布図(1/500).....	10
Fig. 5	SC104実測図(1/60・1/30).....	11
Fig. 6	SC104上層出土遺物実測図1(1/3).....	15
Fig. 7	SC104上層出土遺物実測図2(1/3).....	16
Fig. 8	SC104上層出土遺物実測図3(1/3).....	17
Fig. 9	SC104上層出土遺物実測図4(1/3).....	18
Fig.10	SC104上層出土遺物実測図5(1/3).....	19
Fig.11	SC104上層出土遺物実測図6(1/3).....	20
Fig.12	SC104上層出土遺物実測図7(1/3).....	21
Fig.13	SC104上層出土遺物実測図8(1/3).....	22
Fig.14	SC104下層出土遺物実測図(1/3).....	23
Fig.15	SC294実測図(1/60・1/30).....	31
Fig.16	SC294出土遺物実測図1(1/3).....	33
Fig.17	SC294出土遺物実測図2(1/3).....	34
Fig.18	SK13・38・288・289・SX10・216・234実測図(1/40).....	36
Fig.19	SK38・SX10・234・274出土遺物実測図(1/3).....	38
Fig.20	混入その他の縄文遺物実測図(1/3・293-1/4).....	40
Fig.21	弥生前期遺構分布図(1/500).....	42
Fig.22	SM14・15・16・19・23実測図(1/40).....	43
Fig.23	SM24・125・143・SR156実測図(1/40).....	44
Fig.24	SM159・163・203実測図(1/40).....	45
Fig.25	SR17・20・21・22・27・28実測図(1/40).....	48
Fig.26	SR157・160実測図(1/40).....	49
Fig.27	SK42・124・162・295・SD117(1/40)・SX06(1/30)・SD70(1/60)実測図.....	50
Fig.28	SK42出土土器実測図(1/3).....	54
Fig.29	SK162出土土器実測図(1/3).....	55
Fig.30	弥生中期遺構分布図(1/500).....	58
Fig.31	ST01・03・04・05・07・08・18・37実測図(1/30).....	59
Fig.32	ST39・40・43・45・46・48・49・54・69・71・85実測図(1/30).....	60
Fig.33	ST83・86・88・119・122・137・144・174実測図(1/30).....	61
Fig.34	ST202・204実測図(1/30).....	62
Fig.35	ST01・04・07・08(1/6)・ST03・37・39・40(1/12)小形棺実測図.....	70
Fig.36	ST05・18・71・83・130大形棺実測図(1/12).....	71
Fig.37	ST43・45・46・69・85・86・88(1/6)・48・49・54(1/12)小形棺実測図.....	72
Fig.38	ST112・131・144・174(1/6)・119・202(1/12)小形棺実測図.....	73
Fig.39	ST129・137・204大形棺実測図(1/12).....	74
Fig.40	SM30・31・92・107・108実測図(1/40).....	77
Fig.41	SM123・149実測図(1/40).....	78
Fig.42	SR66・106・114・128・134・173・207実測図(1/40).....	79
Fig.43	SK02・26・55・64・72・29(1/60)実測図.....	80
Fig.44	SK238・240・254実測図(1/40).....	81
Fig.45	SK72出土遺物実測図1(1/3).....	82
Fig.46	SK72出土遺物実測図2(1/3).....	83
Fig.47	弥生後期遺構分布図(1/500).....	84
Fig.48	SM68・95・100・169実測図(1/40).....	85
Fig.49	SM110・111・SR115・116・171実測図(1/40).....	86
Fig.50	弥生終末～古墳前期遺構分布図(1/500).....	87
Fig.51	SQ33・34・SM102・103・154実測図(1/40).....	88
Fig.52	SR98・150・153実測図(1/40).....	89
Fig.53	SK11・87・152出土土器実測図(1/3).....	89
Fig.54	古墳後期遺構分布図(1/500).....	90
Fig.55	SK284実測図(1/40).....	90
Fig.56	SC246・SK284出土土器実測図(1/3).....	90

## I . はじめに

### 1 . 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市東区蒲田三丁目203番1他地内において、土地所有者より事務所付倉庫の建設の計画に当たって、埋蔵文化財の有無の照会が、平成20年10月3日に埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は10,796.09m<sup>2</sup>、受付番号は20-2-530である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、周知の遺跡である蒲田水ヶ元遺跡内に位置し、周辺でも発掘調査が実施されていることから、確認調査を実施することとなった。同年10月20日実施した確認調査の結果、申請地東部の微高地部では現GL-40~60cmの黄褐色シルト上で柱穴・竪穴住居址等の遺構を多数、西部の低地部で遺物包含層が確認され、遺構が濃密に遺存していることが確認された。その後事業を引き継いだ株式会社キヨーワと同課で設計変更等で現況での保存が可能か協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。極力遺構を遺存するため建物配置をなるべく低地部に掛かるよう設計変更をお願いし、やむなく破壊される部分に関して記録保存として事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同社と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成20年12月15日に着手、21年4月24日までの契約で実施されたが、予想以上の遺構の多さに、調査が遅延し、同社のご理解をいただき、4月30日に全ての工程を終了した。

### 2 . 調査の組織

【調査委託】株式会社キヨーワ

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣( 当時 )

【調査総括】文化財部長 矢野三津夫( 当時 ) 埋蔵文化財第1課長 山口譲治( 当時 )

調査係長 米倉秀紀( 当時 )

【調査庶務】文化財整備課 山本朋子( 当時 )

【発掘調査】埋蔵文化財第1課調査係 加藤良彦( 当時 )

【発掘協力】永田豊彦 原田浩 藤村正勝 山中征生 浦伸英 中村尚美 今村由利

北野宏行 近藤英彦 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛 結城敦雄 安部武代

安部ミユキ 酒井勝久 酒井兎美子 阿部ミエ子 室永温子 日田勝 井上義信

河野シズエ 岩本三重子 越智信孝 栗野孝子 中島道夫 白石渕洋 藤野幾志

安元尚子 兼田ミヤ子 保坂由美子 花田昌代 竹原吉秋 中山洋次郎 井上澄敏

香月隆 河崎征治 中嶋規玖生 中山竜太 中野容子 崎村雄介 鷺崎哲夫 花田則子

阿部純子 永松弘恵 坂口剛毅 田尻直子

【整理協力】国武真理子 寅田慧

## II . 調査区の立地と環境

蒲田水ヶ元遺跡は、福岡市の東部に広がる柏屋平野に位置する。犬鳴・三都山地から発した多々良川・須恵川・宇美川等が形成した沖積平野と三郡・若杉山地の山麓部に連なる台地からなる。その下流部に位置し、河川が博多湾に注ぐ海岸部には砂丘が形成され、この間に広大な後背湿地が形成され、かつては湿地が多く分布していた地域である。

遺跡は多々良川と久原川に挟まれた、西に延びる台地の先端および平野部に立地し、表層地質は中位段丘下位面構成疊層で、ASO-4の火山灰層を欠き疊・シルト層が露出する。北西から浅い谷が開析され、西対岸の蒲田部木原遺跡と対峙し、また蒲田部木原遺跡は9~11次調査区と4~12次調査区間の旧河川で南北に二分されている。

遺跡周辺は九州自動車道の開通を契機に物流倉庫の建設が相次いでおり、これらに伴う発掘調査は本遺跡で3次、蒲田部木原遺跡で12次にわたる調査が実施されている。周辺の調査を概観すると、蒲田部木原1次調査でナイフ形石器や台形石器の包含層、蒲田水ヶ元遺跡1次調査でナイフ形石器、本調査で剥片石器未製品等の旧石器が検出されている。縄文時代は本調査区・1次調査区で土壌等の中期遺構、本調査区で後期竪穴住居・土壌が、他本調査区・蒲田部木原5・10・11・12次調査区で後・晚期土器・石器を検出している。なかでも本調査区検出の竪穴住居2棟の検出は特筆される。弥生時代は本調査区・蒲田部木原4・5・10・11次調査区で前期の遺構が散見されるが、前期末から後期末にかけて急速に拡大する。前期末から中期には本調査区・蒲田部木原4・10・11・12次調査区で竪穴住居・土壌・溝等の生活遺構と、本調査区・1次調査区・蒲田部木原7・8・11・12次調査区で甕棺・木棺・土壙墓群が検出されている。各地点で磨製石剣・石戈・打製石鎌の出土が目立ち戦闘色が強い。中期後半には本調査区・蒲田部木原4・10・12次調査区で溝・包含層より多量に遺物を検出しており一つの盛期を迎えている。後期は縮小傾向で、本調査区・1次調査区・蒲田部木原3次調査区で竪穴住居・土壌・木棺墓が検出される。本期では蒲田部木原7次調査区で中期前半の甕棺に翡翠製勾玉の副葬、4・10次調査での土器焼成の可能性を含む中期前半土壙の検出、10次調査中期前半住居からの板状鉄斧の出土、本調査区中期後半土壙からのガラス小玉出土、1次・本調査区・蒲田部木原10次調査からの銅製鋤先検出、蒲田水ヶ元遺跡1次調査区での方格規矩鏡片の検出等があげられる。弥生終末から古墳前期がつぎの盛期となり、1・2次・本調査区・蒲田部木原2・3・5・10次調査区で竪穴住居・土壙群が検出され、居住域の拡大をみる。本調査区では土壙・木棺・石棺墓群の墓域も形成される。石棺墓は三郡變成岩を用いた箱式石棺で、これは蒲田部木原遺跡の南に位置する平塚古墳（福岡県指定史跡）の大型箱式石棺、同じく大型箱式石棺の名子道2号墳丘墓、同じく酒殿遺跡で変形菱鳳鏡・管玉を副葬した大型箱式石棺墓、龜山神社墳丘墓の大型箱式石棺と同系列に属する。また蒲田部木原遺跡南西部の部木八幡古墳群では前方後方墳2基・円墳7基からなる前期古墳群が形成される。これらに続いて盤龍鏡・三角縁神獸鏡を副葬した畿内型前方後円墳である天神森古墳が築造される。本期では蒲田部木原遺跡3次調査区・本調査区での滑石玉工房の検出と、蒲田部木原遺跡3次調査区・蒲田水ヶ元遺跡1次調査区・本調査区での斧・鎌・鎌等の鉄器の検出があげられる。古墳後期では蒲田水ヶ元遺跡1次調査区・本調査区・蒲田部木原遺跡2・3・4・5・10・12次調査区で甕を持つ竪穴住居群・掘立柱建物群が検出されている。本調査区では焼土壙より新羅土器が出土している。古代・中世では遺構は散漫となり、古代で蒲田部木原遺跡3次調査区で掘立柱建物群が、中世では蒲田部木原遺跡6次調査区で方形区画溝と屋敷墓3基、本調査区では溝1条が検出されるのみである。

### III. 調査区の記録

#### 1. 調査の概要

蒲田水ヶ元遺跡は多々良川と久原川に挟まれた、西に延びる台地の先端および平野部に立地し、表層地質は中位段丘下位面構成疊層で、ASO-4の火山灰層を欠き礫・シルト層が露出する。本調査区は遺跡の低台地北西端部に位置し、北は旧河川をはさんで、西は谷部をはさんで蒲田部木原遺跡と対照している。現況は水田で、地表標高は18.3~17.7mを測り、北から南に緩やかに傾斜する。九州縦貫道をはさんで南東180mには1次調査区が位置し、南20m程には2次調査区が位置している（Fig.2）。本調査区に近い1次調査IV区では縄文中期～後期の土壌2基、東西方向の稜線に沿った弥生中期前半の櫛棺墓32基と祭祀土壙、弥生中期の円形竪穴住居1・古墳後期～奈良時代の方形竪穴住居4軒が検出され、本調査区の様相にちかい。2次調査区では弥生中期～終末期の土壌と竪穴住居を7軒検出してあり、本調査区からの遺構面が広がっている。

確認調査の結果、台地上でGL-20cmまでが耕作土・-30cmまで床土-40~60cmが暗褐色土包含層で、直下の黄褐色シルト層上面で竪穴住居等の遺構が検出され、低地部でGL-40~150cmの厚い暗褐色土包含層が検出されている。

調査は中央部の現代溝を境として北部の広領域部を調査1区、南部の狭小域部を調査2区とし、12月16日より重機による表土剥ぎを開始した。大部分は暗褐色包含層下面の黄褐色シルト層上で遺構検出を行ったが、小形櫛棺の多くが包含層上面で半切状態で検出されたため部分的に残ざるを得なく、また、地山面も部分的に暗黄灰色シルトがかぶり遺構が明瞭でない複雑な堆積状態であったため、1区では上面調査終了後全面を15~20cm切り下げ再検出をおこなっている。時期差は上面の弥生遺構と大差無いため遺構全体図は上・下面を重ねている。2区は翌年2月5日より重機による表土剥ぎを開始。南半部が住居の著しい切り合いのため、遺構掘削途中で下面に遺構が確認されたSC294を中心とした中央部のみ下面での遺構検出を行っている。測量基準線は予定建物の基準線に合わせ、任意で5m方眼グリッドを設定し、グリッド名称は西交点として実施した。4月2日に上面の全景を撮影、4月7日に測量・実測を完了し、8・9日で1区および2区の部分的掘り下げを実施。4月24日に下面を完掘・全景を撮影、4月29日に実測を完了し、4月30日に調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は、縄文中期阿高式期の包含層・後期鐘崎式期を中心とした円形竪穴住居2軒・土壙14基・集石遺構1基、弥生前期の土壙30基・溝5条・集石遺構1基・木棺墓11基・土壙墓11基、弥生中期の土壙16基・溝2条・櫛棺墓31基・木棺墓8基・土壙墓9基、弥生後期の土壙10基・竪穴住居1軒・櫛棺墓1基・木棺墓6基・土壙墓5基、弥生終末～古墳前期の土壙24基・溝7条・竪穴住居20軒・集石遺構1基・木棺墓3基・土壙墓4基・箱式石棺墓2基、古墳後期の土壙17基・溝2条・竪穴住居7軒・掘立柱建物3棟・土壙墓1基、中世の溝1条である。

縄文時代中・後期はこれまで遺物が散見されたが、遺構は本調査区が初検出であり、特に円形竪穴住居2軒は特筆される。遺構は弥生前期～中期で46.5%・弥生終末～古墳後期で36%を占め中心をなしており、弥生期は墓域として、古墳期は集落の中心域として盛期を迎えている。墓群は調査区北部に弥生前期後半から古墳前期を中心に土壙・木棺・石棺墓に、弥生中期の櫛棺墓が加わり奴国域の墓制と以東の墓制が併存する。古墳期の集落は調査区南部を中心に27軒の竪穴住居が切り合っている。

遺物は旧石器剥片・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器等コンテナ193箱分を検出した。



1. 蒲田部木原道路、A-第3次調査 a-第1次調査、b-第2次調査 A 地点、c-同B地区、d-同C地区
2. 上大隅平塚古墳、3. 浦田水ヶ元道路、4. かけ塚古墳群、5. 浦田道路、6. 蒲田原道路、7. 蒲田山古墳群、8. 丸山城跡、9. 西尾山古墳群、10. 止塙道路、11. 江辻道路、12. 部木八幡古墳群、13. 天神森古墳、14. 名子道古墳、15. 土井道路、16. 戸原妻尾道路、17. 王塚古墳、18. 岩崎神社境内櫛塚群、19. 犬地山古墳群、20. 古大間池玉造道路、21. 古大間道路、22. 鹿与丁池道路、23. 牛ヶ隈道路、24. 乙植木古墳群、25. 酒殿道路、26. 龜山神社古墳

Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

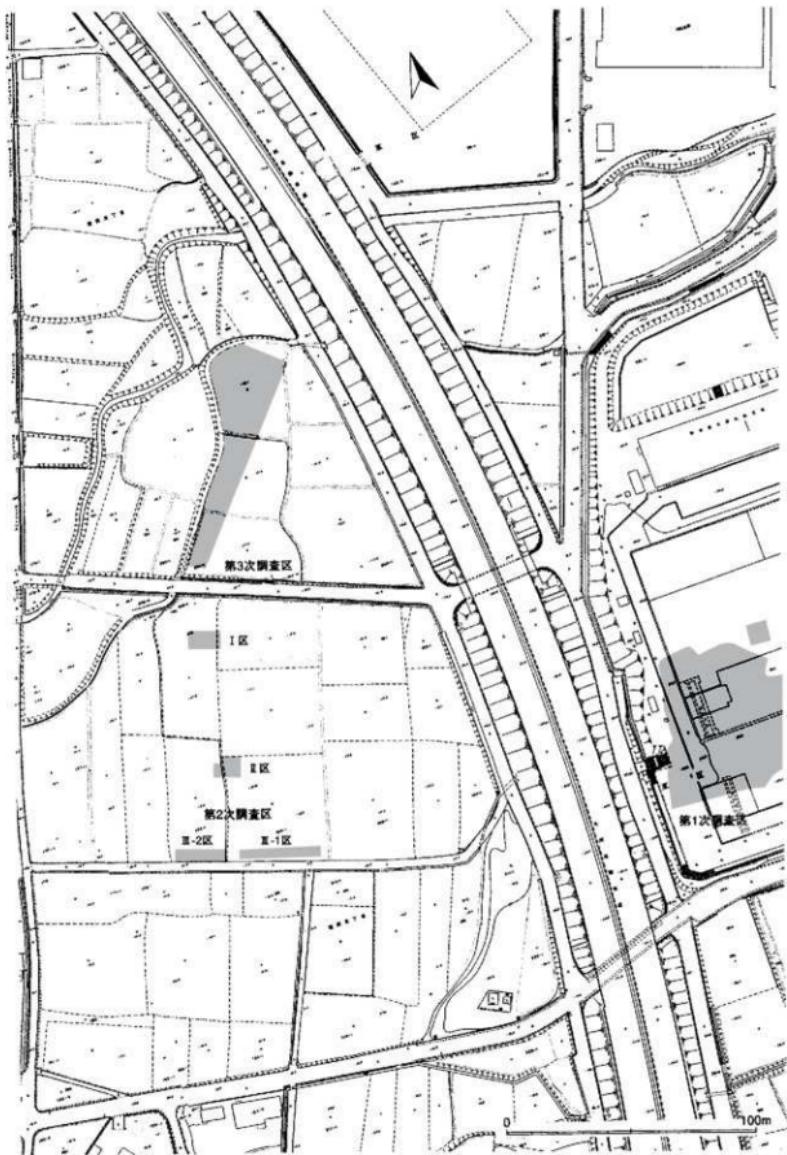


Fig.2 調査区周辺地形図(1/2,000)

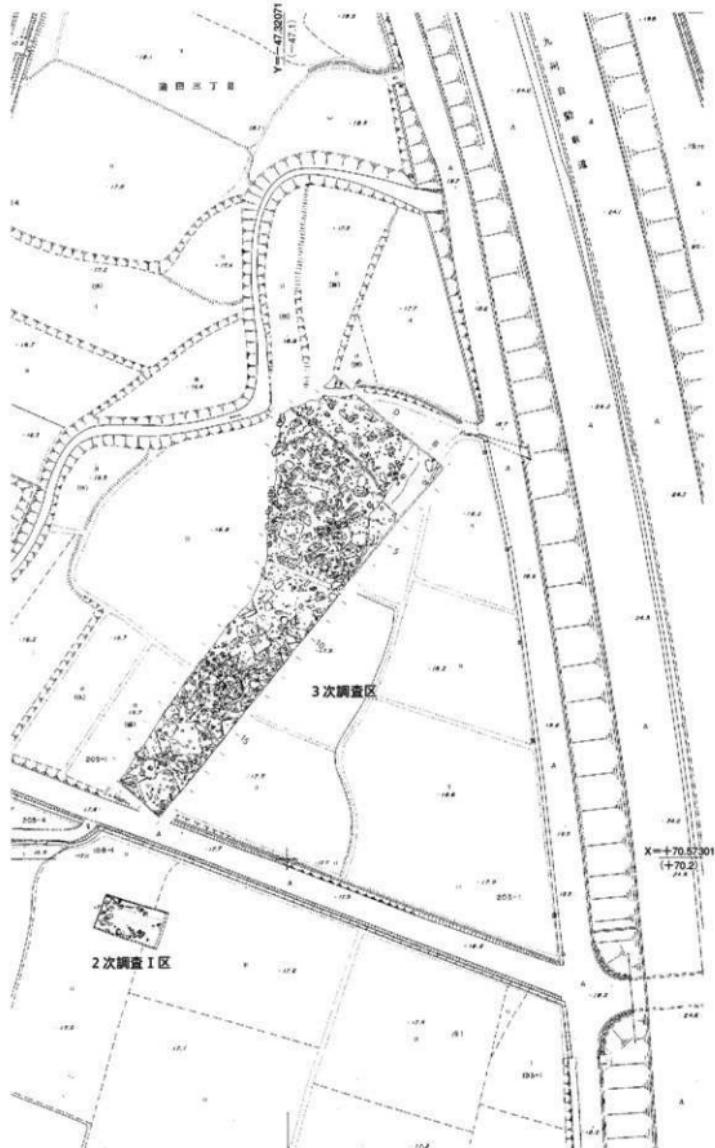


Fig.3 調査区位置図(1/1,000)



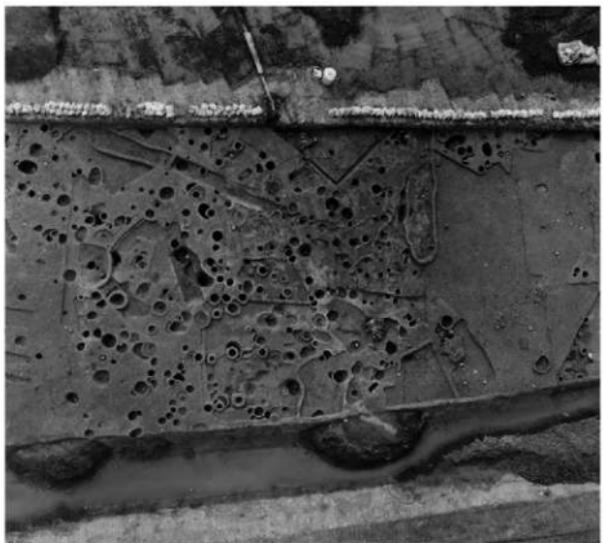
1. 1区 上面全景（北東から）



2. 1区 下面全景（北西から）



1. 2区 全景（北東から）



2. 2区 柱穴集中部（北東から）

## 2. 縄文時代の調査 (Fig. 4)

縄文時代は中期阿高式期・後期鐘崎式期を中心とした包含層、後期鐘崎式期を中心とした円形竪穴住居2軒・土壙14基・集石遺構1基の遺構を検出した。40m程の間隔で住居が分布し、周辺に土壙が散布している。遺構は上・下面にわたって検出されている。

### 1) 竪穴住居 地形に沿うように後期鐘崎式期の2軒の円形竪穴住居を検出している。

SC104 (Fig. 5 PL.3 - 5) C6 グリッドに位置し、大部分を弥生後期から古墳前期の土壙墓・木棺墓12基と縄文後期の土壙SK 101に切られる。多数の切り合いと遺構面の濁りで遺構の肩が明瞭でないため、墓群を処理後の下面検出時に精査している。平面径6.7~6.25mの円形で深さ43cmを測る。中央に径52cm深さ18cmの炉を設け周壁は赤く被熱している。後にこれを埋め戻して西に隣接して径55cm深さ5cm程の不整形の炉に変え同様に被熱する。これをさらに58×40cmの緑色片岩礫を用いた石組炉に変えている。初期の炉内からは被熱した獸骨片少量とサヌカイトチップが多く検出してあり、サヌカイト製石器を作成していた可能性が高い。炉を中心にこれをとりまく径3m程の円形に配された柱穴が主柱穴と考えられ据方径85~40深さ85~58cmを測る。西隅の柱穴と壁間に38×30×12cmの花崗岩亜角礫を台石兼石皿(227)として据える。土層は床直上に黒褐色シルトが堆積し上部に褐色シルトが堆積する。9層・10層間に切り合いがあり、炉の切り替えと合わせると、規模を縮小しての立て替えの可能性が考えられる。住居廃絶後の5層土堆積後黒褐色土が堆積し、この間廃棄物処理に使われ、9割以上の遺物は4層土を中心として出土している。調査時は上層として取り上げた。

出土遺物 (Fig. 6 ~ 14 PL 6 ~ 12) 出土した遺物は後代の切り合いの遺構出土分を含め、縄文後期土器111,275g、うち磨消縄文・沈線文を施す精製土器3,187g、条痕文を施す粗製土器が108,088gで約44倍の出土量である。参考までに3/4残存のSK 38出土精製脚付鉢276・826gを完形と見なして1,100gとすると精製で約3個体分、1/4残存の粗製深鉢63・89の870gを完形と見なして約3,500gとすると粗製で約30個体分の出土量となる。

石器は石鎚78点・黒曜石製75点サヌカイト製3点、うち46点は未製品で黒曜石製石刃・つまみ形石器を主な素材とする。石錐22点・黒曜石製18点サヌカイト製3点・スクレーバー26点・黒曜石製6点サヌカイト製20点、横刃石器3点・サヌカイト製1点变成岩2点・石刃・つまみ形石器は黒曜石製でそれぞれ37・32点、磨製石斧11点・玄武岩2点变成岩9点・打製石斧3点・玄武岩1点变成岩2点・磨石2点・砂岩1点花崗岩1点・叩石42点・礫岩1点变成岩41点・石皿7点砂岩5点花崗岩2点・石錐2点变成岩・円盤2点・砂岩1点变成岩1点・垂飾1点变成岩・未製品28点・黒曜石10点サヌカイト1点变成岩17点、の計296点を検出している。石鎚78点が突出し、うち46点が黒曜石製の未製品であること、石刃・つまみ形石器の量、多量の叩石の出土からサヌカイト製石器とともに石刃素材の石鎚製作を想定できる。他に剥片586点・使用痕剥片122点・石核56点を検出している。石材別では腰岳他の黒曜石787点・姫島黒曜石14点・サヌカイト92点・玄武岩3点・砂岩・礫岩10点・花崗岩3点・变成岩176点・チャート1点の計1,86点となり、黒曜石・サヌカイト・緑色片岩等の三郡变成岩が目立つ。他に桂化木の出土が目立つ。三郡变成岩の多用は、地山の中位段丘下面礫層から容易に採取できることも要因である。

1~22・132・136・147・148は鐘崎式精製土器。4は口径26.0、10は34.4、27は20.2cm。1~22・147は渦巻文を中心飾とした沈線文で、6・12~14・16・20は磨消縄文を施す。148は三つの渦巻文が重なる。口唇を短く屈曲するもの1~9・147、「く」字に屈曲するもの10・11・136、直口12~15・17・74・148、肩が稜を持って屈曲するもの18~20・132がある。10・11・17は渦巻文が退化し10は横円に11・17・74は雷文状に変化。22は山形口縁下で鉤状に変化。136は無文。136・147は橋状把手をもつ。133は半精製で直口口縁下に粗い弧状沈線文。23・24は「く」字に大きく屈曲した口縁外面に平行沈線文。25・26は縁帯文で肥厚した口縁に25は円形列点26は口縁に細かな刺突文。27・28は鐘崎式末・縁帯文期か、肥厚した山形口縁外面に沈線を主とした装飾を施し、上面形が四角形を成す器台形の土器。27は連続ヘラ刻目による区画内に沈線文を、28は磨消縄文間に列点文を施す。80は底部。径12.4cm。外底に堅果類の压痕。6・15・16・26~28・132は橙色、11は灰黄褐色、14は明赤褐色、17は明黄褐色、21~24・80・133・136は鈍い褐色、他は鈍い黄橙~淡黄色を呈す。Fig.8~13は粗製土器。29は口径39.6、34は27.0、35は25.2、36は32.0、37は32.2、46は24.1、51は19.8、56は20.6、62は27.4、63は27.6、68は32.3cm。貝殻条痕を施すもの32・64・65・66・69とこれをゆるくナデるもの、ヨコケズリ後ヨコナデを施すもの31・33・34・36・38・40・47・50・52・61・138、ヨコヘラナデ後ヨコナデを施すもの35・37・51・68がある。口縁を「く」字にやや長く屈曲するもの29・30・54・62・101・145、「く」字にやや短く屈曲し頸部のくびれを強くして二重口縁状にするもの32・33・34・51・144・146、「く」字に短く屈曲するもの31・52・137、ゆるく外反するもの35・36・37・44・50、若干内湾しゆるいキャリバー状を成すもの38・39・40・41・66、肩が稜を持って屈曲するもの46、短く屈曲し短い二重口縫状を成すもの45・47・48・49・139、逆「く」字の二重口縫上にさらに口縁を重ねるもの55・56、口唇内面を肥厚するもの43・61・135・138、内湾気味に直口するもの63・65・68・71~74・135・138、外湾気味に直口するもの69・75、直線的に直口するもの64・67・70がある。30・36・38~42・45・47・48・50・51・54・56・101・

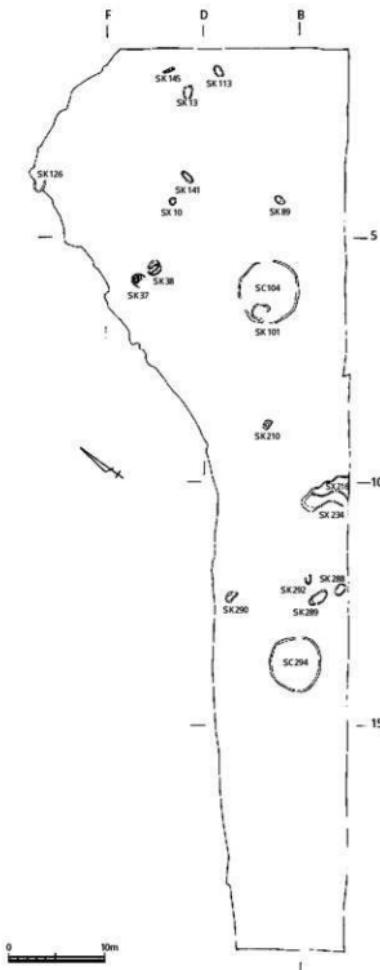


Fig.4 織文時代遺構分布図 (1/500)

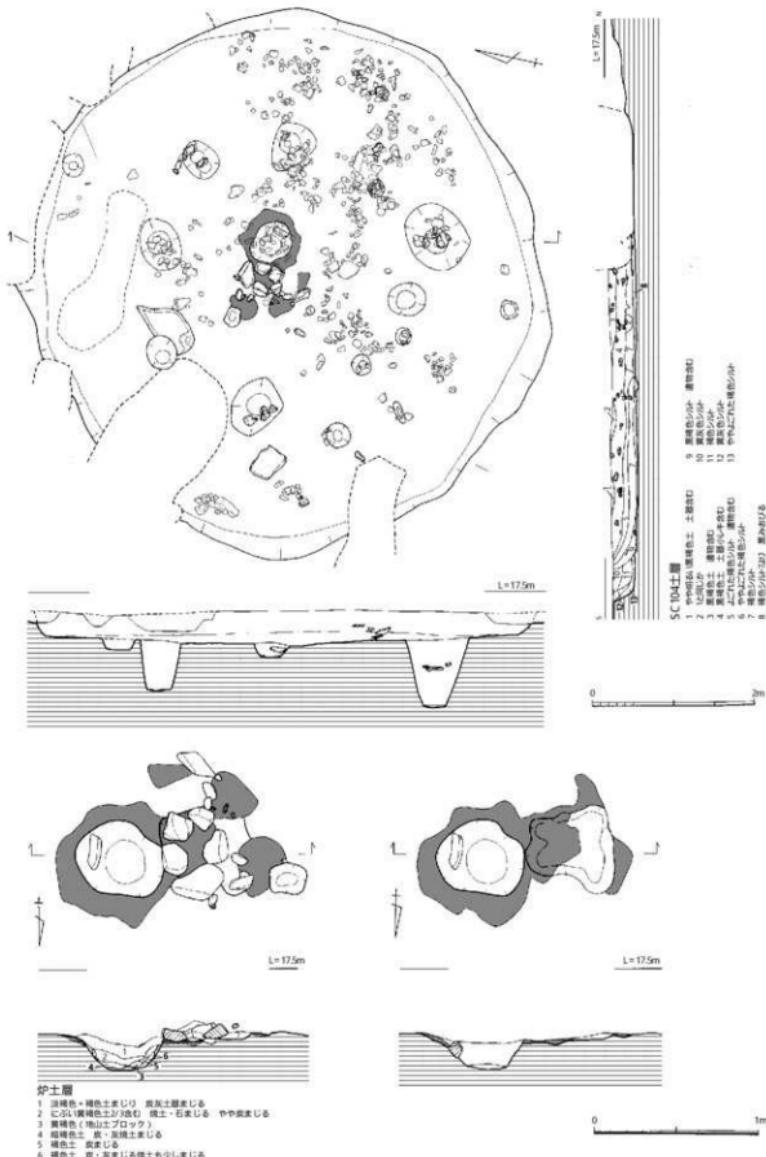


Fig.5 SC104実測図 (1/60・1/30)



1. SC104 上層遺物出土状況（南から）



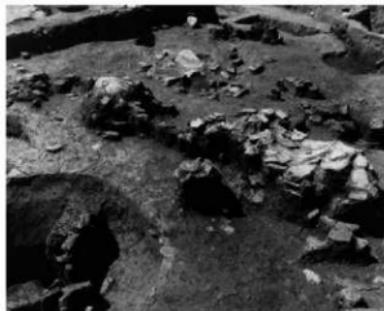
2. SC104 全景（南から）



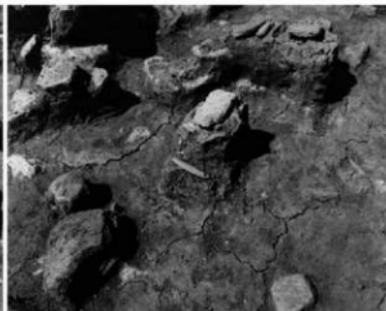
1. SC104 土層断面（南東から）



2. SC104 完掘状況（南から）



1. SC104 上層遺物出土状況（南から）



2. SC104 垂飾出土状況（南東から）



3. SC104 石組炉検出状況（北西から）



4. SC104 旧炉土層断面（北西から）



5. SC104 新(右)・旧(左)炉（北西から）



6. SC104 石皿出土状況（北西から）

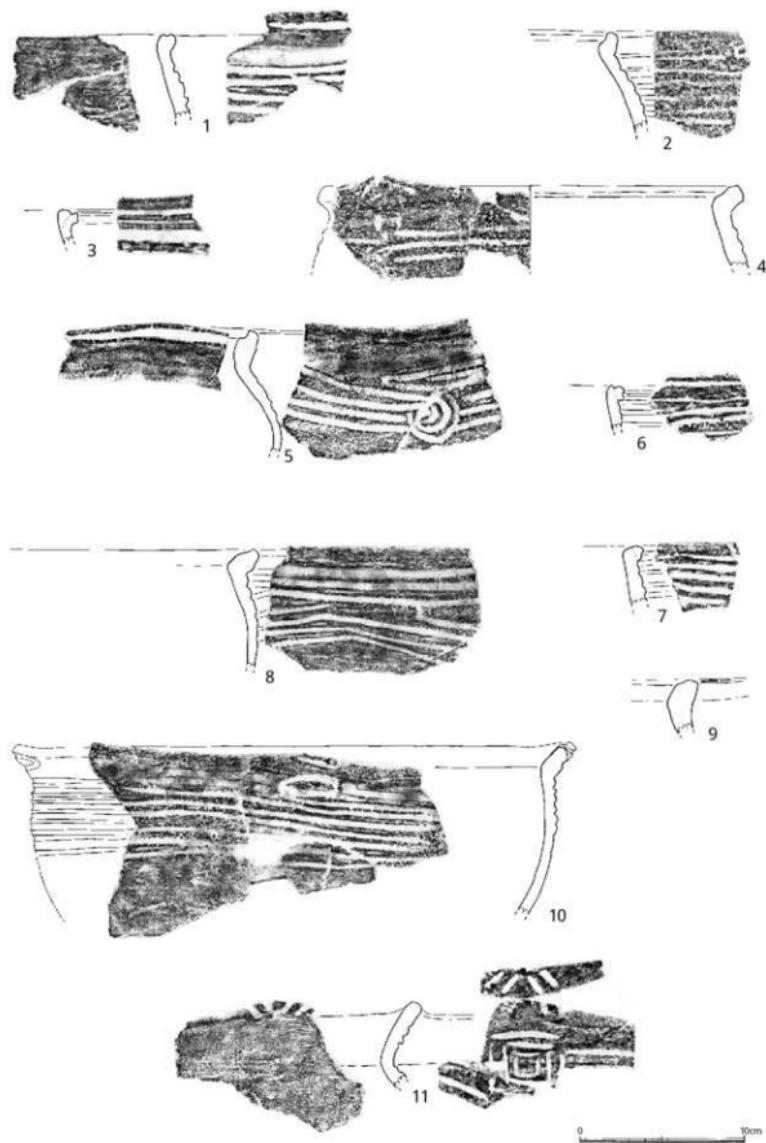


Fig.6 SC104上層出土遺物実測図- 1 (1/3)

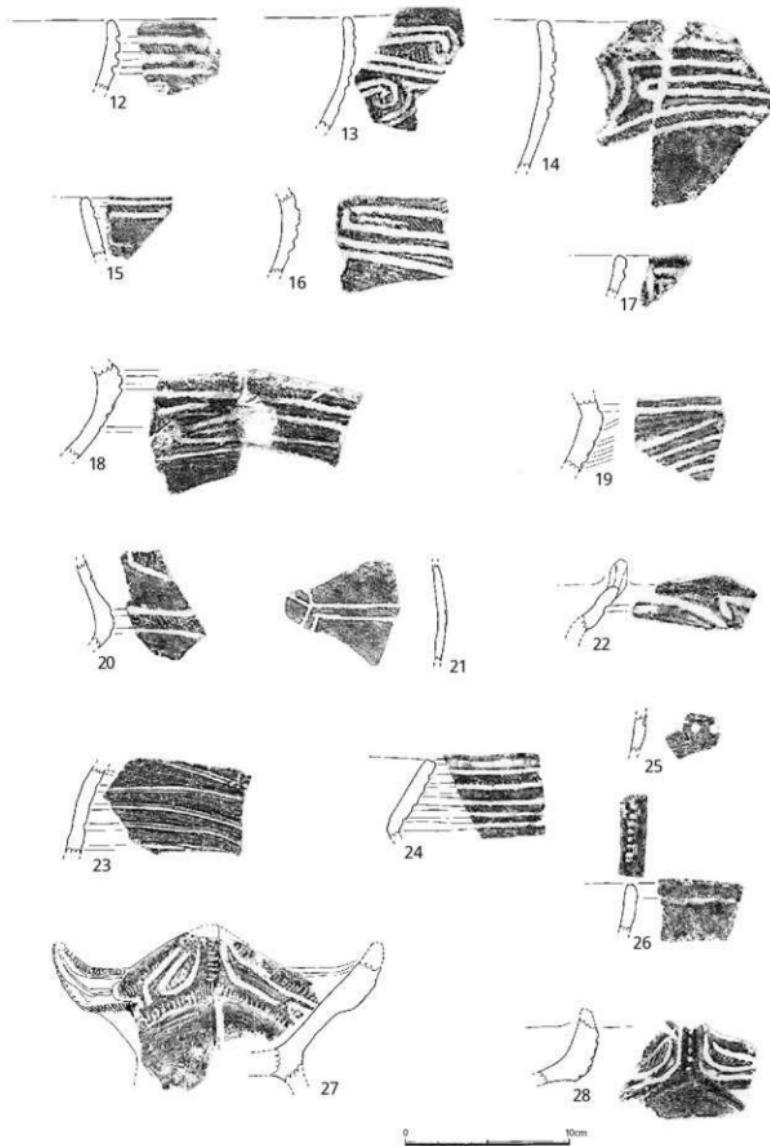


Fig.7 SC104上層出土実測図- 2 (1/3)

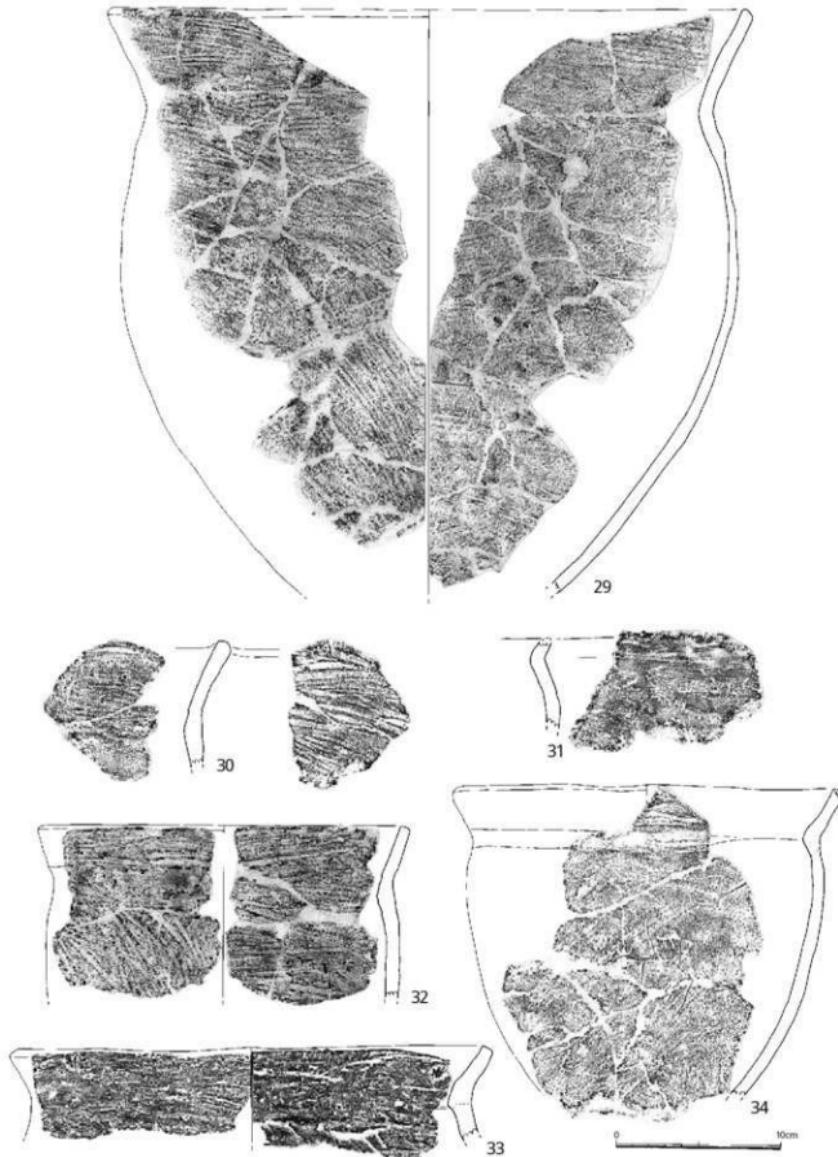


Fig.8 SC104上層出土遺物実測図- 3 (1/3)

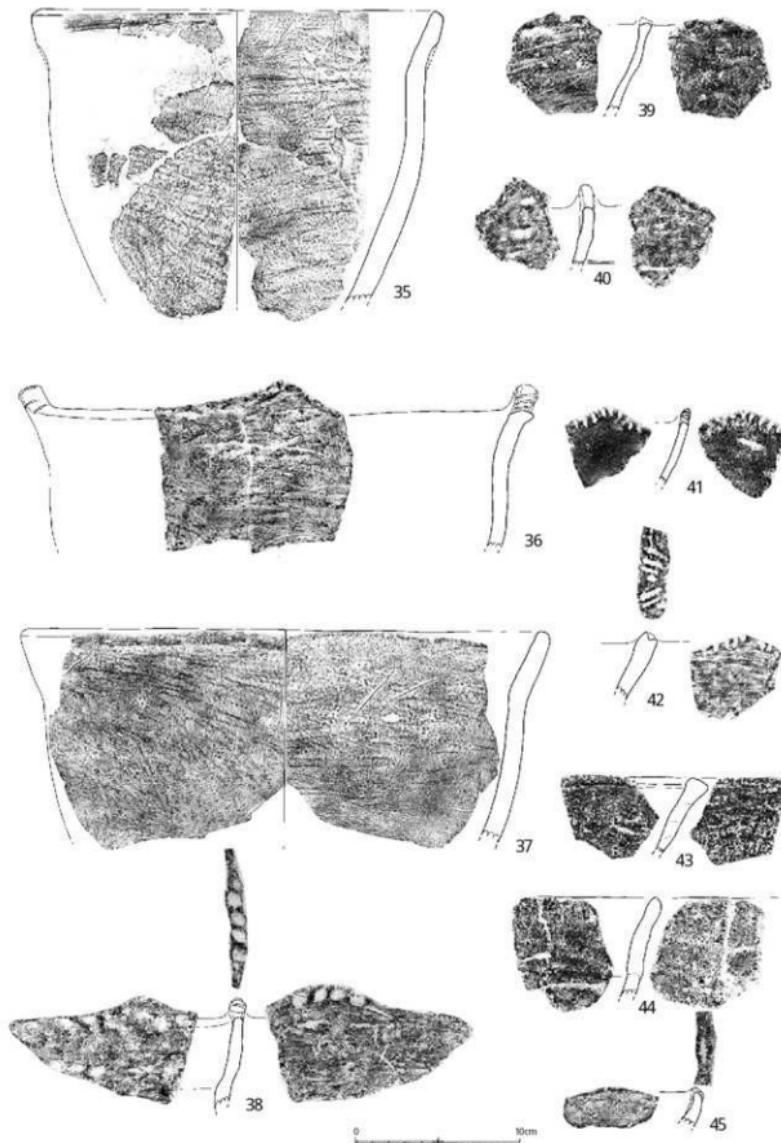


Fig.9 SC104上層出土遺物実測図- 4 (1/3)

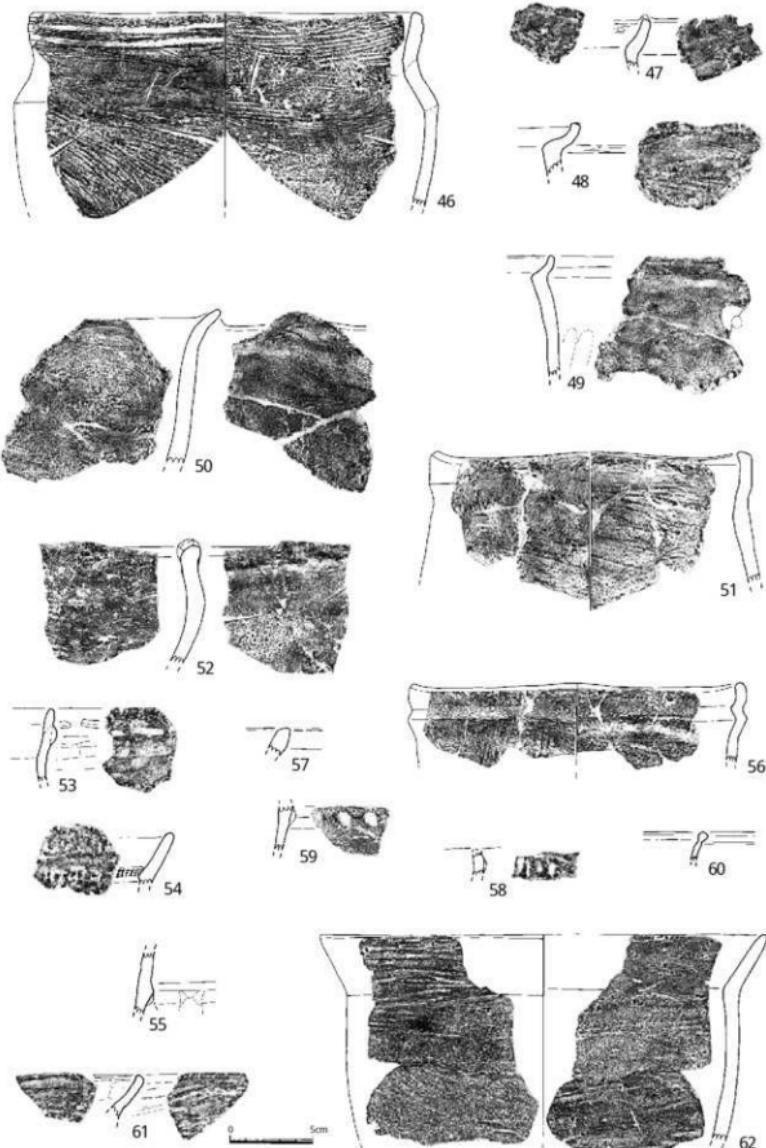


Fig.10 SC104上層出土遺物実測図- 5 (1/3)

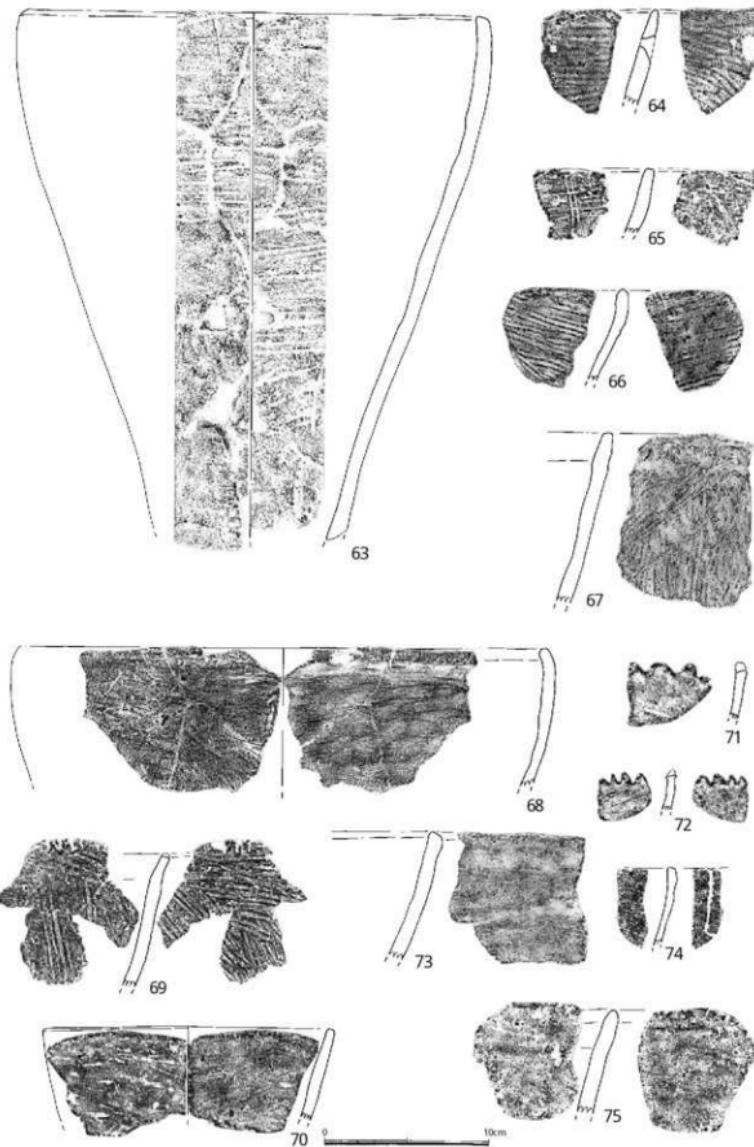


Fig.11 SC104上層出土遺物実測図- 6 ( 1/3 )

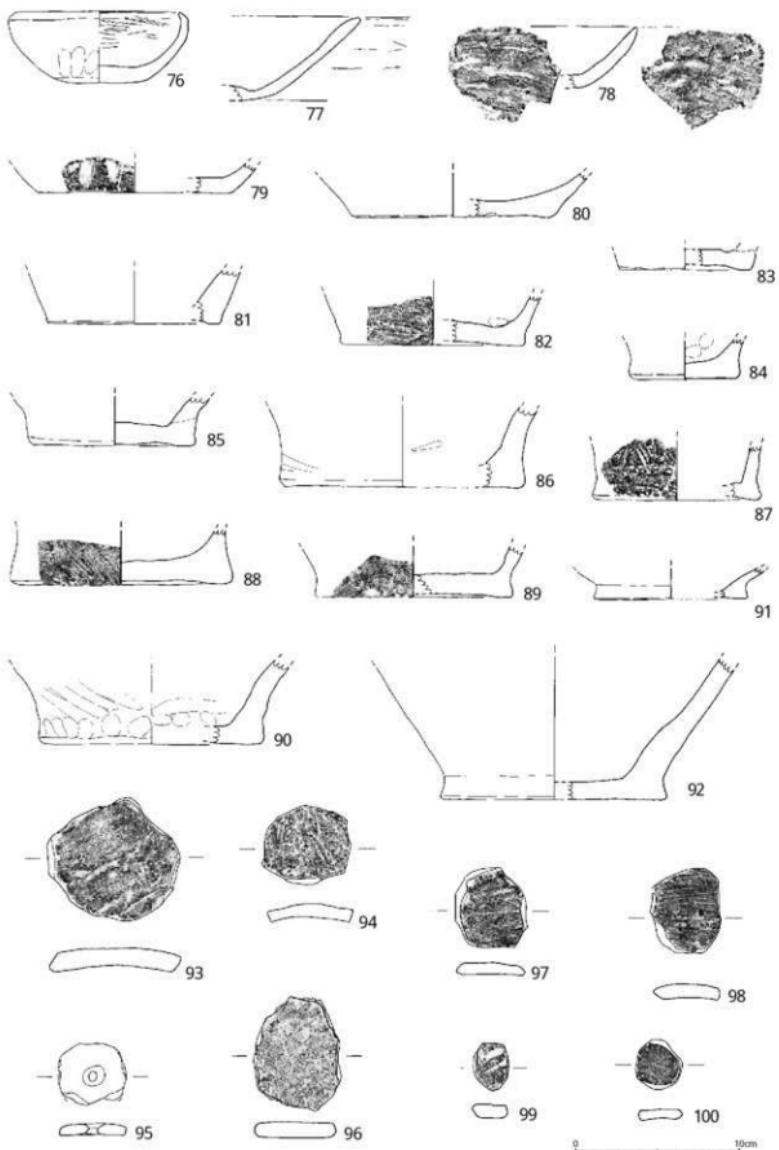


Fig.12 SC104上層出土遺物実測図- 7 (1/3)

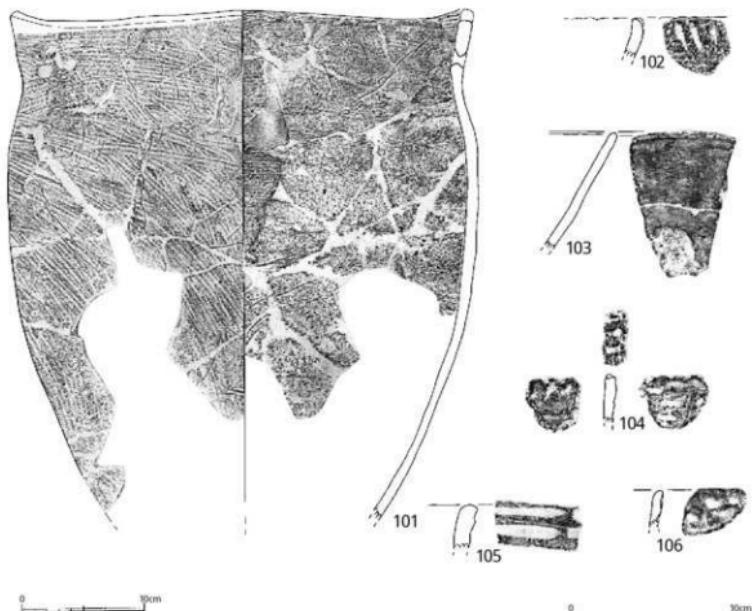


Fig.13 SC104上層出土遺物実測図- 8 (1/4・1/3)

135・137・139・144・145は山形口縁を成し、口唇に36は列点2点の両側に連続ヘラ刻目、38は凹点5点、39は大きな凹点1点、41・49・135・144・145は連続ヘラ刻目、42は刺突点の両側に3本のヘラ刻目、45は短い凹線等、様々な装飾を施す。29・32・62・144は口縁外面の貝殻条痕にナデを施さず文様化を図る。46は口縁外面に平行沈線。52は瘤状の貼り付けを施す。55は橋状把手の痕跡がある。56は外面口縁下に縦方向の貝殻条痕をベルト状に施す。53・57・102・134は縁帶文土器で内外ヨコナデ、53は突帯上位に短沈線文を102は口唇外端に斜位の長めのヘラ刻目、134は山形口縁口唇・外面に平行列点。54は内面屈曲部に刻目、58・60・103は夜臼式の混入の可能性がある。60はケンマ103はヨコナデ後ゆるいケンマ。64・101は補修孔を穿つ。69は口唇に刻目、71・72は刻み状の連続凹点。81・92・140・142は底部。直線的に開く81・83、脇がややくびれ外湾する84・90・140・141、外底端部が強く張り出す91・92、高台状の142がある。76・78は浅鉢。76は口径10.1器高4.4cm。内外ヨコ貝殻条痕後外面ヨコナデ・ケンマ、内面ゆるいヨコナデ。77・78は内外ヨコケズリ後ゆるいヨコナデ77は外面ヨコナデ・ケンマ、内面ケンマ。104は曾烟式。外面に短沈線を4段、口唇に刻目を施す。79・105・106・149は阿高式系で79は滑石混入。79・105は外面に凹線、106は突帯上下に凹点文を149は外面に縦方向の平行凹点文を施す。色調は29・37・63・87・101は灰白～褐灰色、31・40・42・49・50・52・53・54・58・59・61・65・75・76・77・78・84・85・88・102・104・105・134・137・140・141・146は赤褐～暗赤褐色、38・41・44・46・74・86・90・91・144・147・148・149は灰黄～黄褐色、39・47・51・55・56・60・

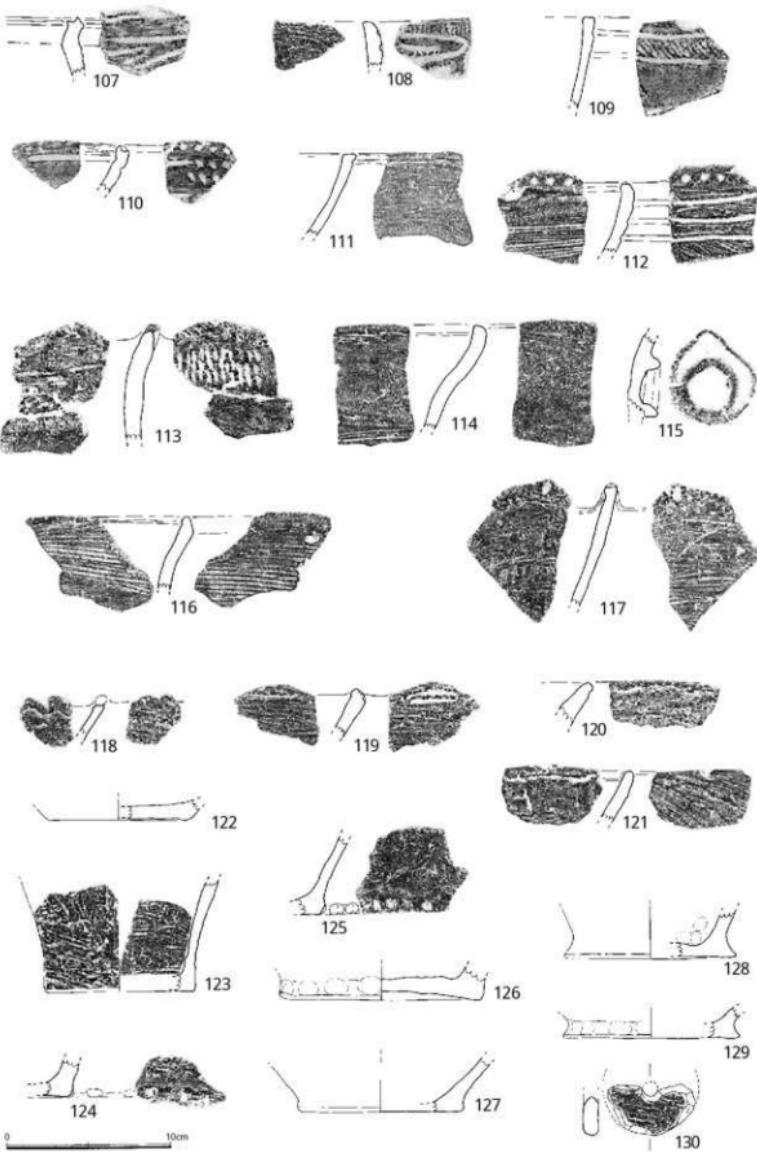
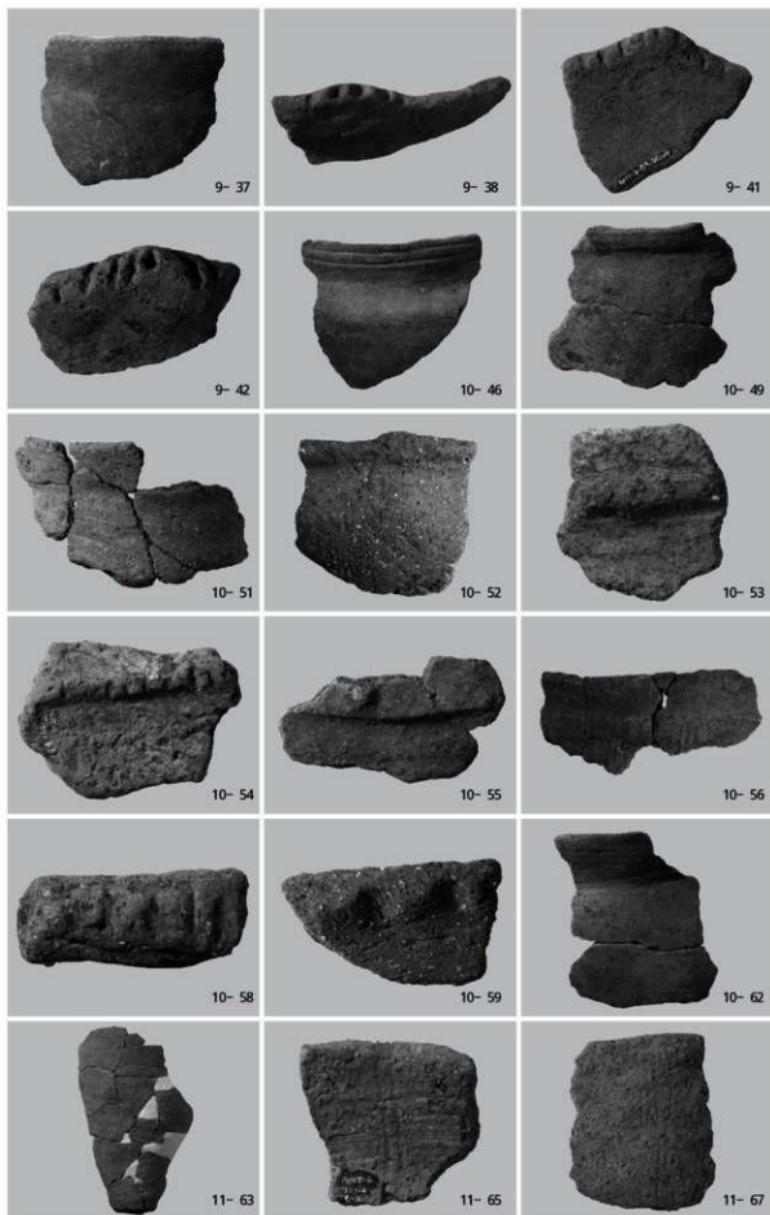


Fig.14 SC104下層出土遺物実測図 (1/3)



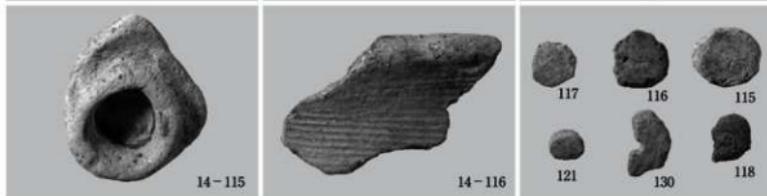
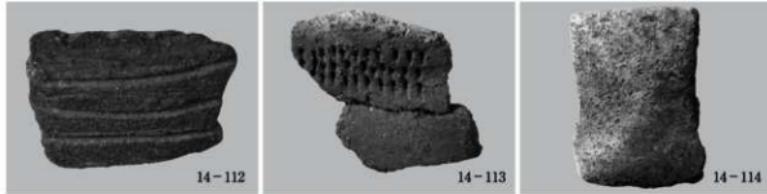
SC104上層出土土器。1



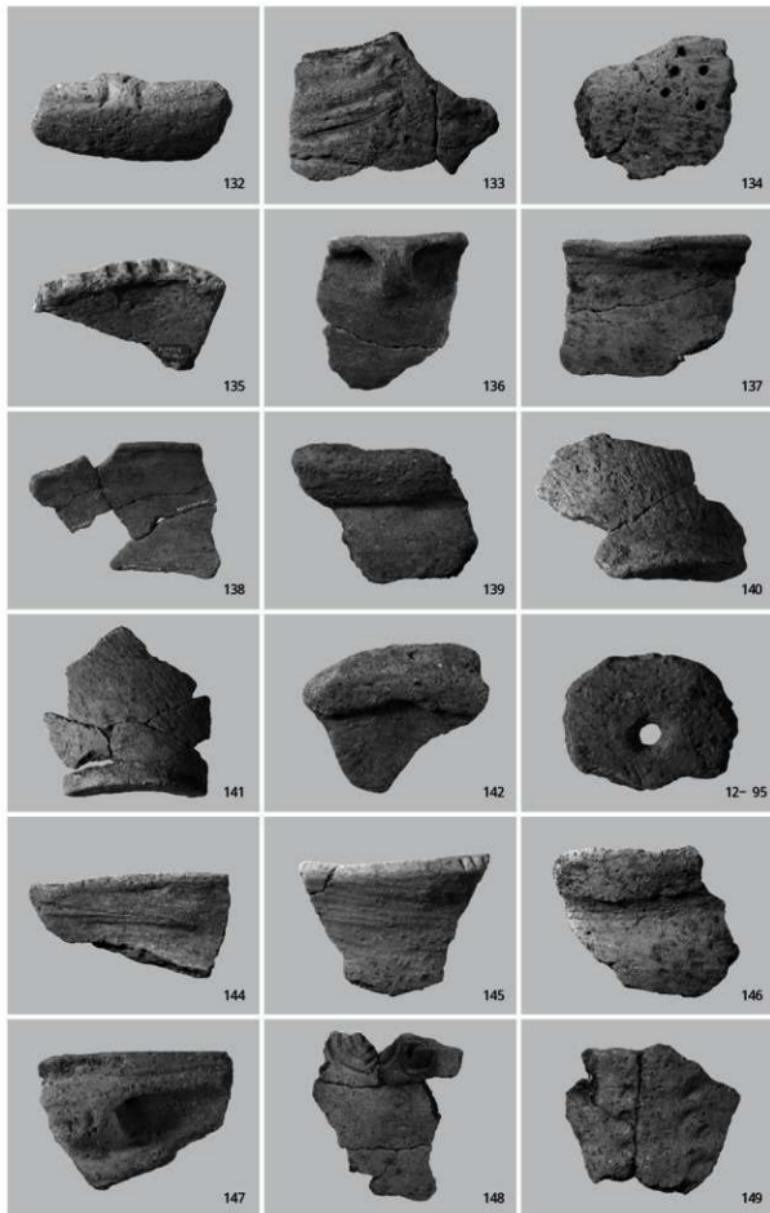
SC104上層出土土器。2



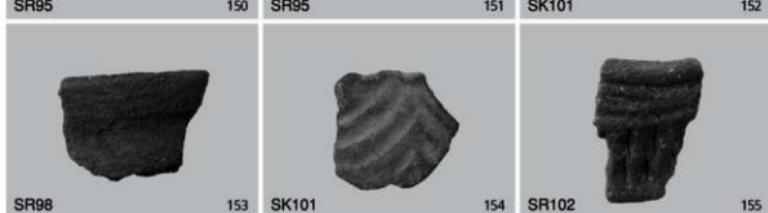
SC104上層出土土器. 3



SC104下層出土土器



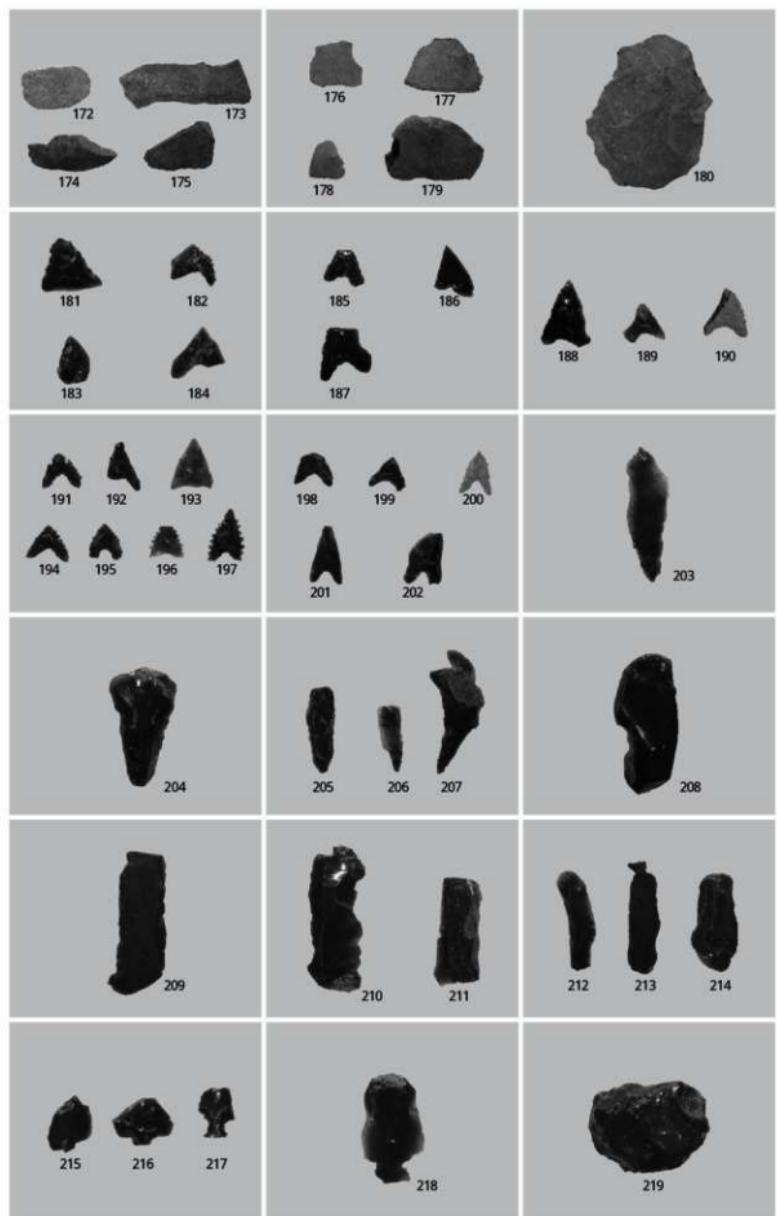
SC104上層出土土器. 4



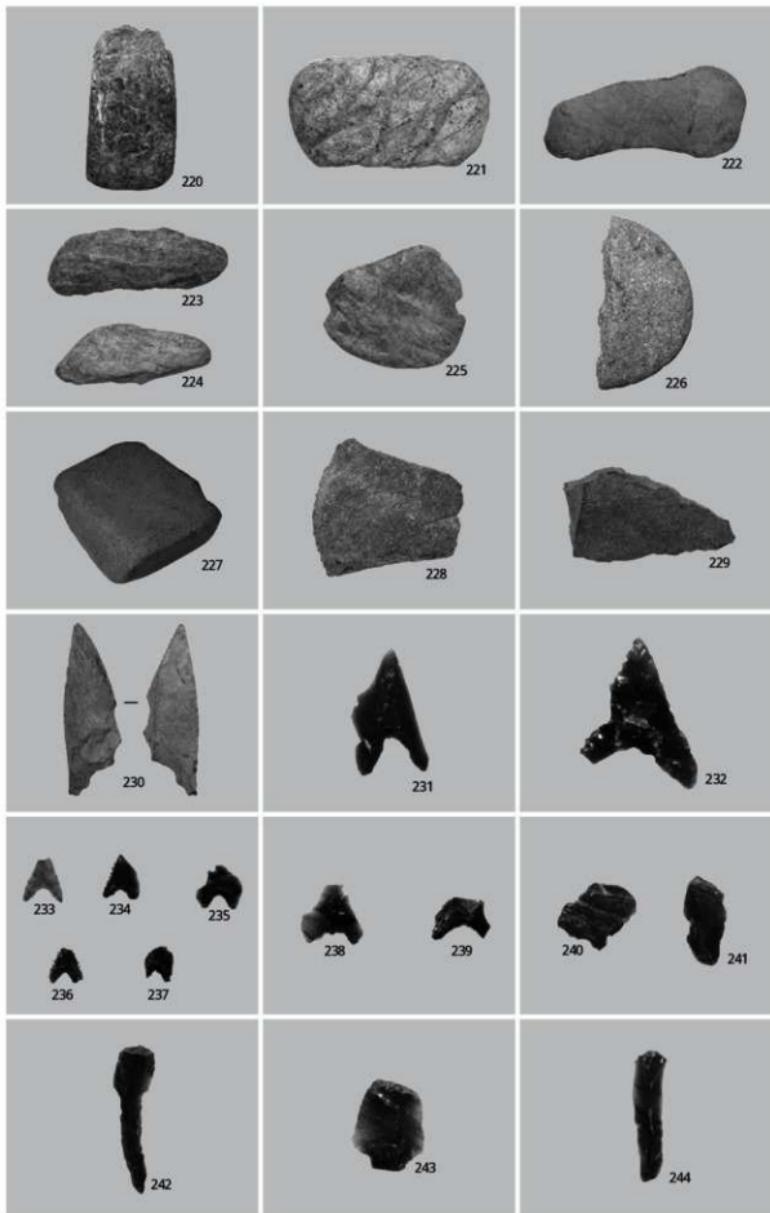
SC104混入遺物



SC104上層出土石器。1



SC104上層出土石器。2



SC104出土下層出土石器

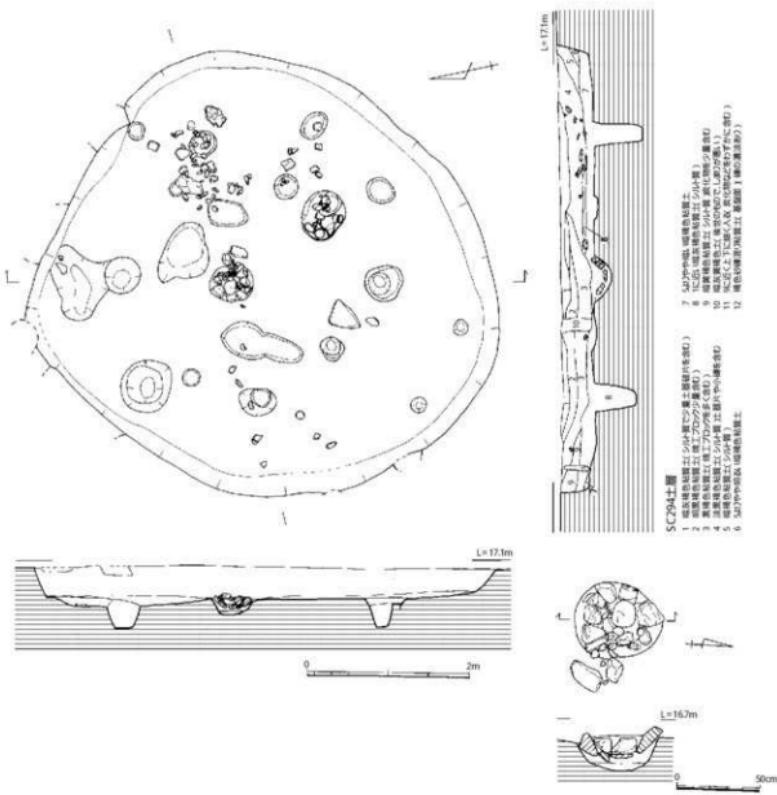


Fig.15 SC294実測図 (1/60 · 1/30)

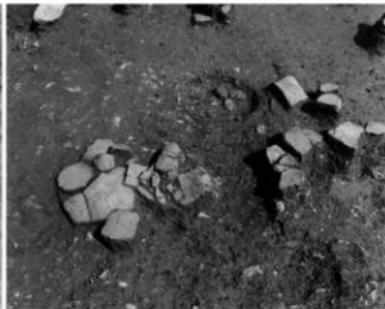
64・67・70・72・73・81・82・89は黄橙色、他は褐色系を呈する。93~100は土器片を敲打で整形した円盤で総計124点出土。粗製土器を用い、それぞれ80・27・12・37・19・24・5・7gを測る。95は中央に穿孔する。土器錘の可能性もある。PL.12・13の156~219は石器。156は緑色片岩の垂飾未製品。全面研磨で右辺折断面が研磨途中。上端に両側から径2mmの穿孔。265×11×8mm。157~159は磨製石斧。157は玄武岩115×50×20mm・82gを測る。刃部長33mm。右刃部欠損で全体を再加工途中、側面・端部を敲打中。158は滑石片岩。折損し刃部幅51厚22長40mm。159は端部片。安山岩で幅40厚31端部幅9厚5mm。160~164は緑色片岩偏平礫の叩石。いずれも長辺上下の中央部を主に使用し弧状に抉れるものが多い。160で74×44×13mm71g、161で103×41×17mm115g、162で118×65×26mm274g、163で94×54×19mm151gを測る。164は欠損。165は砂岩円礫の磨石。69×26×24mmで下面が幅15mm程磨り減る。166は緑色片岩偏平礫の打ち欠き石錘。45×33×10mm23g。167・168は亜角礫を用いた砥石。167は桂化木で88×25×7mm・168は砂岩で116×57×25mm。ともに上下平坦面を砥面とするが自然面の凹凸が残る。169~180はサ



1. SC294 全景（南から）



2. SC294 石組炉（南から）



3. SC294 遺物出土状況（南東から）

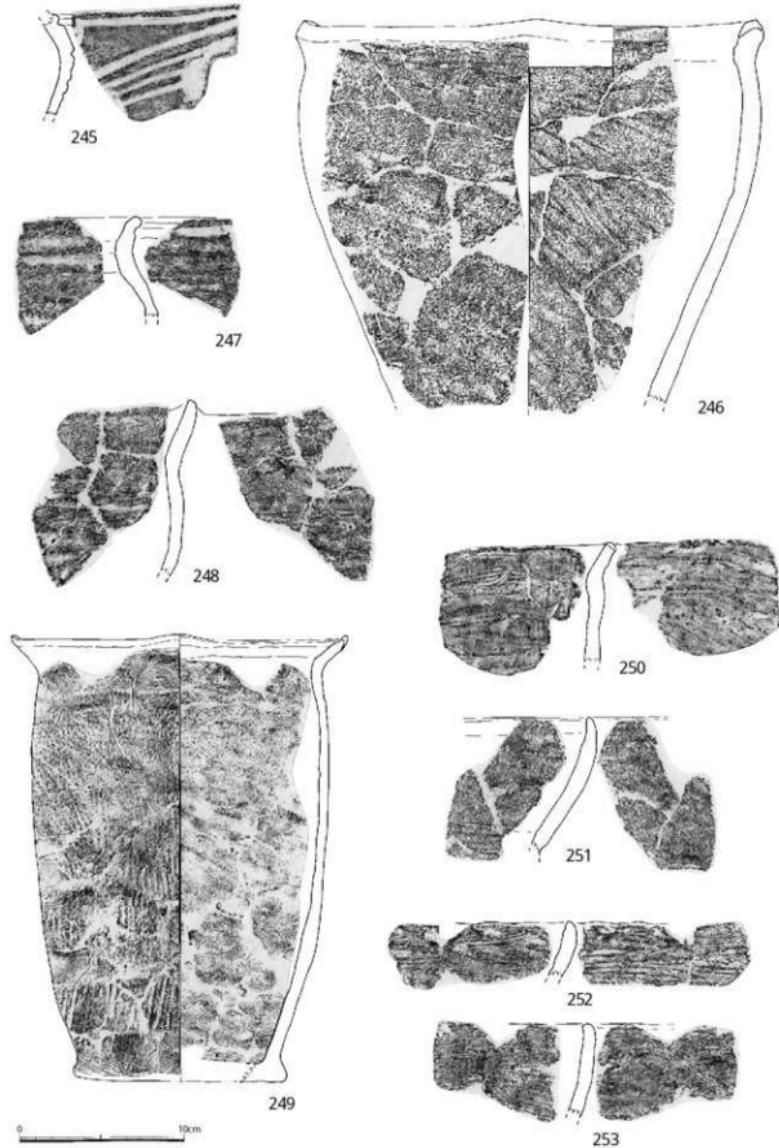


Fig.16 SC294出土遺物実測図-1 (1/3)

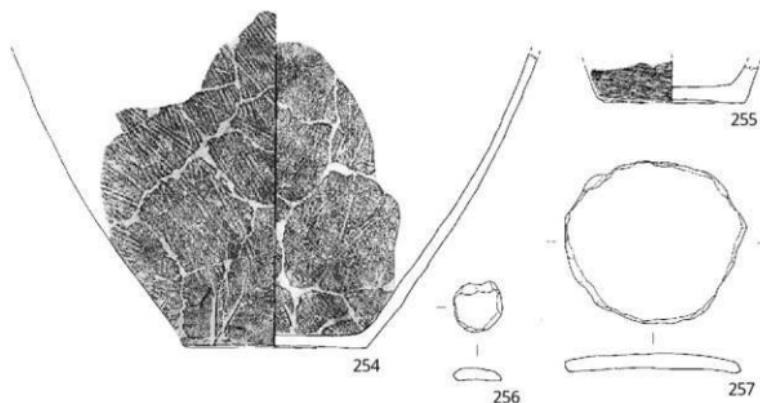
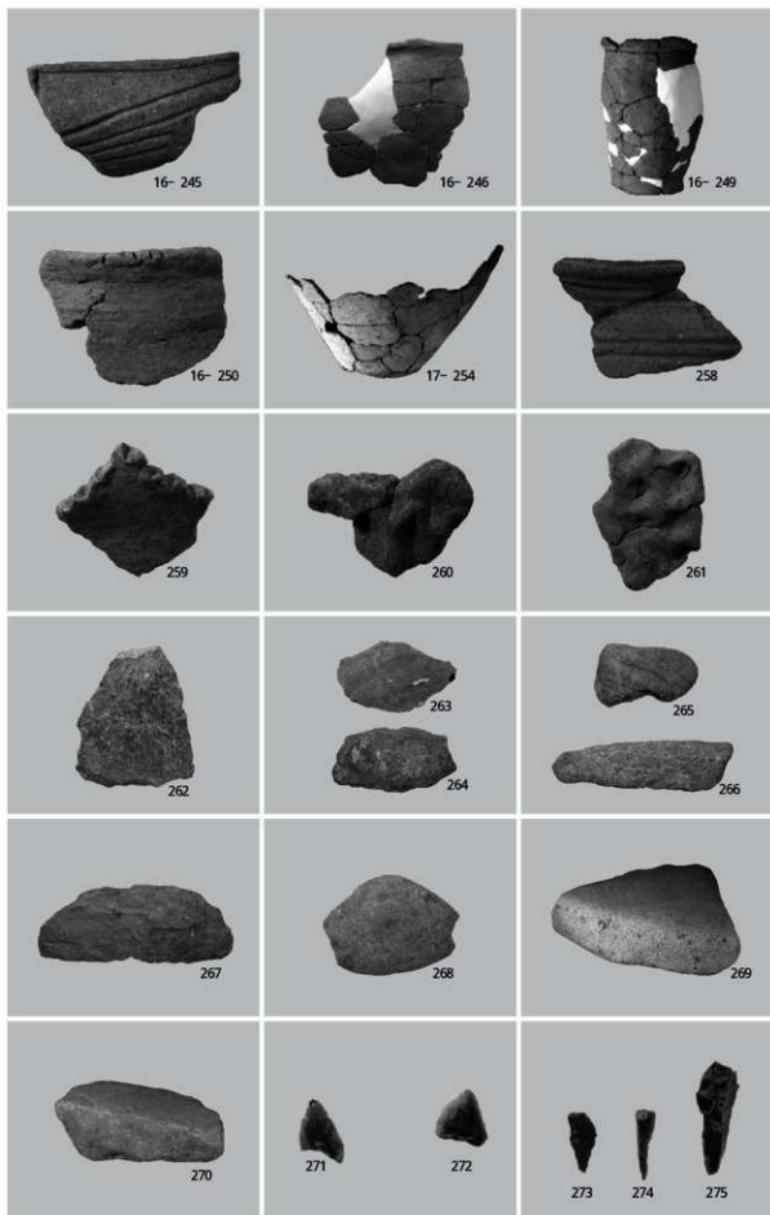


Fig.17 SC294出土遺物実測図-2 (1/3・254-1/4)

ヌカイト。169・171・173は使用剥片。169はノッチを入れ石匙状に・下辺と左辺を使用。長100厚7mm。171は右辺使用。打面打ち欠き。幅45厚11mm。173は下辺・左辺使用。長104厚12mm。170・172・174・179はスクレーバー。174・179はエンド、175・176・178はサイド。170・177は下辺と左辺を調整。長67厚12mm・55×11mm。172はラウンドスクレーバー。全周を調整。50×7mm。174・179は下辺を調整。65×11mm・86×21mm。175は左辺を調整。55×7mm。176は左辺を調整。右辺に使用痕。49×10mm。178は右辺を調整。37×9mm。180は残核。裏は自然面。67×26mm。181-202は石鎌。190・200はサヌカイト他は黒曜石。192・193・196・197・200は両面調整。196・197・200は鋸齒状の調整で中期。185・188・190・191・194・195・198・199は片面に剥離面を、181・182・184・186・187・189は両面に残す。183・201・202は石刃鎌。全長・重量は181で18mm・0.86g、182で11・0.23、183で16・0.36、188で23・1.51、191で13・0.35、193で20・0.75、194で14・0.4、195で15・0.31、197で21・0.55、199で14・0.4、200で16・0.28、201で24・0.55、202で23mm0.67gを測る。203-219は黒曜石で203-206・208-218は石刃素材。203-207は錐。203は上下に整形。長40厚4mm、他は下端に整形。204で31×4mm、205で44×4mm、206で34×4mm。204以外は打瘤折断。207は64×7mm。208・209はサイドブレイド。208は左辺にノッチ。38×6mm。209は左辺に調整・右辺に使用痕。打瘤折断。53×4mm。210-214は石刃。210で長46厚4、211で35×5、212で51×3、213で59×4、214で51×5mm、210は下端211・212は両端折断。213はノッチ。212以外は使用。215-218はつまみ形石器。幅20×厚4、26×7、15×6、12×3mm。219は石刃核。幅9mm+2面の剥離面と上下に階段状、裏に不定方向剥離。31×13mm。

107-244は下層遺物。107-109・146は鐘崎式。107・146は口唇を短く屈曲し弧状沈線。108・109は直口。108は沈線上下に刻目で疑似縄文、109は磨消縄文。111は内外ケンマ。平坦口縁下に沈線。122は底部でケンマ。110-129は粗製土器。貝殻条痕後緩くナデる112・113・114・116・117・119・120・123とケズリ後緩くナデる121、ヨコナデの110・115・118・124-129がある。110・112・113は口唇・口縁下に列点文を施す縁帶文土器。112は外面に沈線3条、113は口唇に刻目。114は口縁端に刻目。115は外面に環状の貼付。116は口縁下に凹点。117・118は口唇に凹点。119は二重短沈線。123-129は底部。脇がややくびれ外湾するものと外底端部が強く張り出す128・129がある。124・125は端部に刻目。107・



SC294出土遺物

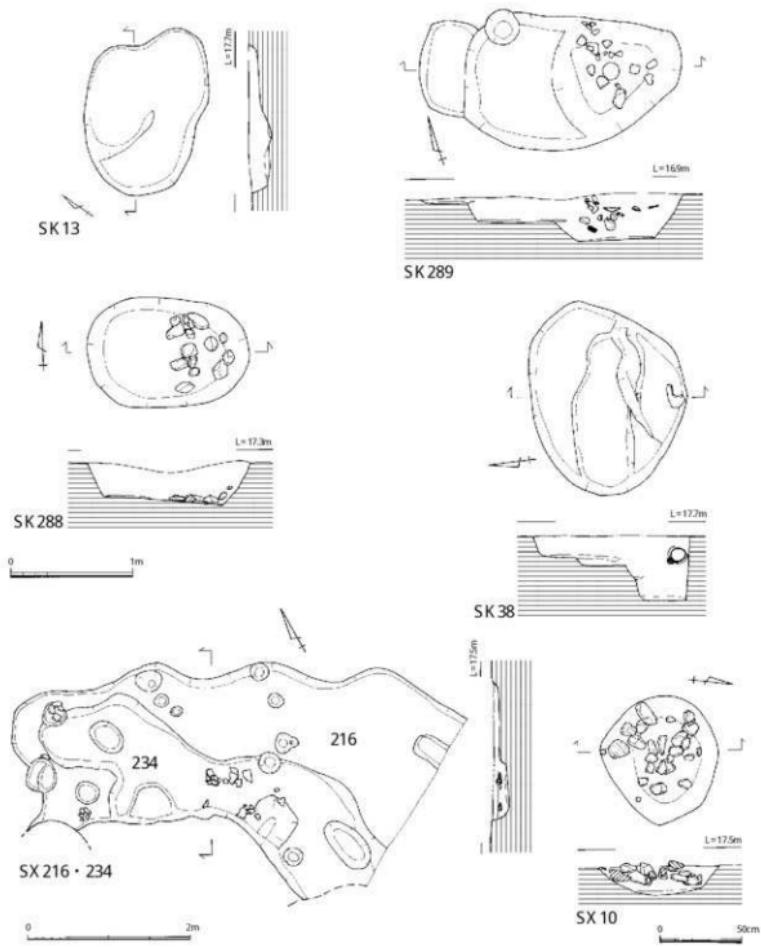


Fig.18 SK13・38・288・289 (1/40) SX10(1/30) SX216・234実測図 (1/60)

127は灰白色、116・130・123・125は橙色、113～115・129は黄灰～黄褐色、他は褐～灰褐色。115～117・121・130は土器片円盤。115で49・116で21・117で7・121で6g。130は径8mmの二次穿孔。220～244は石器。220は磨製石斧。滑石片岩で幅46厚22刃部長16mm。下面が平坦。221～224は緑色片岩偏平礫の叩石。長辺上下の中央部を使用。221で長81厚29mm、222で130×17mm167g、223で115×28mm217g、224で106×26mm148g。225は緑色片岩の打ち欠き石錘。長35厚6mm12g。226は磨石。91×32mmの花崗岩円礫で側縁を叩き両面を磨りに使用。227は花崗岩亜角礫の台石兼石皿。228～230・233はサヌカイト。228はサイドスクレーバー。左辺に刃部。38×5mm。229はエンドスクレーバー。下辺に刃部。52×10mm。



1. SC294 石皿出土状況（西から）



2. SK38 (北西から)



3. SK288 (北から)



4. SK289 (北から)



5. SX10 (南から)



6. SX234 土器出土状況（南東から）

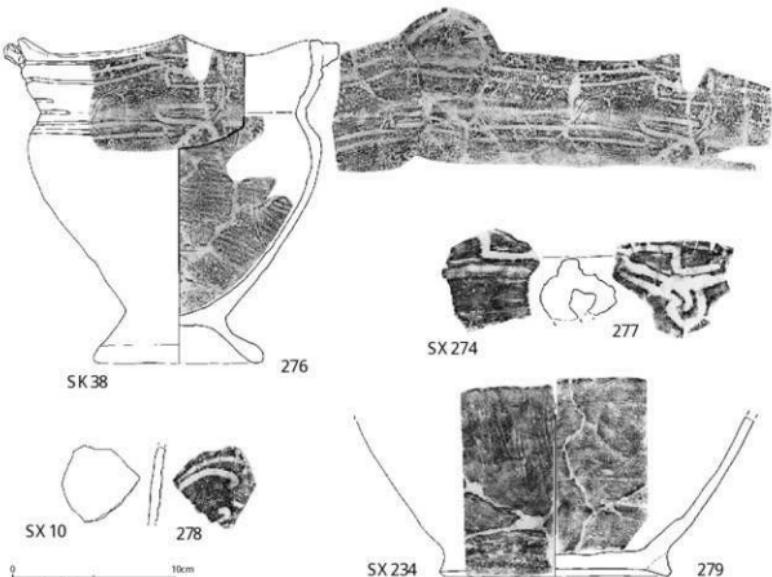
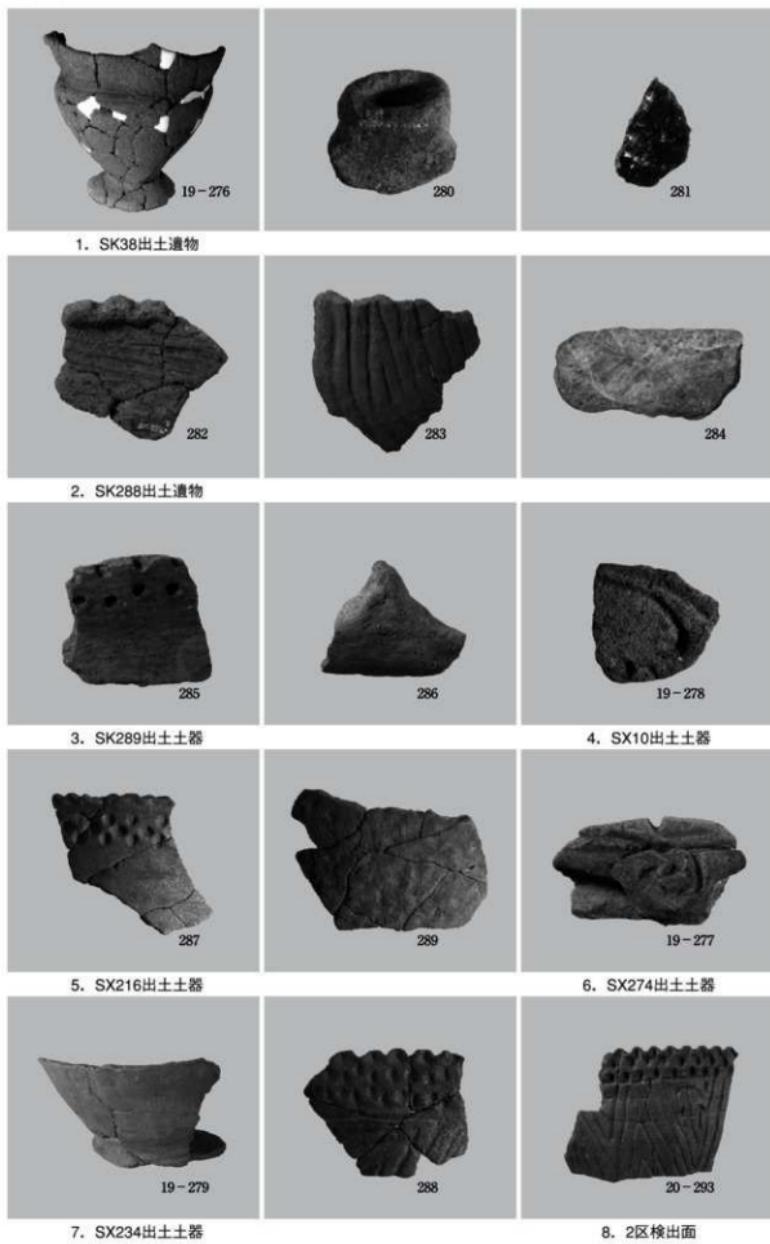


Fig.19 SK 38・SX 10・234・274出土遺物実測図 (1/3)

230は旧石器の未製品。瀬戸内技法の剥片右辺にノッチ。下辺に使用痕。56×19×10mm。231～239は石鎌。233以外は黒曜石。233は両面調整。全長・重量は17mm・0.44g、234・236は一部鋸歯状の二次調整。17mm0.35g、14mm0.28g。231は石刃鎌。29mm0.61g。232は片面に剥離面を他は両面に残す剥片鎌。232で21mm0.59g。235で17mm0.57g。237で15mm0.41gつまみ形素材。238で16mm0.36g。239で11mm0.35g。240～242は石錐。240は右辺に刃部調整。長17厚2mm。241は剥片上半に刃部調整。先端摩滅。20×3mm。242は石刃素材。両側に二次調整で刃部形成。39×3mm。243はつまみ形石器。幅14mm。244は石刃。53×4mm。

S C294 (Fig.15 PL.13) C13グリッドに位置し、大部分を後代の遺構に切られ、断面で確認されたが明瞭でないため、上面遺構処理後の下面検出時に精査した。平面径5.5～5.1mの円形で深さ40cmを測る。中央に径33cm深さ7cmの自然礫による石組炉を設け赤く被熱している。これは裏面も被熱しており改築が成されている。炉内からの自然遺物の検出は無かった。炉を中心にしてとりまく径3.2m程の円形に配された8穴が主柱穴と考えられ据方径64～30深さ65～10cmを測る。南の80cm程の柱穴間に33×28×11cmの三角形花崗岩亜角礫を台石兼石皿(269)として据える。土層は下位に暗褐～暗灰褐色粘質土、上位に黒褐色粘質土が堆積し、遺物は4層から多く出土する。3層は土中に多量の焼土小粒を含む特異な堆積で遺構発見の契機となった。

出土遺物 (Fig.16～17 PL.14) 出土した遺物は、縄文後期土器17.167g、うち磨消縄文・沈線文を施す精製土器174g、条痕文等を施す粗製土器が16.993gで99%を占めるが、深鉢63・89で換算すると約5個体分の出土量しかない。石器は黒曜石製鎌4点・錐2点・石刃2点・つまみ形石器2点、サヌカイト製ス



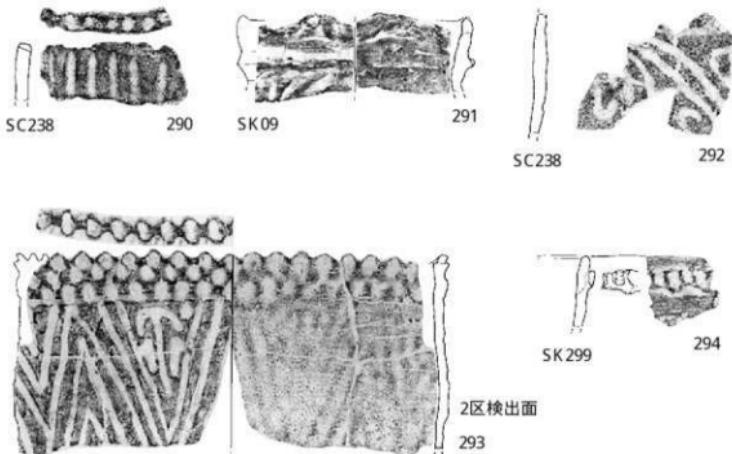


Fig.20 混入その他の縄文遺物実測図 (1/3・293- 1/4)

クレーバー3、变成岩磨製石斧1、变成岩叩石6、石皿3点砂岩2花崗岩1、砂岩凹石1、变成岩石錘1、未製品16点黒曜石2变成岩14、の計39点を検出。他に剥片47・使用痕剥片10・石核3点を検出。石材別では腰岳他の黒曜石63・サヌカイト11・砂岩3・花崗岩1・变成岩23の計101点となり、SC104同様、黒曜石・サヌカイト・緑色片岩等の三郡变成岩の出土が目立つ。

245・258は鐘崎式精製土器。245は外面最上と2・3本目沈線間に磨消繩文・鈍い黄橙色。258は口唇を短く屈曲し口唇・外面に沈線・灰褐色。246・259は粗製土器。246は口径76cm、249は円筒形で口径20器高27cm。250は口唇の一部に刻目・259は山形口縁の口唇に刻目。貝殻条痕を施すもの252とこれをゆるくナデるもの、ヘラナデ後ヨコナデを施すもの246と249内面がある。260・261は阿高式系で261は滑石混入。260は連続凹点下にタテ凹線、261は方形突起下に連続タテ凹点文。色調は、246・249・260は灰白～褐灰色、261は赤褐、250・251・259は灰黄～黄褐色、247・248・252は黄橙色、253は暗褐色。256・257は土器片円盤で総計12点出土。粗製土器を行い、それぞれ8・135gを測る。262・263はサヌカイト。262はエンドスクレーバー。下辺を調整。長39厚6mm、263・264・267は横刃石器。263は下辺を調整、両端欠損、打瘤打ち欠き。83×14mm。264・264は緑色片岩。264は上辺以外を調整。95×54mm。267は未製品。上辺刃潰し、下辺に薄い刃部形成途中。190×25mm。265・266は緑色片岩偏平礫の叩石。上下長辺部を主に使用。265で長84厚13mm86g、266で152×26mm275g。268は緑色片岩偏平礫の打ち欠き石錘。41×10mm16g。269・270は花崗岩亜角礫を用いた石皿。269は380×300×120mm・168は210×120×75mm。271・272は黒曜石製石刃鎌。271は右辺二次調整。272は未製品、長14mm・0.26g。273・275は誰で下端に整形。274は石刃素材、長30厚4mm。274は35×6mm、275はスポール素材で54×11mm。

2) 土壙 1区を中心に14基、内、後期中頃12基の土壙を検出。詳細は巻末一覧表を参照されたい。

SK13 (Fig.18) E2グリッド上面に位置する不整形土壙。遺物は粗製土器8片他が出土。301は縁帶文土器で口唇に2列の列点を施す。内面ヨコ貝殻条痕後全面ヨコナデ。褐灰色を呈す。

SK38 (Fig.18) F5グリッド上面に位置する円形土壙。当初、土壙墓の見込みで掘削したが、床面



遺構混入繩文遺物

が南に下がり階段状を成すため土壤とした。断面観察ベルト中に破損した脚付鉢276を検出した。

出土遺物 (Fig.19・PL.16) 276は体部の1/2を欠く鐘崎式末の半精製脚付鉢。口径19.7cm器高20.1cm。山形口縁下中心飾に矩形つづれ折れの沈線、口縁・肩部に「工」字状沈線。直交方向の口縁下に瘤状の把手を施し沈線で飾る。外面ヨコナデ・緩いケンマ、下半が被熱で明赤褐色・脚は黄灰色。内面ヨコ貝殻条痕後ヨコナデ。黒灰色を呈す。280は粗製土器口縁筒型突起。長径4cmでナデ。灰褐色。281は黒曜石製鏃。全周に二次調整。表剥離面・裏表皮を残す。全長19厚5.5mm126g。

SK288 (Fig.18) B12グリッド下面検出の橢円形土壤。西床面に自然礫十数個を置く。後期。

出土遺物 (PL.16) 282は緩い内湾口縁口唇に刻目。内面肥厚、ヨコ貝殻条痕。外面ヨコナデ、赤橙色。238は滑石混入阿高式土器。大形で外面にタテ凹線、内面ナナメ条痕後ヨコナデ。断面若干の「S」字。暗赤褐色。284は緑色片岩偏平礫叩石。上下辺を使用。幅36厚14mm。折損。

SK289 (Fig.18) B12グリッド下面検出の階段状不整形土壤。深部に自然礫を多く投げ込む。

出土遺物 (PL.16) 286は緩いキャリバー状口縁口唇と下2段に列点文。ヨコ貝殻条痕後外面・口縁内面にヨコナデ。灰褐色。286は緩い内湾山形口縁。口唇を肥厚。ヨコナデ。褐灰色。

3).集石遺構SX10 (Fig.18) E4グリッド上面に位置する径80cmの円形土壤。内部に多くの自然礫を集め。柱穴根固めの可能性もあるが、出土した縄文土器数片を決め手とした。278は沈線文精製土器山形口縁で蔽手状の2本単位の沈線で飾る。内外面ヨコナデ、黄灰色を呈する。

4).自然流路SX216・234 (Fig.18) B10グリッド上面に位置する自然流路。幅1.3mの中期SX234に幅3mの後期SX216が重なる。279・288はSX234出土滑石混入阿高式。大形で279は底径14.2cm。赤褐色。外面貝殻条痕後内外面ヨコナデ。288は同口縁か。口唇凹線刻目下に3段の凹列点、以下に横位の複線山形凹線。内面ヨコケズリ後内外ヨコナデ。暗褐色。287・289はSX216出土阿高式。287は緩く外反。肥厚した口唇凹線刻目下に低い凸線、以下3段の凹列点、横位の凹線4段。内面ヨコ貝殻条痕後内外ヨコナデ。滑石混入で赤褐色。289は大形品で外面全面凹列点、内面ナナメ貝殻条痕後内外ヨコナデ。灰褐色。他に後期条痕文土器片多数。

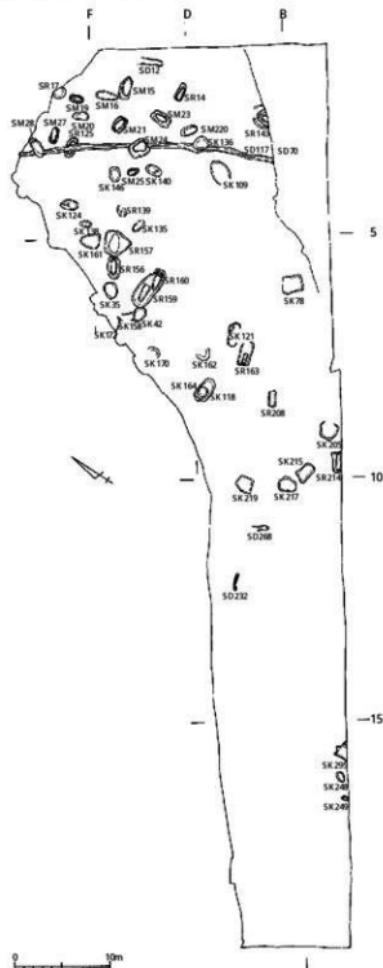


Fig.21 弥生前期遺構分布図 (1/500)

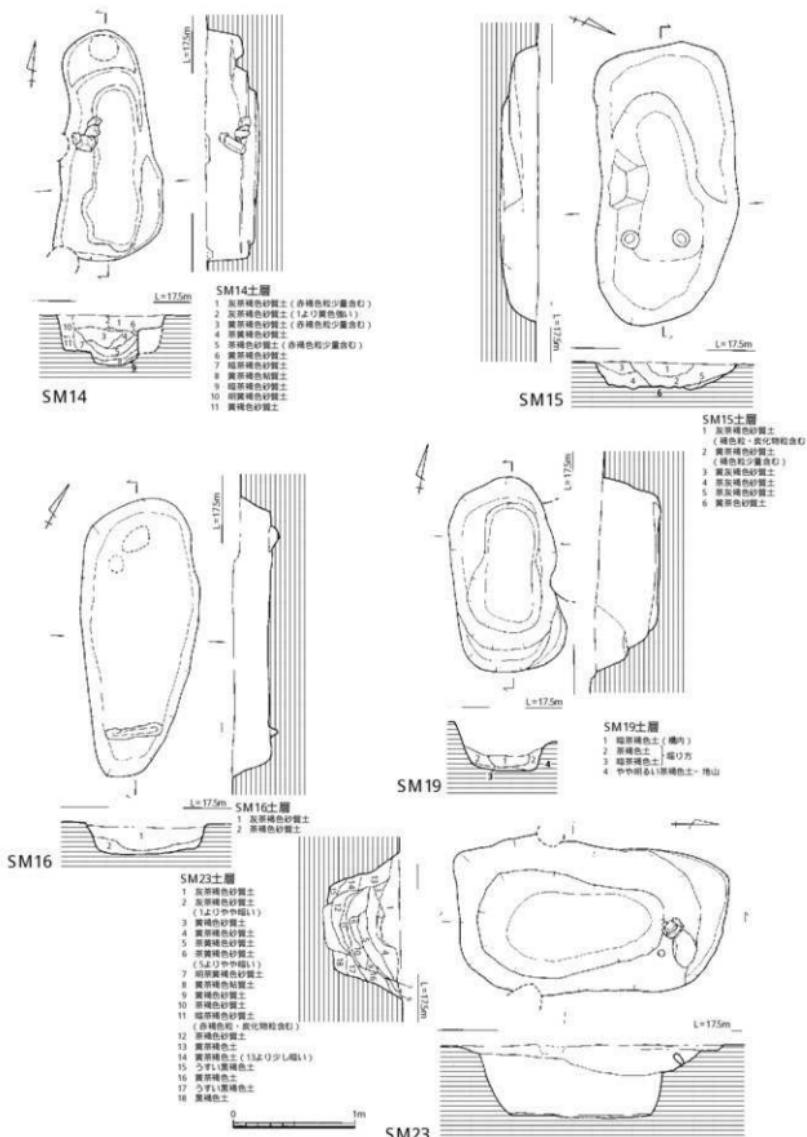


Fig.22 SM14・15・16・19・23実測図 (1/40)

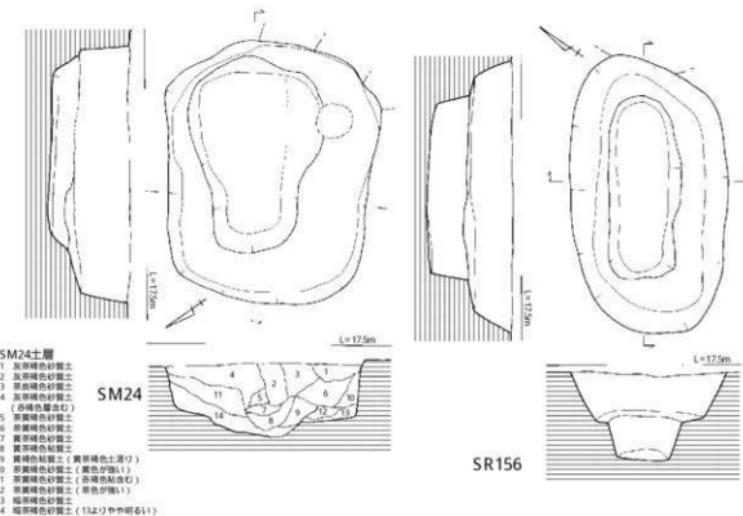


Fig.23 SM24・125・143 SR156実測図 (1/40)

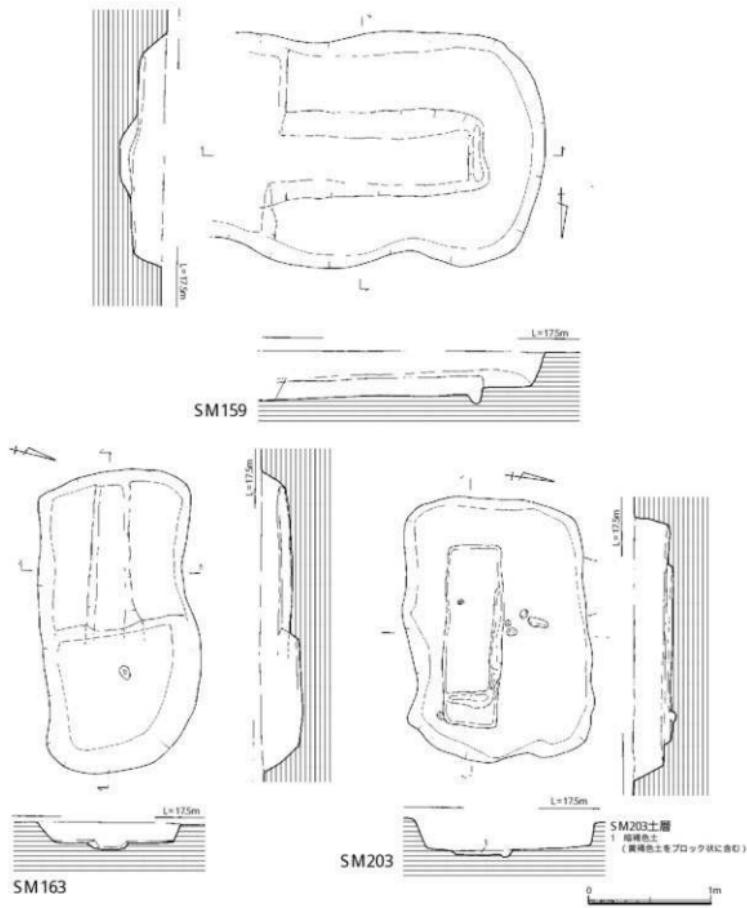
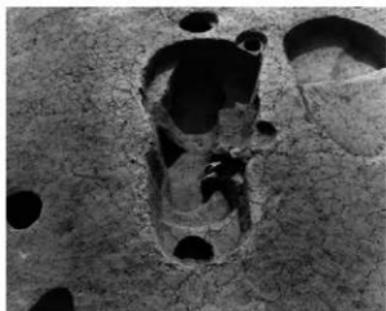


Fig.24 SM159・163・203実測図 (1/40)

5). その他の遺物 Fig.19・PL16・17は混入・その他の遺物。277は包含層出土鍾崎式土器。横状把手上面に渦巻き文、両側に「工」字様沈線。内面にヨコ貝殻条痕後内外ヨコナデ、暗灰褐色。290～293・295・298・300は阿高式土器。290は爪圧痕残る口唇凹線刻目下にタテ凹線。ヨコナデ、橙色。291は口径13.8cm。山形口縁外面にヨコ沈線3本。突帯下に、凹点を中心飾にタテ重弧凹線。ヨコナデ、滑石混入、明赤褐色。292は重弧凹線に麻手凹線。ヨコナデ、暗赤褐色。293は口径35.4cm。口唇凹線刻目下に3段の凹列点、以下に「T」字様凹線を中心飾の複線山形凹線。内面は凹点・線の押厚で張る。ヨコナデ、滑石混入で赤褐色。295は緩いキャリバー状口縁の鐘形突起下に上下向きの重弧凹線。赤褐色。



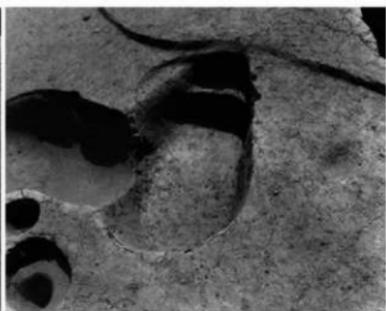
1. SM14 (東から)



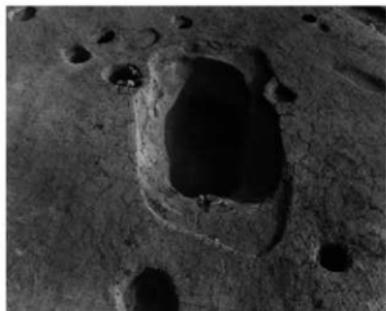
2. SM15 (南東から)



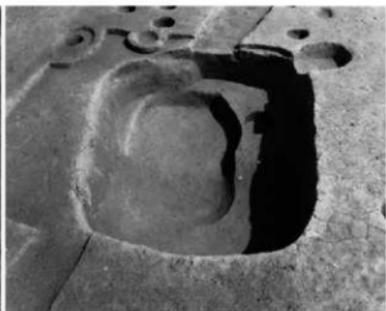
3. SM16 (北西から)



4. SM19 (北西から)



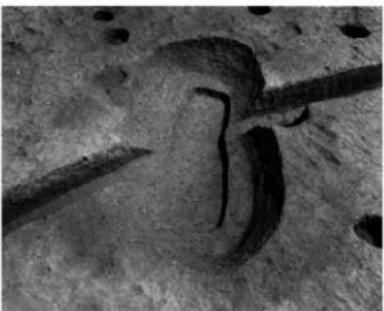
5. SM23 (北から)



6. SM24 (西から)



1. SM25 (南東から)



2. SM125 (西から)



3. SM143 (西から)



4. SM159 板痕跡 (南から)



5. SM159 (北から)



6. SM163 (東から)

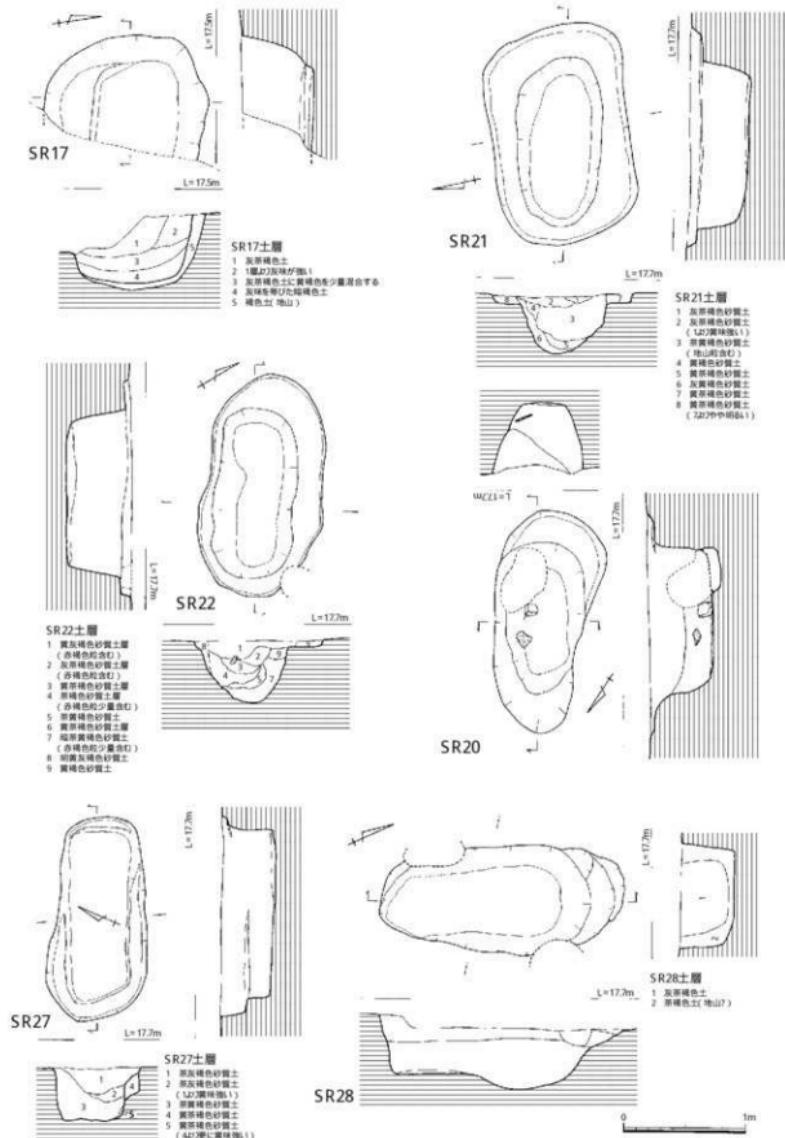


Fig.25 SR17・20・21・22・27・28実測図 (1/40)

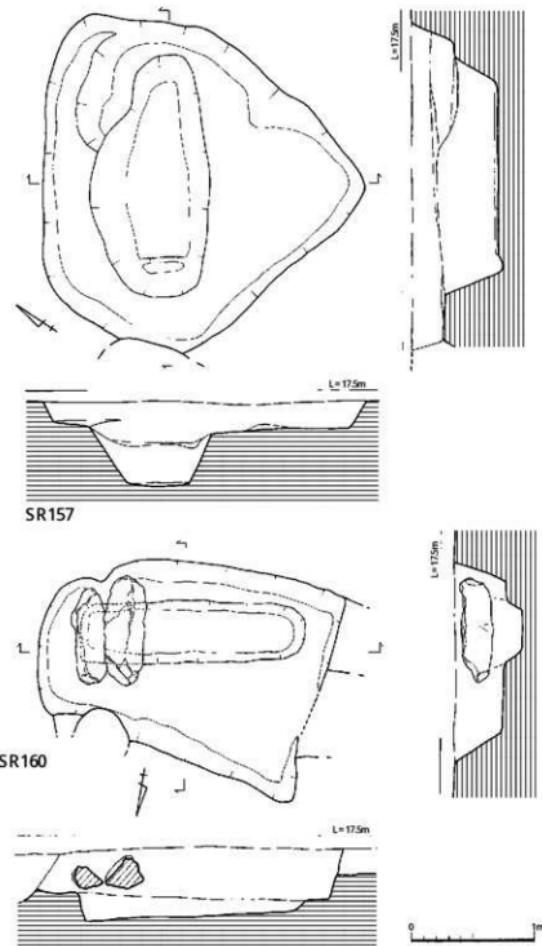


Fig.26 SR157・160実測図 (1/40)

部が鋸歯状を成す。全長23幅14厚3mm0.71g。308は旧石器ナイフ型石器未製品。瀬戸内技法横長剥片素材で、右辺と下辺に二次調整途中。32×16×8mm3.65g。309は緑色片岩製〔T〕字形の全磨製石器未製品。全面を細かな敲打で整形・調整。一部ケンマ作業にかかっている。81×51×13mm80g。

298は「く」字屈曲頸部に断面三角の橋状把手、凹線で飾る。ヨコナデ、暗赤褐色。300は口唇・内外に沈線、爪圧痕残る凹列点2段。赤橙色。296～303は後期土器。296はキャリバー状口縁外面にヨコ短沈線3段。ヨコナデ、灰褐色。297・303は鐘崎式土器。297は小形で緩いキャリバー状口縁下に橋状把手。渦巻き文で飾る。上下に沈線多數。ヨコナデ、褐灰色。303は大形。短く外反する口縁の口唇と外面下に渦巻き文、複線刻目・沈線文。ヨコナデ、黄灰色。299・301・302は縁帶文土器。299は肥厚する口唇・口縁下に列点文。内面ヨコ貝殻条痕後内外ヨコナデ、褐灰色。301は口唇に二重列点。ヨコナデ、褐灰色。302は山形口縁外面に環状の貼付。列点・刻目で飾る。ヨコナデ、灰黄色。304・305は晩期黒川式浅鉢。304は口唇「リボン」状突起内外下に沈線・焼成前穿孔。黒灰色。386は肩部が「く」字屈曲。口唇内面肥厚。ヨコケンマ、褐灰色。294・206は夜臼式深鉢。口縁下突帯に貝殻腹縁刻目。ヨコナデ、褐灰色。307～309は石器・石製品。307・308はサヌカイト製。308は中期打製石鏃。両面調整で刃

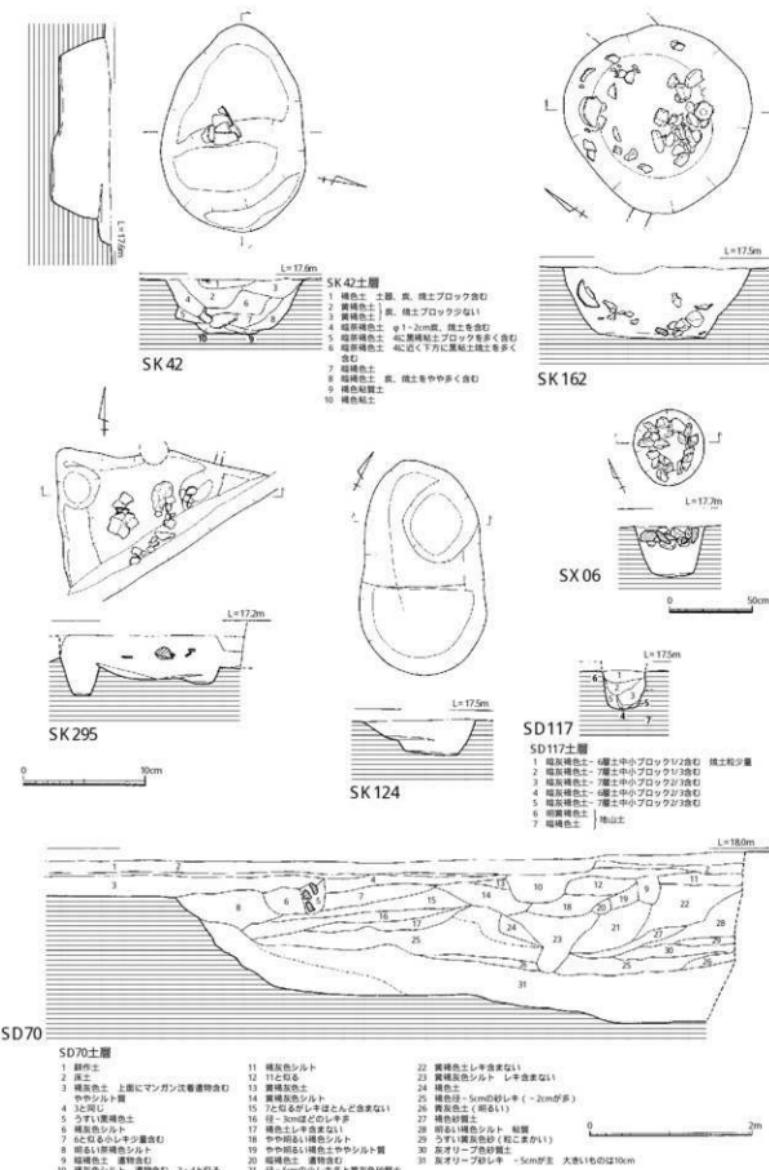
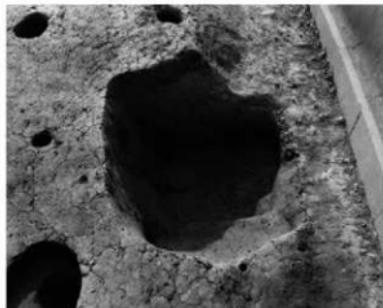
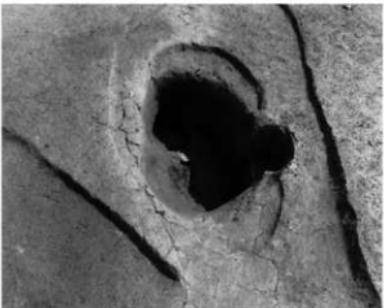


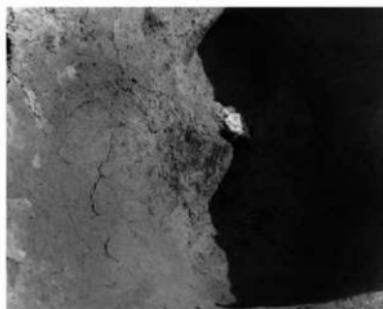
Fig.27 SK 42・124・162・295・SD 117 (1/40) SX 06 (1/30) SD 70 (1/60) 実測図



1. SR17 (東から)



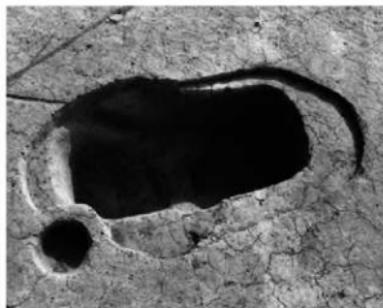
2. SR20 (北西から)



3. SR20 木質 (北西から)



4. SR21 (北から)



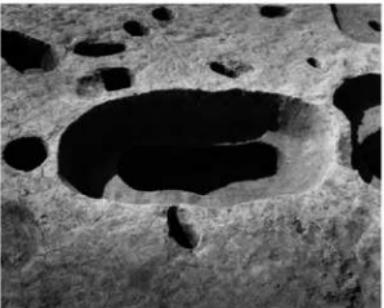
5. SR22 (北東から)



6. SR27 (南西から)



1. SR28 (北から)



2. SR156 (南東から)



3. SR157 (東から)



4. SR160 (北から)



5. SK42 (北から)



6. SK42 土器出土状況 (東から)



1. SK124 土層断面（南東から）



2. SK124 (東から)



3. SK162 (東から)



4. SK295 (北西から)



5. SX06 (東から)



6. SD70 土層断面（南から）

### 3. 弥生前期の調査 (Fig.21)

弥生前期は、1区を中心に、木棺墓11基・土塙墓11基の墓群と、土塙30基、溝・自然流路5条、集石遺構1基を検出した。墓群は丘陵の縁部に沿って分布し、東を丘陵稜線に沿って前期後半の自然流路SD70が北流し、木棺墓を切る。各遺構の詳細は巻末の遺構一覧を参照されたい。

1) 木棺墓SM (Fig.22~24 PL18・19) 北端部に多く分布する。二重墓壙で土層断面に立ち上がりが認められるもの (SM14・15・19・23・24) と板痕跡が青黄色にグライ化して残るもの (SM16・143・159・203) 主体部が浅いもの (125・163) を木棺墓とした。地山との判別が難しく、検出時に掘り過ぎているものも少なくない。SM203は明らかな組み合わせ式木棺で、SM16・143は小口板のみの可能性もある。SM14・15・19・23・24・159は割竹形の可能性も考えられ、159は木質痕が掘方上面で矩形に検出されたが板痕跡は小口のみ。頭位は主体部が矩形・広い・副葬品出土の条件で定めた。8基が稜線直交方向に頭位をとる。時期は出土遺物を中心に、遺構切り合い、方位で定めたので、時期が下る可能性も含む。少量の弥生土器・夜臼式深鉢片を出土し、SM25・143で板付II B式、他はII A式が多い。SM14・15・16・24からは1g前後の大形打製石鏃を出土しており、戦時色が強い。

出土遺物 (PL.23) 310はSM14出土サヌカイト製石鏃。両面調整で $22 \times 18 \times 3.5$ mm 1.3g。311・312はSM15出土。311は板付II A式の壺肩部。無段の貝殻重弧文を2段施す。暗灰褐色。312は黒曜石製五角形石鏃。両面調整で $21 \times 14 \times 3$ mm 0.9g。313はSM16出土黒曜石製石鏃。両面調整で $20 \times 17 \times 4$ mm 1g。319・320はSM23出土。319は夜臼II式深鉢。突帯に太い刻目。ヨコナデ、黒褐色。320は板付II A式櫛。口唇全面～下間に刻目。口縁下タテハケ後以下にケズリ様のナナメハケ。暗灰褐色。321はSM24出土黒曜石製石鏃。両面調整で $17 \times 17 \times 5$ mm 1.2gを測る。

2) 土塙墓SR (Fig.25・26 PL20・21) 木棺墓と混在し、丘陵端部に沿って北部に多く分布する。二重墓壙で、主体部に板痕跡が無く深さ30cm以上で深いものを土塙墓とした。掘方・主体部平面が橢円形を成すものが多い。目張り粘土は確認できていないが、木蓋が多いと思われ、SR20では板材の一部を検出している。SM160は頭部のみに長方形の自然礫2石で蓋の一部を構成する。頭位は稜線に近いものと直交方向に近いものとほぼ半数となる。出土遺物も木棺墓と同様、明らかな副葬品は無く、少量の弥生土器・夜臼式深鉢片と大形打製石鏃を出土している。

出土遺物 (PL.23) 314はSR17出土緑色片岩の有溝石鍤。左辺を欠く。 $36 \times 13$ mm。315～317はSR20出土。315・316は夜臼II式深鉢。315は突帯に太い刻目。ヨコナデ、赤褐色。316は細い突帯に貝殻刻目。ヨコナデ、暗灰褐色。317は板付II B式の壺肩部。刻目突帯下に無段の貝殻羽状文。黄橙色。318はSR22出土中粒砂岩亜角礫の砥石。上面のみ使用。 $121 \times 48 \times 23$ mm。322はSR28出土サヌカイト製石鏃。両面調整で右脚を欠く。 $25 \times 3$ mmを測る。323はSR157出

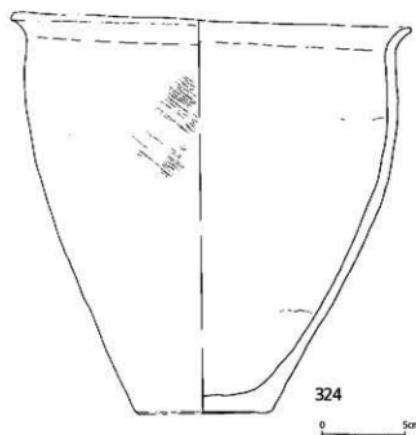


Fig.28 SK 42出土遺物実測図 (1/3)

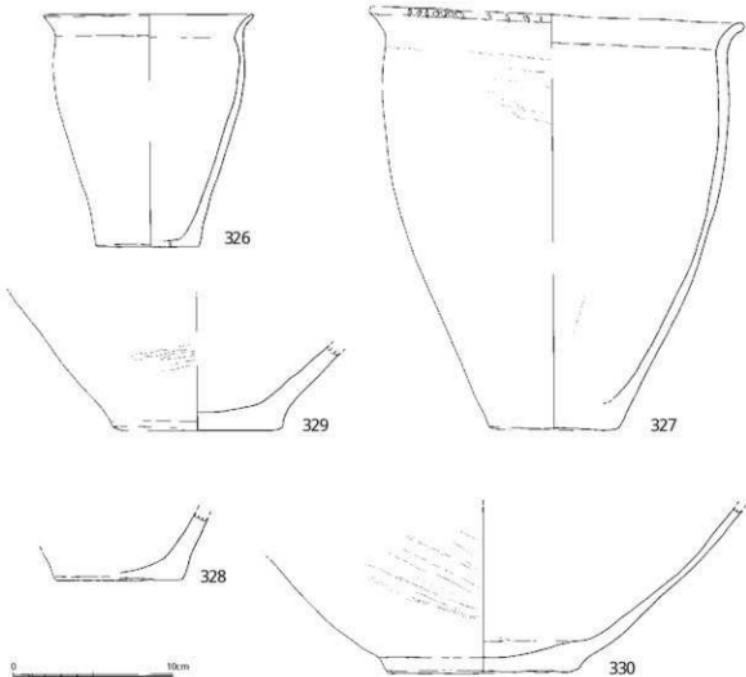


Fig.29 SK 162出土土器実測図 (1/3)

土黒曜石製石鏃。両面調整で一部剥離面を残す。15×145×35mm 0.57gを測る。

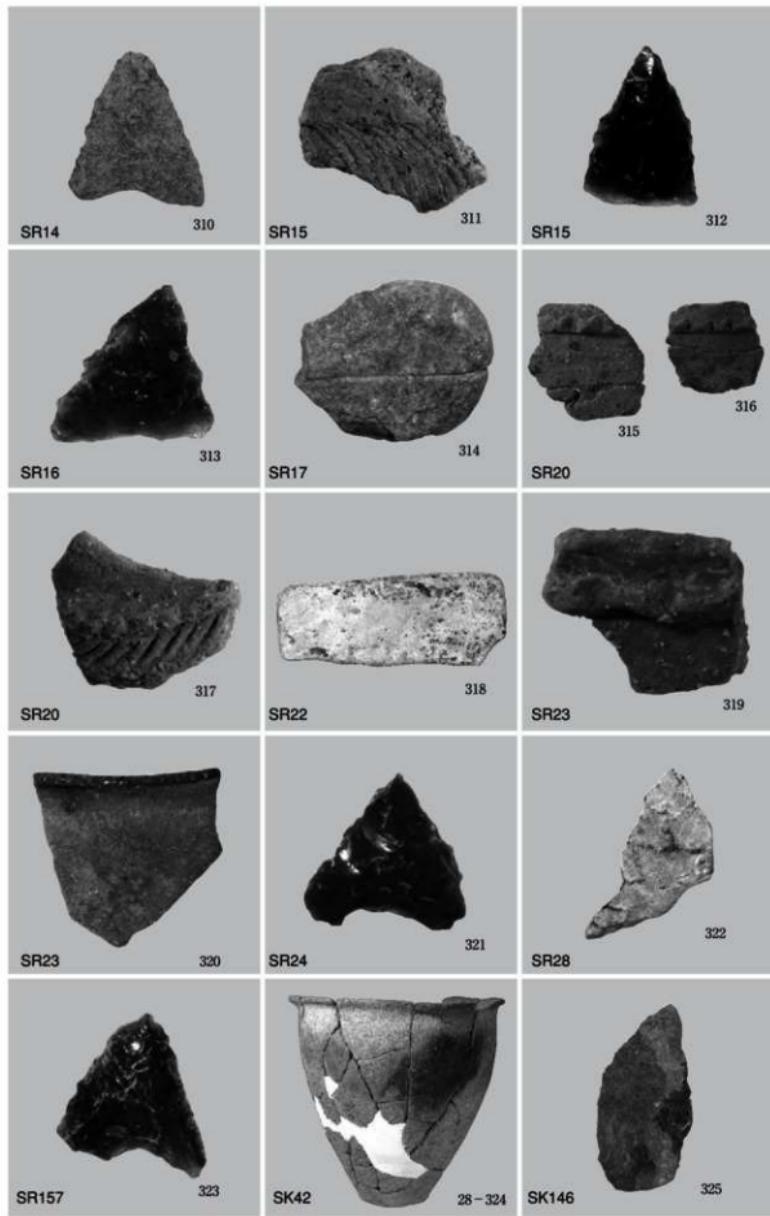
3) 土壙SK (Fig.27 PL21・22) 調査区中位を中心で分布する。遺物は小片が多く時期比定が難しい。SK 42・76・162・295は貯蔵穴の可能性もある。SK 124は上部に径60cm深さ20cm程小礫を集石する。

出土遺物 (Fig.28・29 PL23・24) 324はSK 42下位出土板付IIA式壺。口径24.5cm高24.7cm。326・330はSK 162出土板付IIA式土器。326で13.2×14.5・327で23.5×25.5cmを測る。325はSK 146出土サヌカイト製石鏃。縦長剥片に両面調整で一部表皮を残す。30×15×6mm 3.16gを測る。331・332はSK 295出土板付IIA式壺。331で口径23cm高26cm。ともに内外ヨコナデ口唇に刻み目。

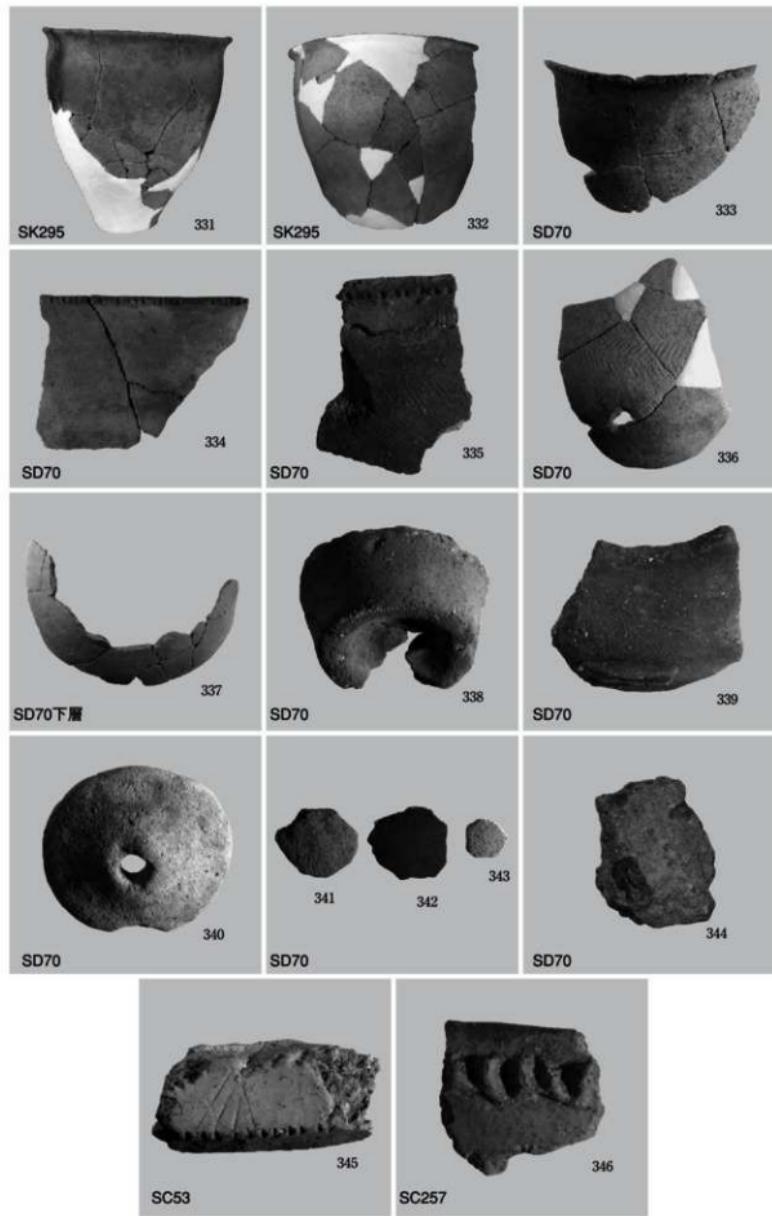
4) 溝・流路SD (Fig.27 PL22) 調査区北端部で木棺墓と切り合う小溝SD 117を、東部にこれを切る自然流路SD 70を検出している。SD 117からは弥生・夜臼式小片、SD 70からは板付II B式が出土。

出土遺物 (PL24) 333～344はSD 70上層出土。335は野黒坂タイプ。336は羽状文壺。338・339は須玖I式。340は土製紡錘車。径47mm 15g。341～343は土器片円盤。42・38・10g。344は流出甕。24×19×13mm。下面に土砂付着。337は下層出土板付II B式壺。肩部に沈線3条。

5) 集石構造SK 06 (Fig.27 PL22) E2グリッドに位置する径・深さ62cmを測る。上位に10cm強の空隙をとって自然礫を詰める。柱穴の根固めの可能性があるが、夜臼・弥生土器片を少量出土している。



砾生前期出土遺物—1



弥生前期出土遺物一2

#### 4. 弥生中期の調査 (Fig.30)

弥生中期は、前期に引き続き北半部の1区を中心に墓群が分布し、櫛棺が初めて出現する。土塙等の生活遺構は全域に拡大する。検出した遺構は、甕棺墓31基・木棺墓8基・土塙墓9基の墓群と祭祀土塙3基、土塙13基、溝2条を検出した。墓群は数基～10基前後の6箇所程の塊状に分布する。東の自然流路SD70は中期中頃までに埋没し、上面に甕棺等の遺構が分布する。各遺構の詳細は巻末の遺構一覧を参照されたい。

1) 甕棺墓ST (Fig.31～39 PL.25～33) 1区を中心として5～6の塊状に分布する。小形棺23基・大形棺8基・单棺10基(甕9・壺1)・合口17基(甕+甕12・甕+壺4・甕+高环1)・不明5基からなり、成人棺の大半は土塙・木棺墓が補っているようである。明確な副葬品は無いが、ST 69から石鏡2点が出土している。

中期初頭6基(ST 18・54・83・174・202・204)は墓群の外縁を取り巻くよう散漫に分布する。ST 18・204は大形棺。4基が稜線方向に、2基がこの直交方向前後に頭位をとる。埋置角(土器主軸の水平からの傾斜角度)はST 54以外は1°～15°の水平に近いが、ST 83は口縁が3°下がる。中期前半8基(ST 3・7・37・39・40・46・48・137)は1区西部で6基が群を成し、この北東に2基分布する。ST 137のみ大形棺。6基が稜線方向に、2基がこの直交方向前後に頭位をとる。埋置角はST 48以外は初頭と変わらず2°～19°を測る。中期中頃12基(ST 1・4・5・8・43・49・71・86・122・129・130・144)は1～6基が群を成し、4つの塊状に分布する。ST 5・71・129・130の4基が大形棺で比率が高い。4基が稜線方向に、2基がこの直交方向前後に頭位をとるがまとまりは無い。埋置角はST 8以外は2°～30°を測り角度がより大きいものが増える。中期後半5基(ST 69・85・88・119・131)は1区東部で1・4基の2群が南北方向に分布する。大形棺は無い。頭位にまとまりも無い。埋置角はST 45以外は12°～20°を



Fig.30 弥生中期遺構分布図 (1/500)

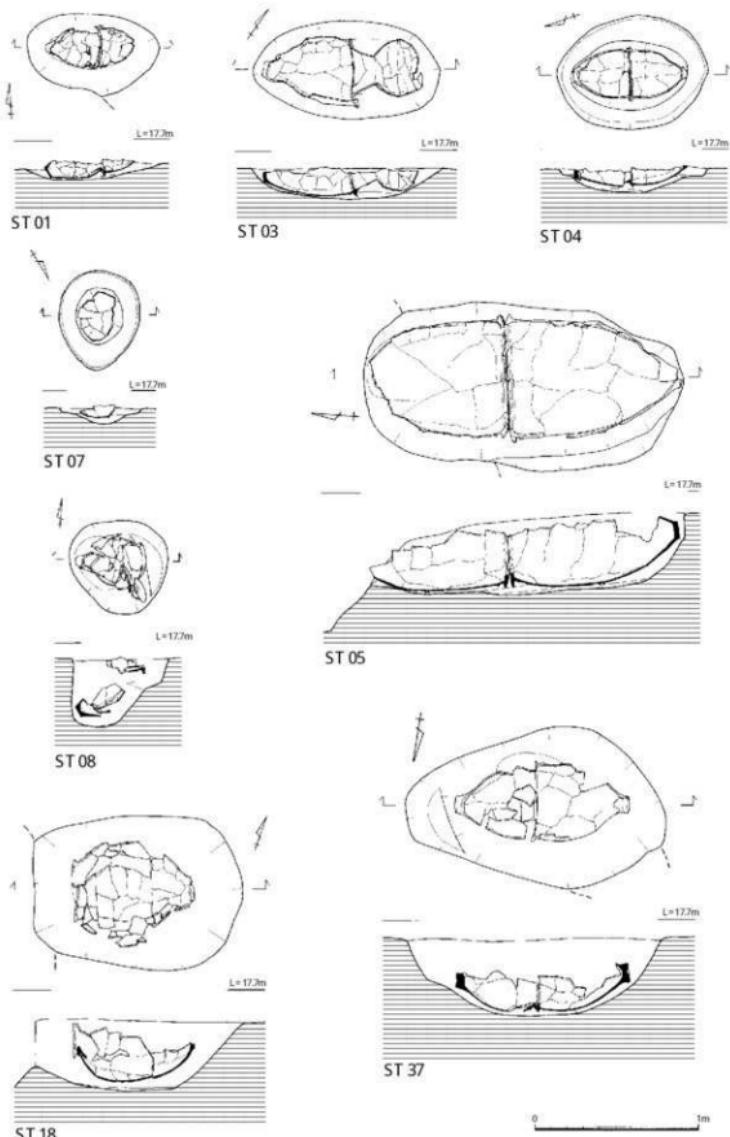


Fig.31 ST 01・03・04・05・07・08・18・37実測図 (1/30)

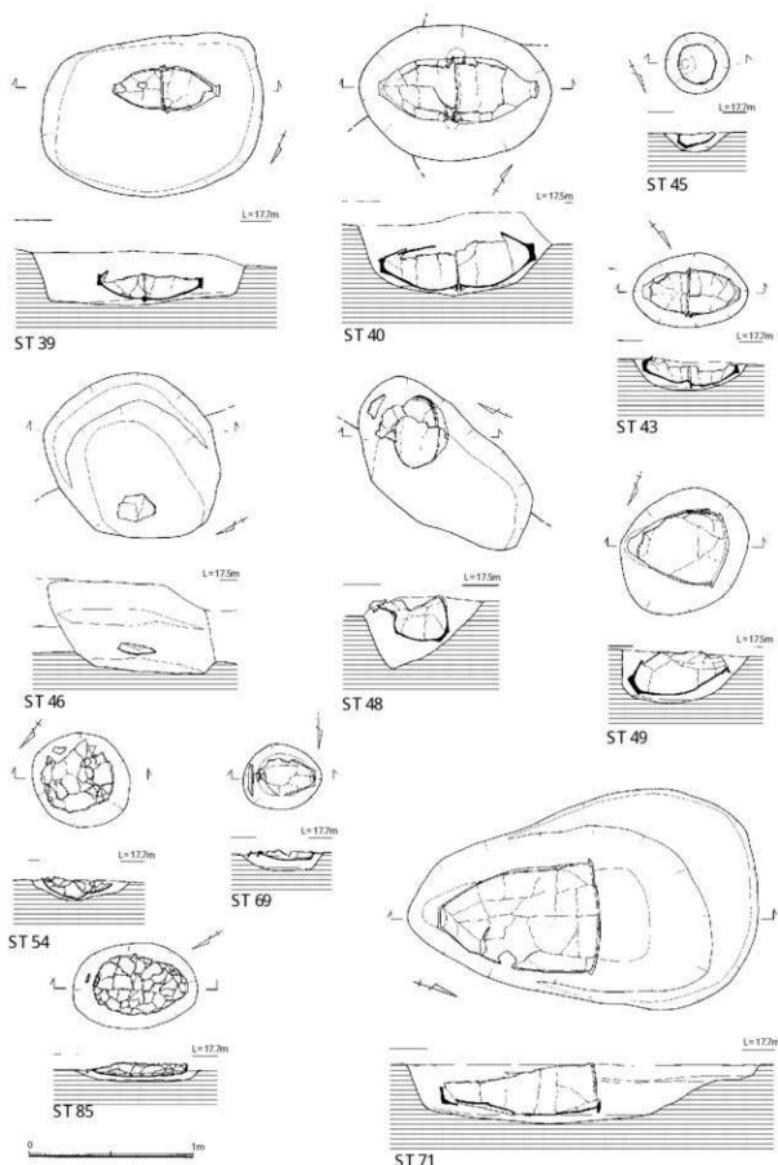


Fig.32 ST 39・40・43・45・46・48・49・54・69・71・85実測図 ( 1 / 30 )

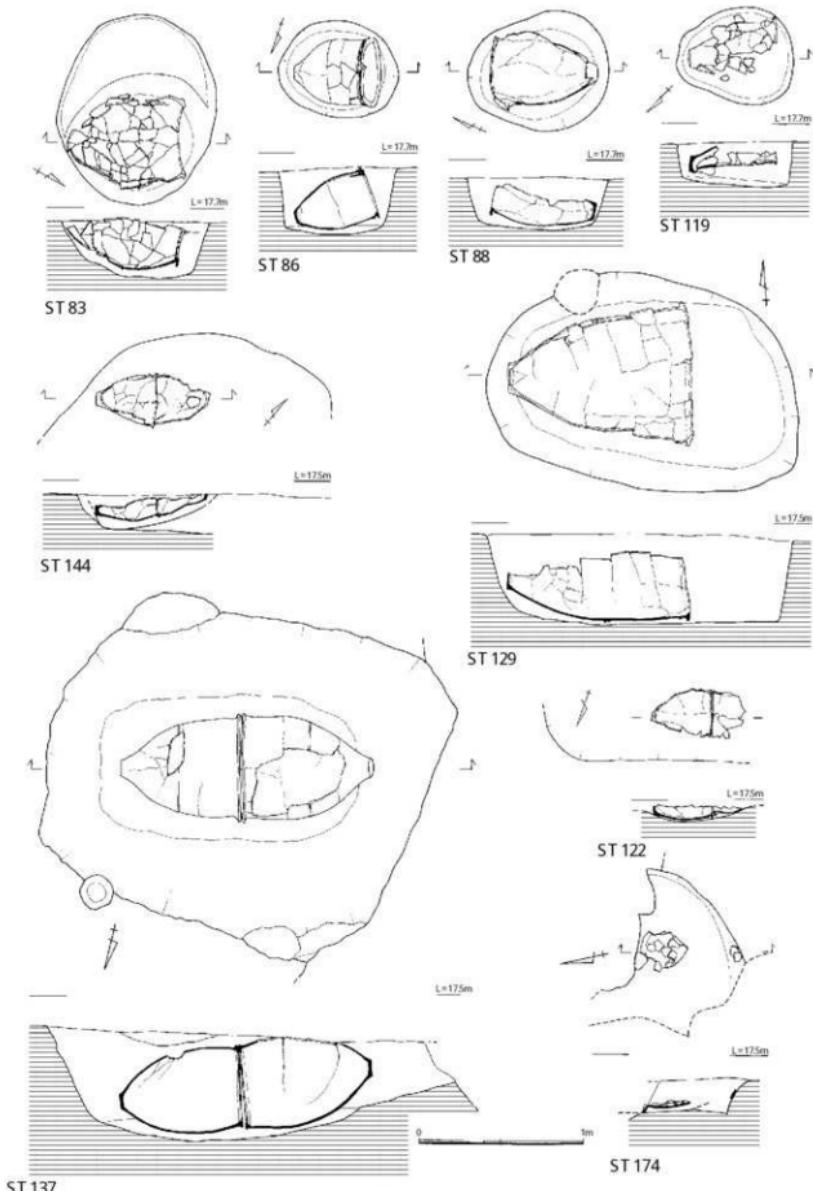


Fig.33 ST 83・86・88・119・122・129・137・144・174実測図 (1/30)

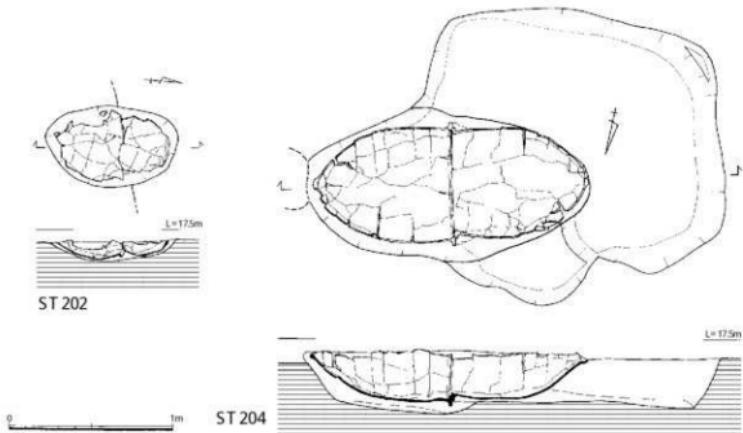


Fig.34 ST 202・204実測図(1/30)

測り傾斜角度がまとまる。

各棺の概要是、ST 01は中期中頃の小形甕合口。ST 03は中期前半の小形甕・鋤先口縁壺合口。ST 04は中期中頃の小形甕合口。ST 05は中期中頃の大形甕合口。ST 07は中期前半の壺胴部のみで詳細不明。ST 08は中期中頃の小形甕。搅乱を受け詳細不明。埋置角47°で深い。ST 18は中期初頭の大形甕单棺。ST 37は中期前半の小形甕合口。ST 39は中期中頃の小形甕合口。ST 40は中期前半の小形甕合口。ST 43は中期中頃の小形甕合口。ST 46は中期前半の壺胴部のみで詳細不明。ST 48は中期前半の小形甕・鋤先口縁壺合口。埋置角は42°で深く、棺南が大きく空く。ST 49は中期中頃の小形甕单棺。埋置角は30°。ST 54は中期初頭の小形壺棺。削平され詳細不明。埋置角は60°で深い。ST 69は中期後半の小形甕・広口壺の合口で呑口。ST 71は中期中頃の大形甕单棺。口縁先の墓壙が空く。ST 83は中期初頭の大形甕单棺。口縁が3°下を向く。ST 85は中期後半の小形甕棺。削平され詳細不明。ST 86は中期中頃の小形甕单棺。ST 88・119は中期後半の小形甕单棺。ST 122は中期中頃の小形甕合口。ST 129は中期中頃の大形甕单棺。口縁先の墓壙が空く。ST 130は中期中頃の大形甕合。SD70覆土を重機で掘削中の検出で詳細不明。ST 131は中期後半の小形甕・高坏合口棺。甕口縁は打ち欠き。SD70覆土を重機で掘削中の検出で詳細不明。ST 137は中期前半の大形甕合。ST 144は中期中頃の小形甕合口。ST 174は中期初頭の小形甕棺。墓壙半分をSM169に切られ詳細不明。ST 202は中期初頭の小形甕合口。ST 204は中期初頭の大形甕合口。

出土遺物(PL.34)347・348はST 69棺内出土のサヌカイト打製石鏃。347先端は掘削時の欠損。幅13厚3mm。両面調整。348は縦長剥片の打面基部にノッチを入れ中茎を形成する。両面調整。59×20×19mm・9gを測る。

1)木棺墓SM(Fig.40・41)1区を中心に8基が分布し、うち6基が前期と平行して10m程南に下がった位置にベルト状に分布する。二重墓壙で板痕跡が青黄色にグラウシ化して残るものがあり(SM30・31・107・108・149)。SM108は組み合わせ式木棺で、他は小口板のみの検出である。頭位は5基がN-59°~70°の稜線方向にとり、まとまる。SM30・31は同一墓壙に頭位をそろえて同形式の大形棺と小形



1. ST01 出土状況（北から）



2. ST03 出土状況（南東から）



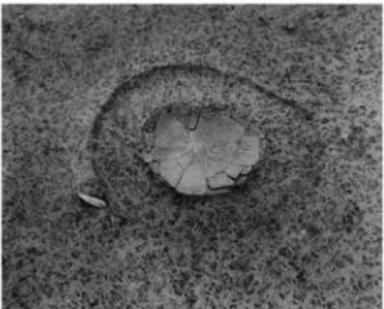
3. ST04 出土状況（東から）



4. ST05 出土状況（東から）



5. ST05 内面（東から）



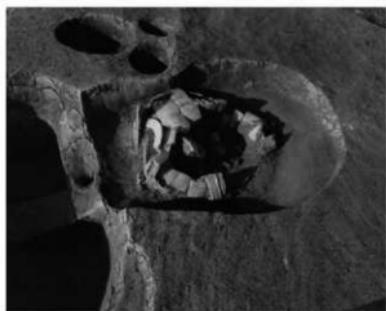
6. ST07 出土状況（南東から）



1. ST08 出土状況（南から）



2. ST08 内面（南から）



3. ST18 出土状況（南から）



4. ST18 内面（南から）



5. ST37 出土状況（西から）



6. ST37 内面（手前南から）



1. ST39 出土状況（手前南東から）



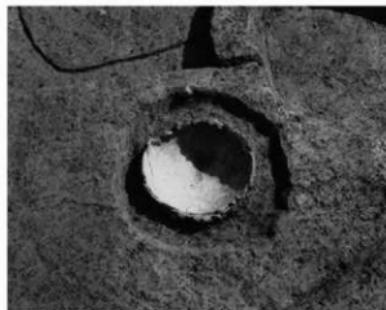
2. ST39 内面（手前南から）



3. ST40 出土状況（南から）



4. ST43 出土状況（南西から）



5. ST45 出土状況（西から）



6. ST46 出土状況（東から）



1. ST48 出土状況（東から）



2. ST49 出土状況（南東から）



3. ST54 出土状況（西から）



4. ST69 出土状況（北から）



5. ST71 出土状況（東から）



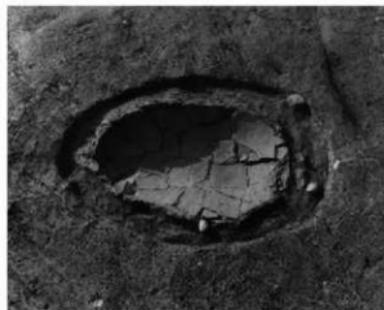
6. ST71 内面（東から）



1. ST83 出土状況 (北東から)



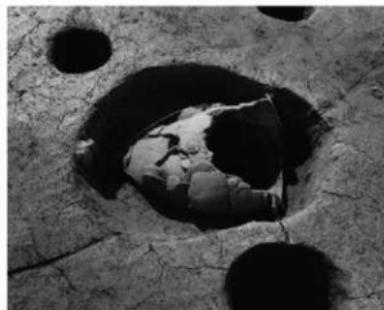
2. ST83 内面 (北東から)



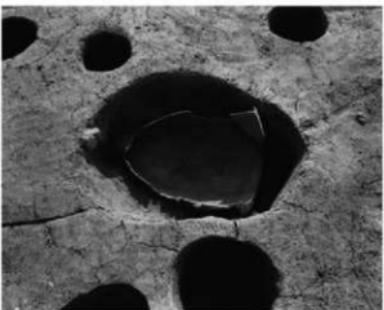
3. ST85 出土状況 (南東から)



4. ST86 出土状況 (南東から)



5. ST88 出土状況 (北東から)



6. ST88 内面 (北東から)



1. ST119 出土状況（南東から）



2. ST119 内面（北西から）



3. ST122 出土状況（北から）



4. ST129 出土状況（北から）



5. ST129 内面（南から）



6. ST137 出土状況（北西から）



1. ST137 内面（北西から）



2. ST137 内面（北東から）



3. ST144 出土状況（北西から）



4. ST144 内面（北西から）



5. ST202 出土状況（西から）



6. ST204 出土状況（北から）

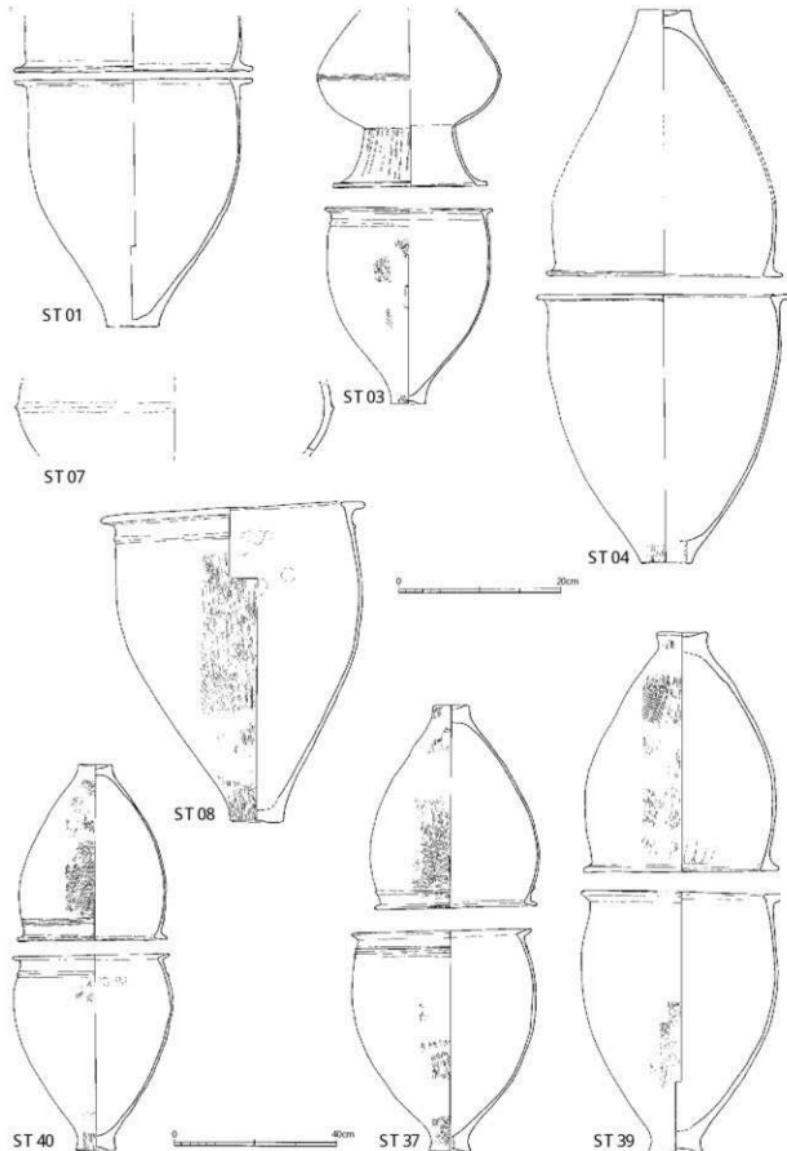


Fig.35 ST 01・04・07・08・39 (1/6)・03・37・40 (1/12) 小形棺実測図

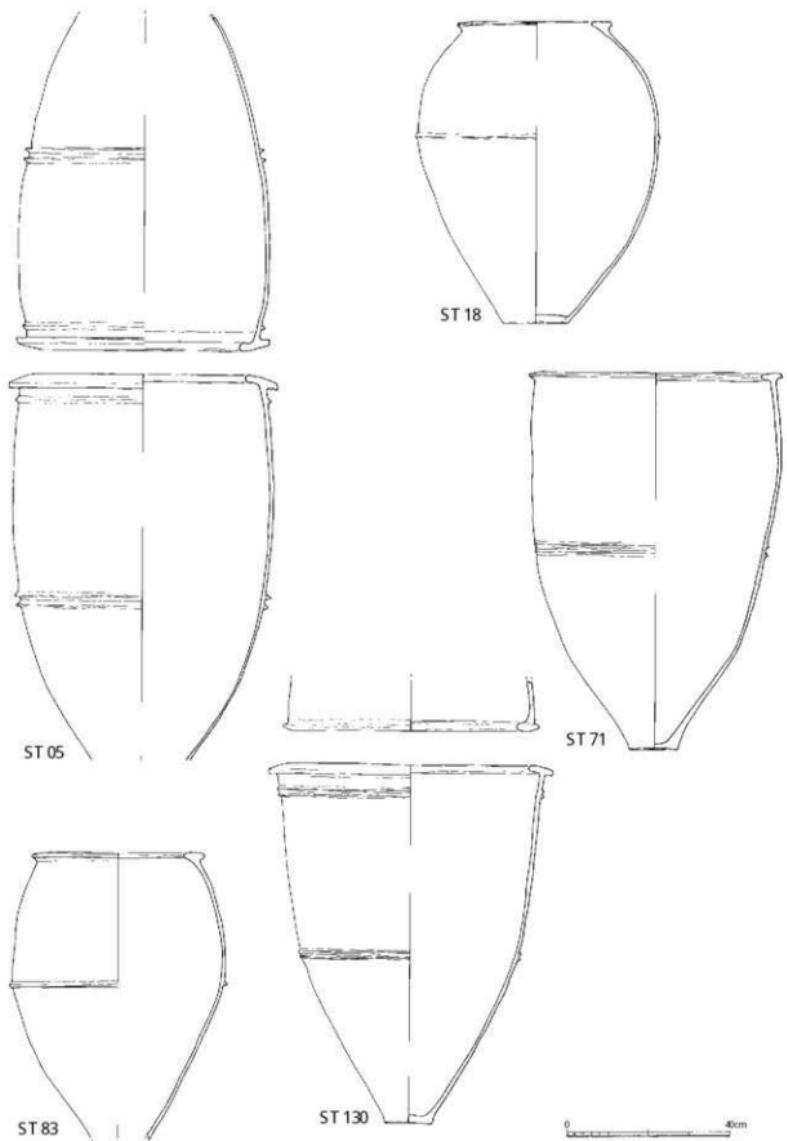


Fig.36 ST 05・18・71・83・130大形棺実測図 (1/12)

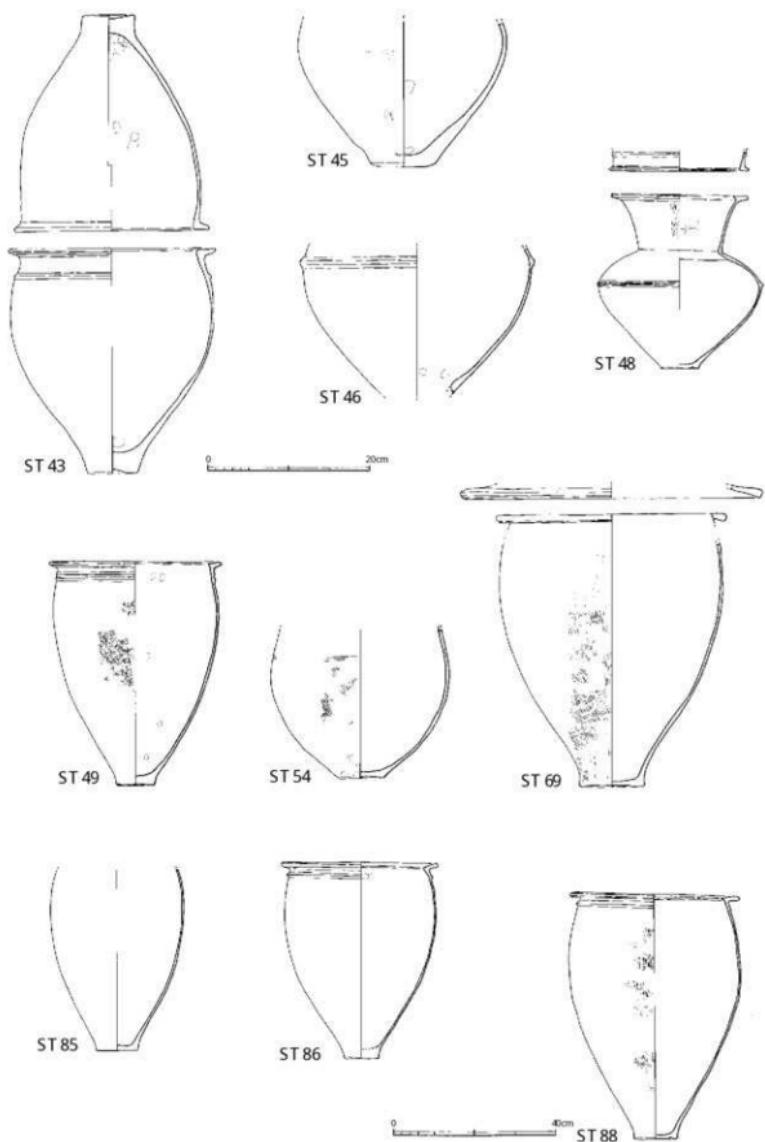


Fig.37 ST 43・45・46・69・86・88 (1/6)・48・49・54・85・86・88 (1/12) 小形棺実測図

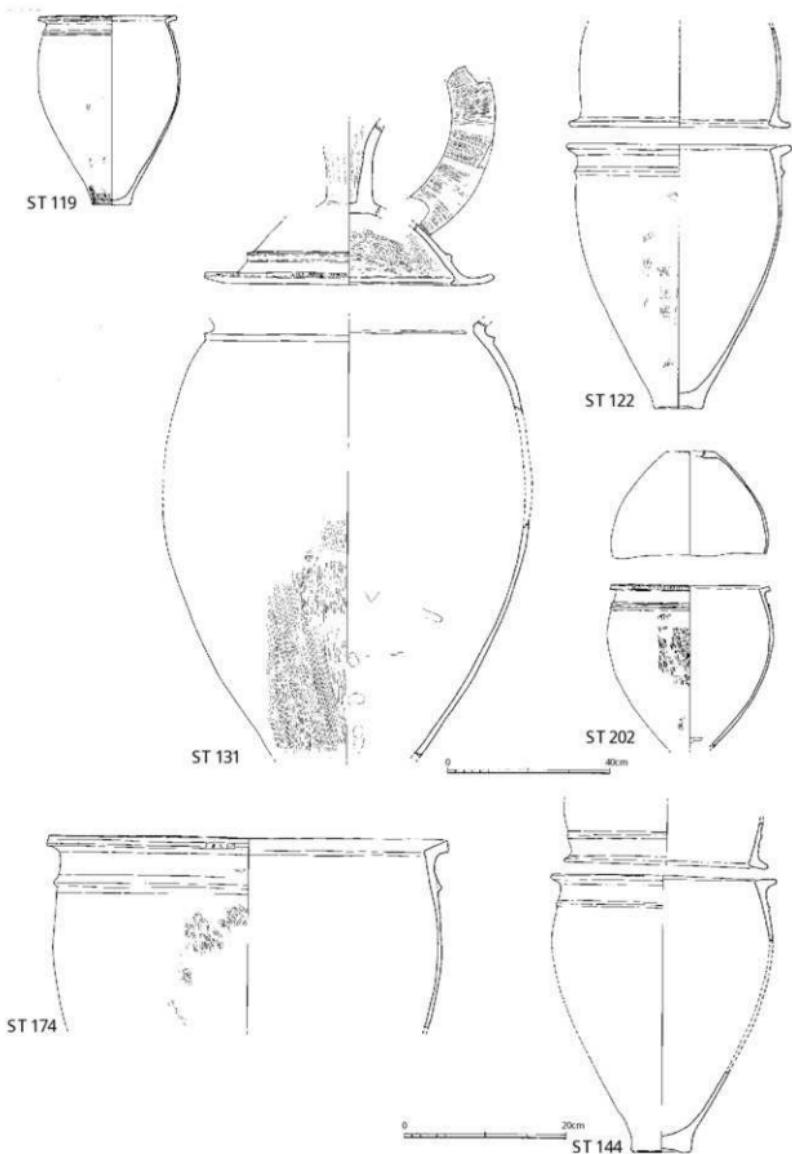


Fig.38 ST 119・202 (1/12)・122・131・144・174 (1/6) 小形棺実測図

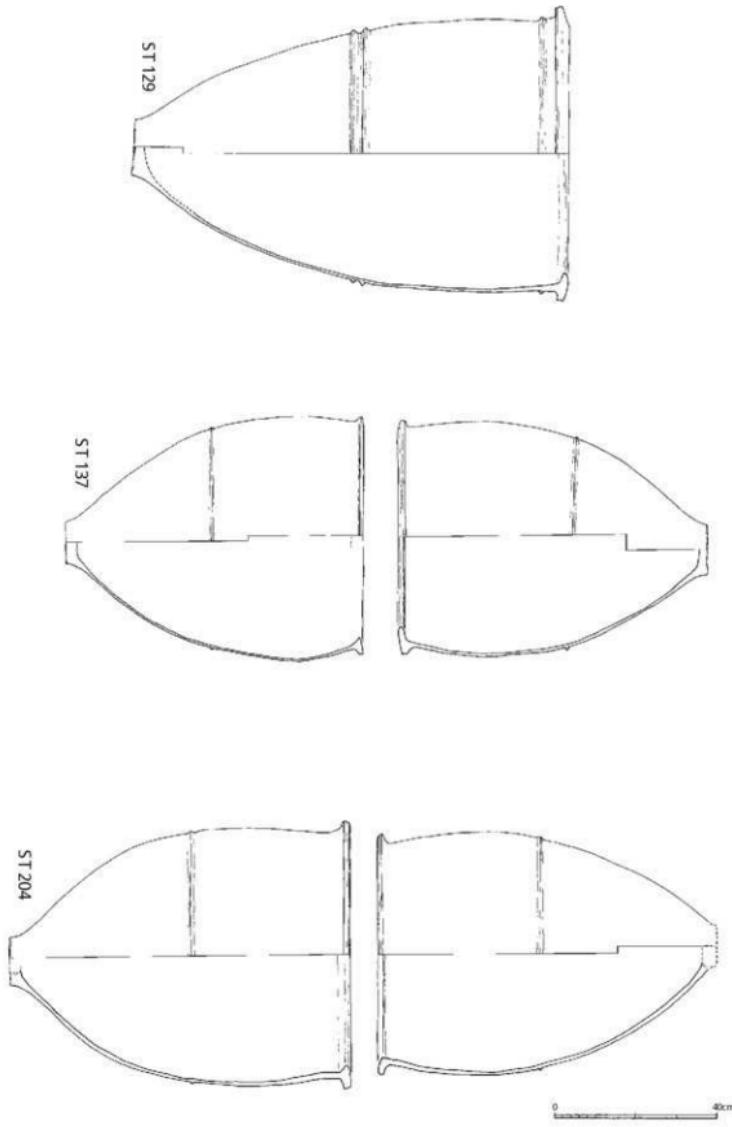
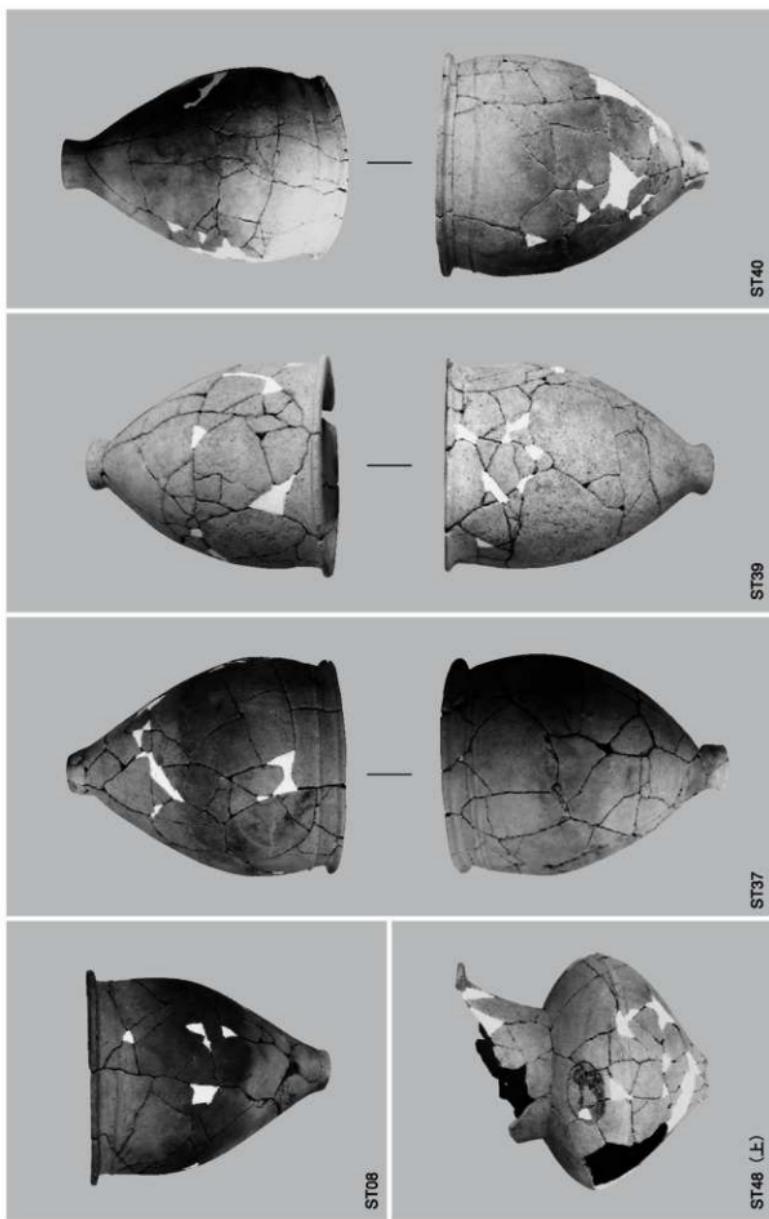
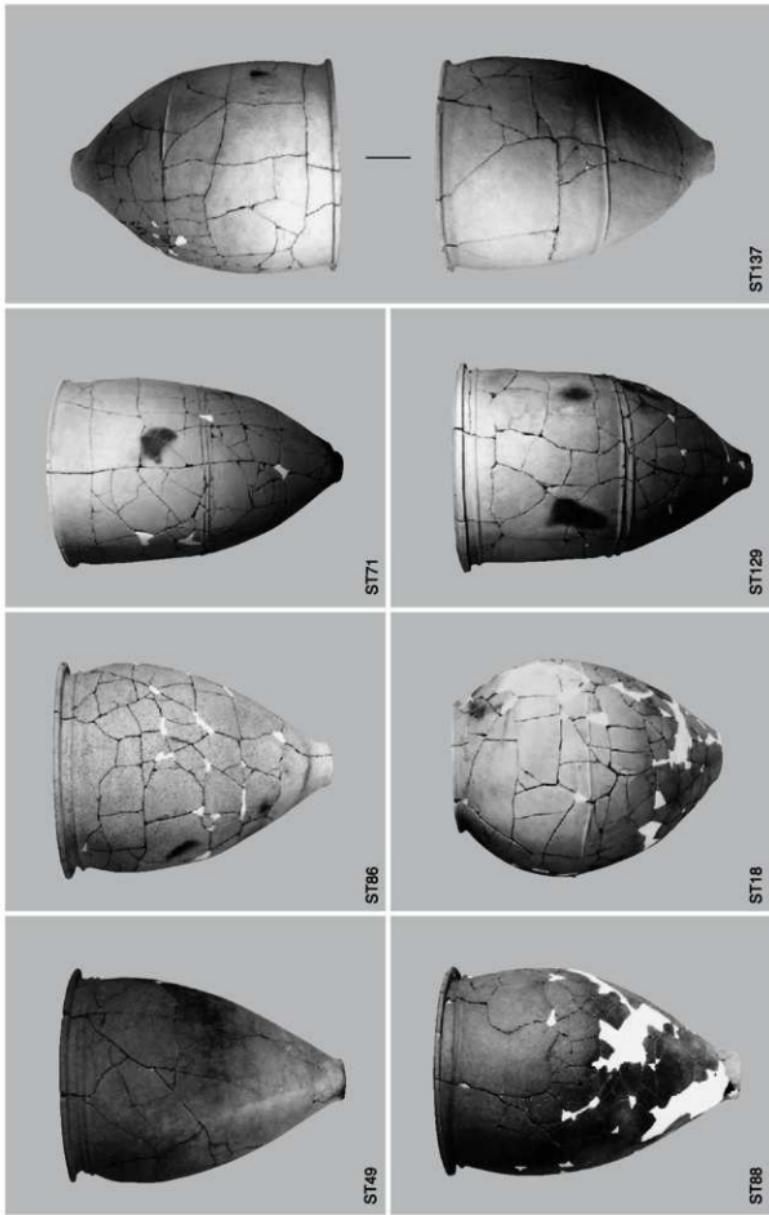


Fig.39 ST 129・137・204大形棺実測図 (1/12)



出土墓棺—1



出土墓棺-2

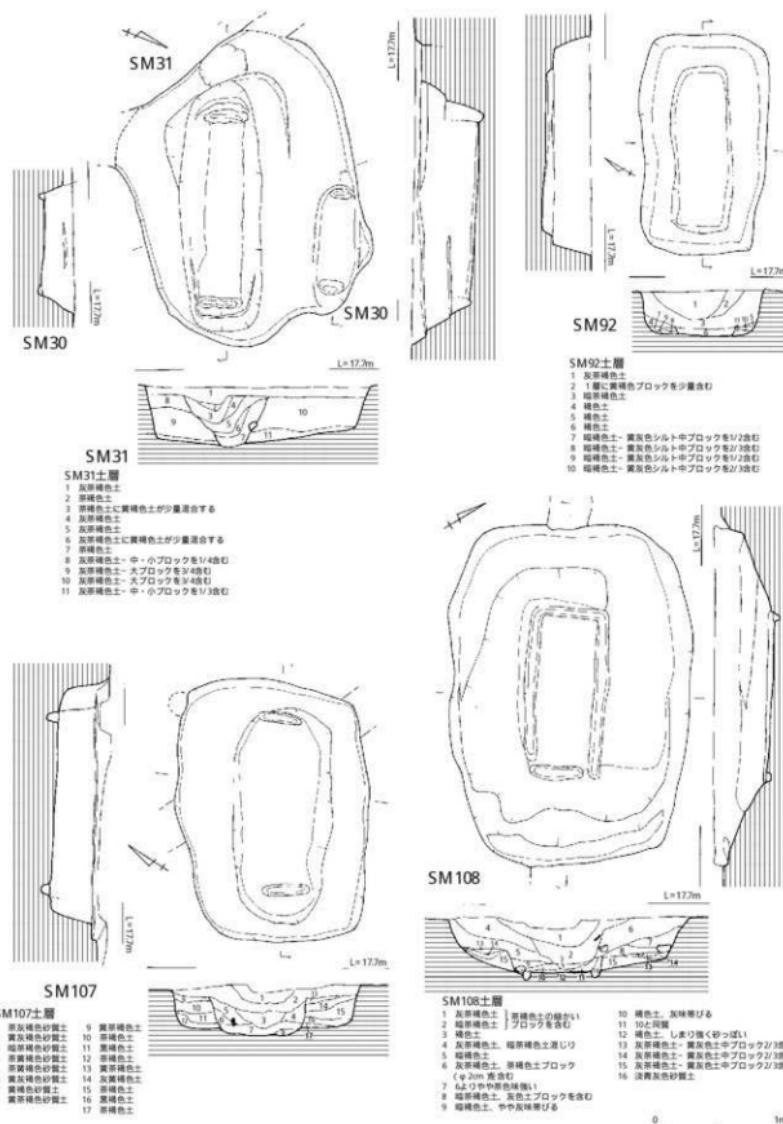


Fig.40 SM30・31・92・107・108実測図 ( 1/40 )

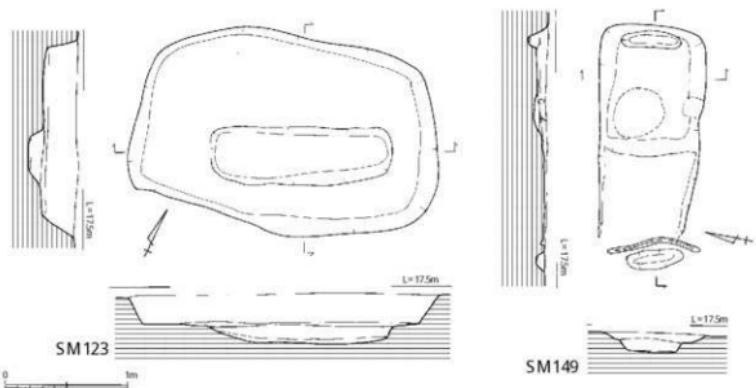


Fig.41 SM123・149実測図 (1/40)

樁を配置しており、親子関係とおもわれる。SM123とST122も同様の位置関係にある。SM149の東半部の段は掘削時の失敗である。遺物は少量の弥生土器片を出土し、SM31で亀ノ甲タイプの甕、SM107からは城ノ越式の甕、SM108からは須玖I式壺片を出土しており、中期初頭が多い。

3) 土塼墓SR (Fig.42・43 PL20・21) 甕棺墓・木棺墓と混在し、1区を中心に4つ程の群を成して9基が分布する。SR106東半部は後代の搅乱を受けている。SR147は主体部の北・西辺に沿って礫を並べる。頭位は6基が稜線に近い方向にとり、まとまる。出土遺物は少量の弥生土器片を出土しており、SR66で須玖I式高坏、SR107でサヌカイト製石鐵、SR114で須玖II式甕、SR128で丹塗壺、SR134で金海式甕、SR173で須玖II式器台・木葉化石、SR207で城ノ越式式甕、SR211で須玖I式甕片が出土している。

出土遺物 (PL34) 349・350はSR107出土のサヌカイト打製石鐵。349は $14 \times 17 \times 3.5\text{mm}$ ・0.53g。両面調整。350は先端を折損。幅19厚3mm。両面調整。351はSR173出土の凝灰質砂岩木葉化石。幅31高25mmで裏面は掘削時に破損している。表面は手すりで光沢を帯びる。352はSR207出土の城ノ越式甕。外面はタテハケ後ヨコナデ口唇・突堤に刻目、口縁内面ヨコハケ後ヨコナデ。

4) 土塼SK (Fig.43) 調査区中位から2区の、南半部を中心に16基分布し、前期同様墓域と生活域に分かれる。SK02・26・72は祭祀土壤で1区墓群内に位置する。SK02からは須玖II式丹塗甕、SK26からは須玖II式丹塗短頸壺・鋤先口縁壺・高坏・甕、器台等が出土、SK72からは多量の礫と須玖II式丹塗広口壺・鋤先口縁壺・高坏・甕、器台、甑、紡錘車等が出土。SK29は土塼墓の可能性もあるが、上層下面に多量の小礫を敷き中形の礫が乗る。遺物は須玖I式鋤先口縁壺・甕等が出土。SK41は須玖II式鋤先口縁壺、SK55は中期初頭の壺と滑石製紡錘車、SK64は2段の土壤で貯蔵穴の可能性もある。2層を中心に多量の須玖I式壺・甕・高坏・器台等が出土。SK84は須玖II式甕、SK151は須玖I式壺・甕、SK237は須玖II式丹塗甕、壺、器台、SK238は大形の土壤で須玖I式甕・壺、SK239は須玖II式壺・甕・器台、SK240は須玖II式壺・甕、SK245は須玖II式壺・甕・支脚、SK253は須玖I式甕、SK254は土器溜まりで多量の城ノ越式・須玖I式壺・甕・器台・支脚等を出土、SK256は須玖I式壺・甕、SK258は須玖II式丹塗甕・支脚、SK265は須玖II式甕・器台、SK306は須玖II式丹塗壺・甕、SK308は須玖II式甕が出土する。

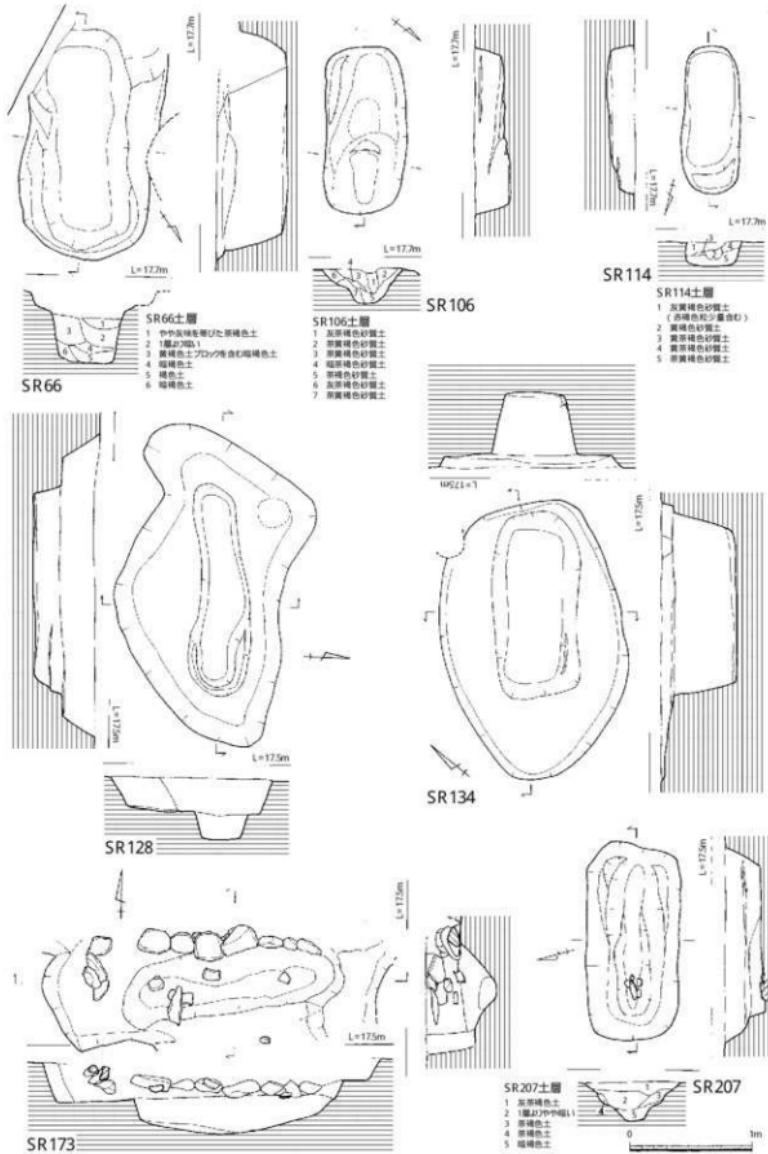


Fig.42 SR66・106・114・128・134・173・207実測図 (1/40)

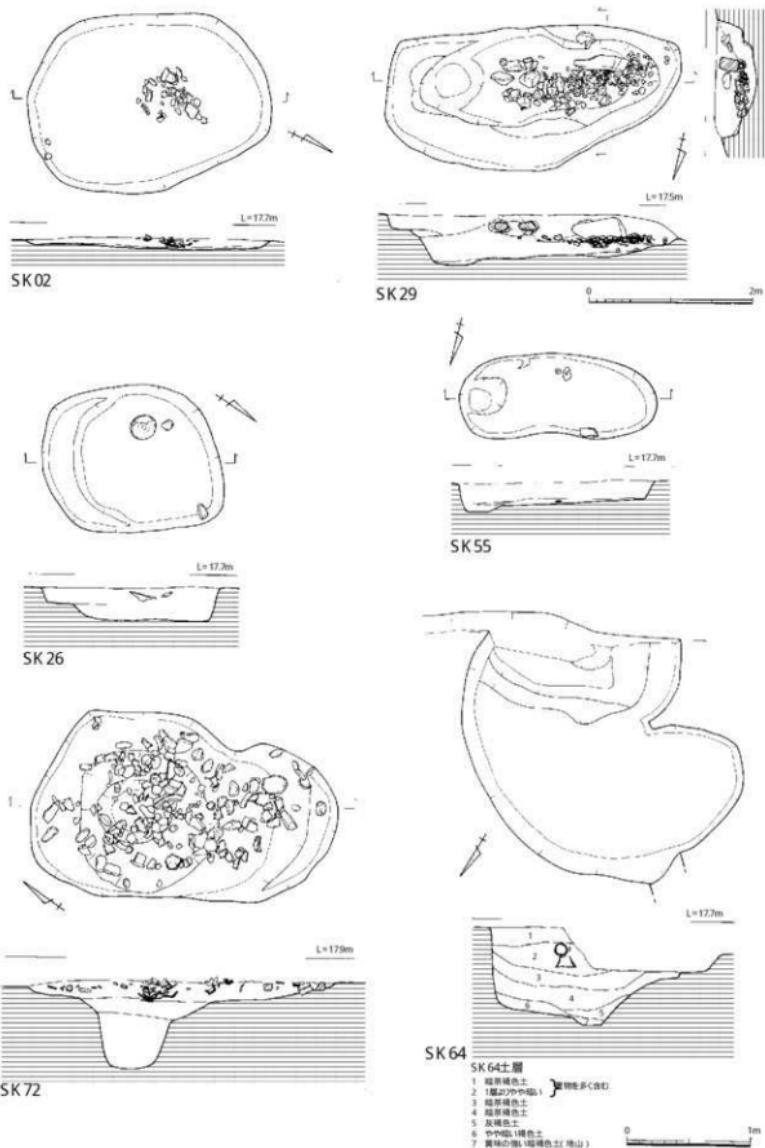


Fig.43 SK02 · 26 · 29 · 55 · 64 · 72 實測圖 (1/40 · 1/60)

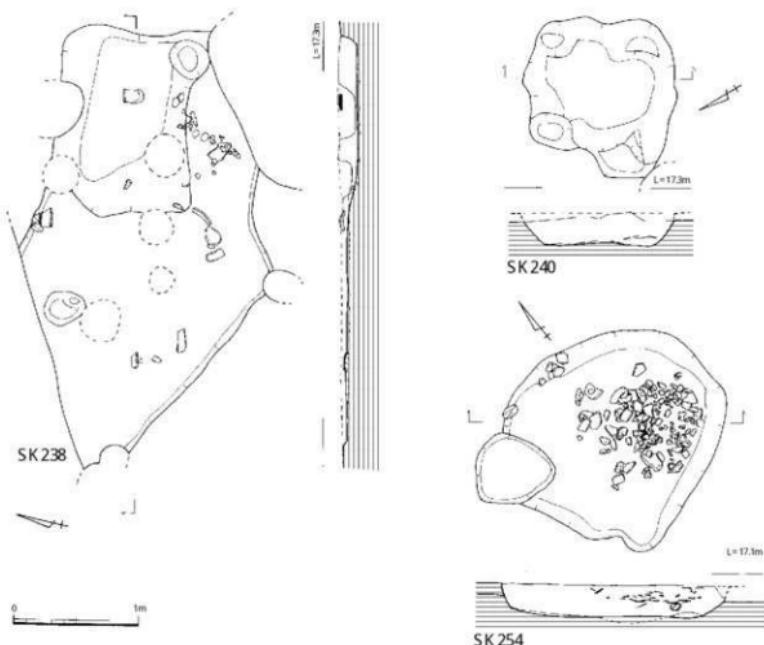


Fig.44 SK 238・240・254実測図(1/40)

出土遺物 (Fig.45・46 PL 34) 353はSK 55出土綠色片岩製紡錘車。径45厚6孔径5.5mm。354～372は祭祀土壙SK 72出土。354は須玖II式丹塗広口壺。口径31.7cmで口縁の大部分を打ち欠いている。355は丹塗鋤先口縁壺。口径21.0cm。口唇に沈線と刻目。口縁の対面2箇所を打ち欠く。356・357は小形の鋤先口縁壺。356は口径15.2器高15.8cmで口縁の1/3を欠く。357は口径19.7器高19.3cmで口縁の3箇所を打ち欠く。358は樽形の丹塗甕。口径16.2器高15.4cmで口縁上面に焼成前の蓋受けの穿孔がある。359は小形の丹塗甕。口径14.6cmで口縁上面に同じく蓋受けの穿孔がある。360・361は高坏。360は口径24.5cm。摩滅で調整不明。361は丹塗で脚径12.3cm。362は支脚、上部が被熱する。363・364は甕転用の瓶。ともに二次穿孔を行う。365～369は甕。365は口径25.7器高26.7cm、366は口径24.2器高26.7cmでともに下半部が被熱する。369は口唇に刻目。口径30.0cm。367・368は跳ね上がり口縁。367で口径22.8cm、368で口径24.8cm。跳ね上がり口縁甕は本調査では5～6点のみの出土である。370は傘形の土製紡錘車。径47高14孔径7mm23g。371・372は磨製石斧。371は106×50×29mm刃長20mm249gで灰白色滑石片岩製。372は154×73×50mm刃長40mm875gで灰色玄武岩製。使用による刃部摩耗が著しい。

5)溝SD (Fig.30) 南部の2区でSD 226・244の2条を検出している。SD 226はC15グリッドに位置し、幅81深30cmで墓域と生活域を区切るように稜線直交方向に直線的に延びる。須玖II式壺・甕等が出土。SD 244は幅112深25cmの不整形で稜線方向に延びる。須玖I式の壺・甕等が出土。

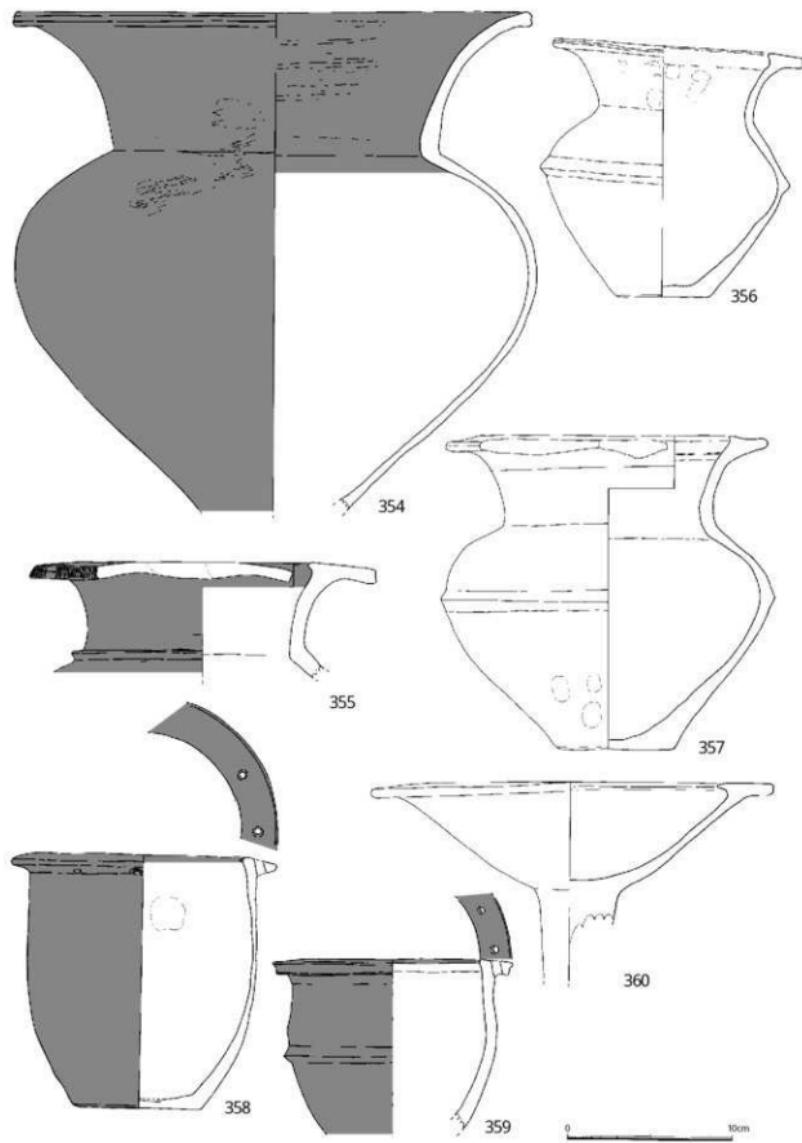


Fig.45 SK72 出土土器実測図- 1 (1/3)

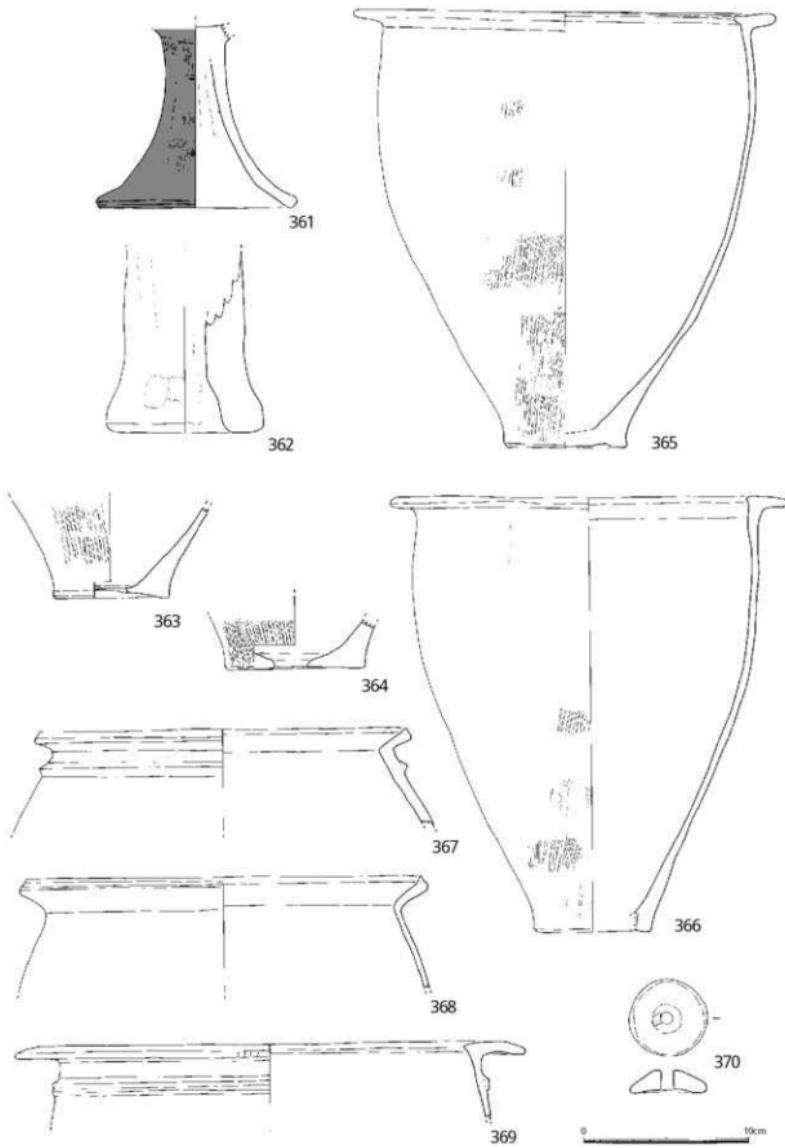


Fig.46 SK72 土器実測図- 2 (1/3)

## 5. 弥生後期の調査 (Fig.47)

弥生後期も、引き続き北半部の1区を中心に墓群が分布し、土壙等の生活遺構も1区に偏り、竪穴住居を検出する。検出した遺構は、甕棺墓1基・木棺墓6基・土壙墓5基の墓群と、土壙10基、竪穴住居1軒で、ともに中期の半数以下に減少する。墓群は北部では北東方向に、1区南部では南東方向の列状に分布する。土壙・竪穴住居の生活遺構は墓群に近接する傾向にある。

1) 甕棺墓ST45 (Fig.32 PL.27-5) 1区南の木棺墓群中に1基のみ分布。後期前半の壺を用い、上部は削平で不明。頭位を木棺・土壙墓群と逆のN-65°-Wにとる。埋置角は55°と深く、単棺の可能性が高い。副葬品の検出は無い。

2) 木棺墓SM (Fig.48・49) 1区の北部に2基 (SM110・112) が北東方向に、南部に4基 (SM68・95・100・169) が南東方向の列状に分布。5基が頭位を東西方向に、1基が直交方位にとる。SM68は組合式木棺で、小口板の痕跡が幅50・厚5cm程深く残る。側板・小口板は断面観察では痕跡が上面まで残る。主体部南東床面には小さな塊状に赤色顔料を塗布。SM95は2.85×1.62mの最大規模の墓壙。SC104覆土を切るため主体部平面検出で失敗しているが、土層断面では1.8×0.84mを測り上位は大きく崩れる。墓壙南東床上には鉢375が1点副葬。口径10.0器高6.5cm。外面上半はヨコナデ下半は指頭圧痕。SM100は主体部の検出に失敗、土層断面観察では幅38cmの立ち上がりが認められ、木棺墓の可能性が高い。SM110は組合式木棺で、主体部四周に厚3cm程の板痕跡が残る。掘方より甕小片が出土。SM111は主体部足位上面に平石を小口板状に立て隅に塊石を置く。甕小片が出土。SM169は甕棺ST174を切る。組合式木棺と考えられ、部分的に厚5cm程の側板痕跡が残る。118×38cmの範囲に10cm程の張床をなし上面に赤色顔料を厚く塗布する。甕小片が出土する。

3) 土壙墓SR (Fig.49) 木棺墓と混在し、1区

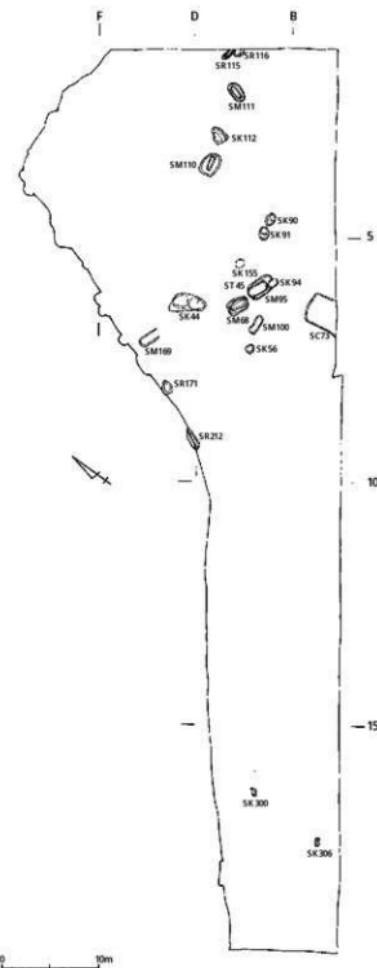


Fig.47 弥生後期遺構分布図 (1/500)

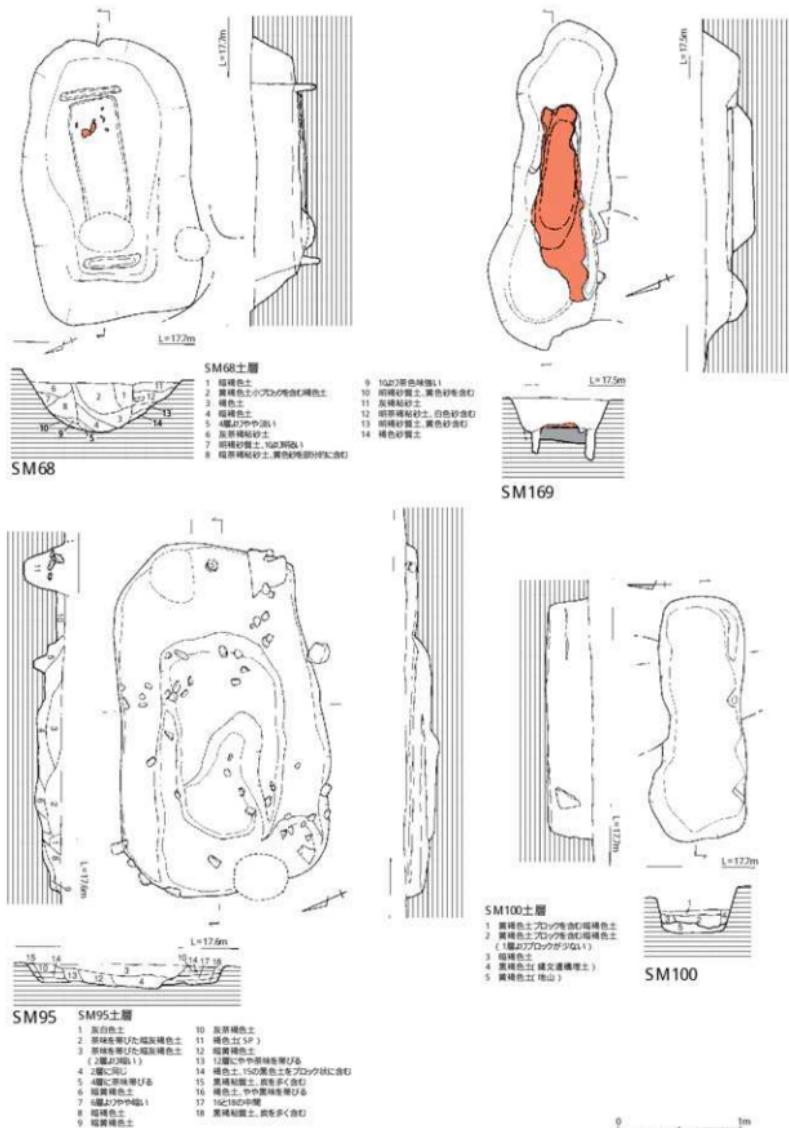


Fig.48 SM68・95・100・169実測図 (1/40)

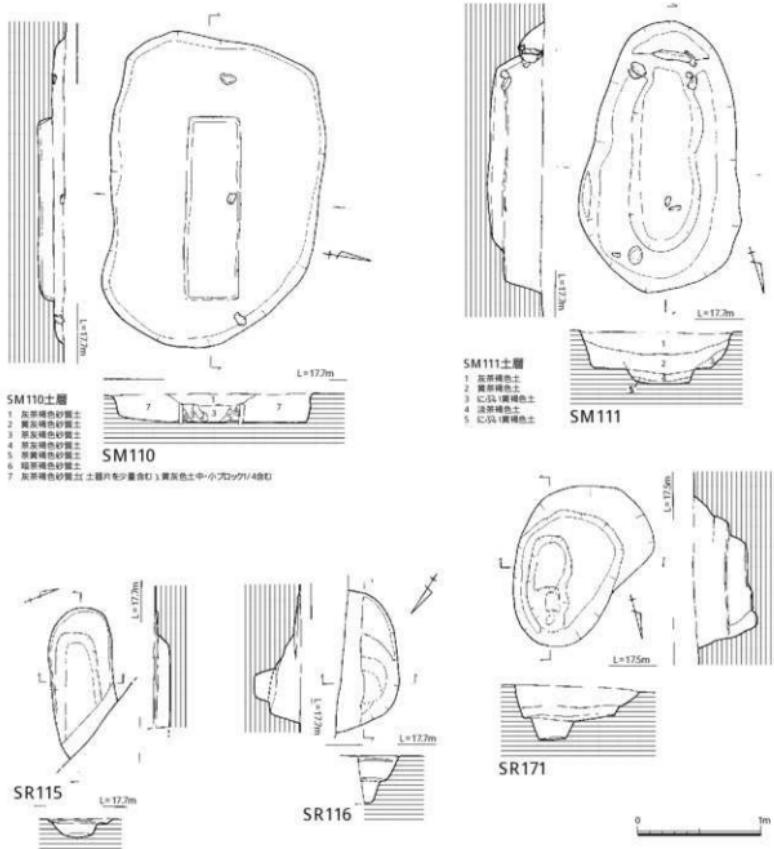


Fig.49 SM110・111・SR115・116・171実測図 (1/40)

北部の列に2基(SR115・116)、1区南部で2基(SR171・212)、2区南部で1基(SR303)の5基が分布する。3基が南北方向に頭位をとり、墓壙も小振りで、木棺墓と異なる傾向にある。SR116・171主体部底面の一部は柱穴と重なっている。SR115・116からは甕小片、SR212・303からは初頭・前半の袋状口縁壺小片(374)が出土している。

4) 土壙SK(付図) 1区で7基(SK44・56・90・91・94・112・155)、2区南部で3基(SK285・287・300)が散漫に分布し、1区では墓群と混在する。

5) 穫内住居SC73(付図) 1区B6グリッドに位置する2.8×3.8mの長方形プランで炉・主柱穴は明確でない。後半・終末の甕小片が少量出土している。

376は1区検出面出土の銅製鋤先刃部片。幅79厚5mm。刃部摩耗で先端5mm程を欠く。

## 6. 弥生終末～古墳前期の調査 (Fig.50)

弥生終末～古墳初頭は遺構の多くが布留式櫛小片を含むため、細分が困難であり一括して扱っている。1区北半部は引き続き木棺・土壙墓の墓域として使われ、1区南部から2区にかけては多くの竪穴住居が分布し、集落としての発展をみる。検出した遺構は、木棺墓3基・土壙墓4基・箱式石棺墓2基の墓群と、土壙24基、溝7条、集石遺構1基、竪穴住居20軒で、弥生中期・前期に次ぐ第3の盛期を迎える。特に竪穴住居は最盛期を迎える。墓群は主に後期の東西方向の群を踏襲し、列状に分布する。土壙・竪穴住居の生活遺構は墓群と分離する傾向にある。

1) 箱式石棺墓SQ (Fig.51) 1区の北半部に2基 (SQ33・34) が木棺・土壙墓とともに東西方向の列状に並列して分布。丘陵斜面の段造成時に西部を削平される。緑色片岩の板石を用いるSQ33は内法幅35cm程。SQ34は内法幅50cm程。側石は4石残る。東端床上と小口・側石内面に赤色顔料を塗布する。

2) 木棺墓SM (Fig.51) 3基 (SM102・103・154) が土壙・箱式石棺墓とともに東西方向の列状に分布。SM102・103は板圧痕は無いが土層で主体部の立ち上がりが、SM154は小口板痕跡が確認され組合式木棺の可能性が高い。SM103床上で若干の赤色顔料、掘方中央で土師器壺377を検出。口径10器高20.5cm。胴外面は粗いタテハケ内面頸部下はナナメケズリ。

3) 土壙墓SR (Fig.49) 1区で3基 (SR98・150・153)、2区で1基 (SR220) を検出

4) 竪穴住居SC (付図) いずれも方形プランで20軒検出。SC53以外2区で、SC53・221・225・257・259は古墳前期、以外は弥生終末～古墳初頭。弥生終末～古墳初頭は一辺3m以下、4～5m前後、6m以上の3群に、前期は4～5m前後と7m以上の2群にまとめり、前期でやや大形化、いずれも大形住居1軒 (SC269・257) をもつのが特徴である。SC53・222・224・225・243・269・270は炉を持つ。SC257は消失家屋である。



Fig.50 弥生終末～古墳前期遺構分布図 (1/500)

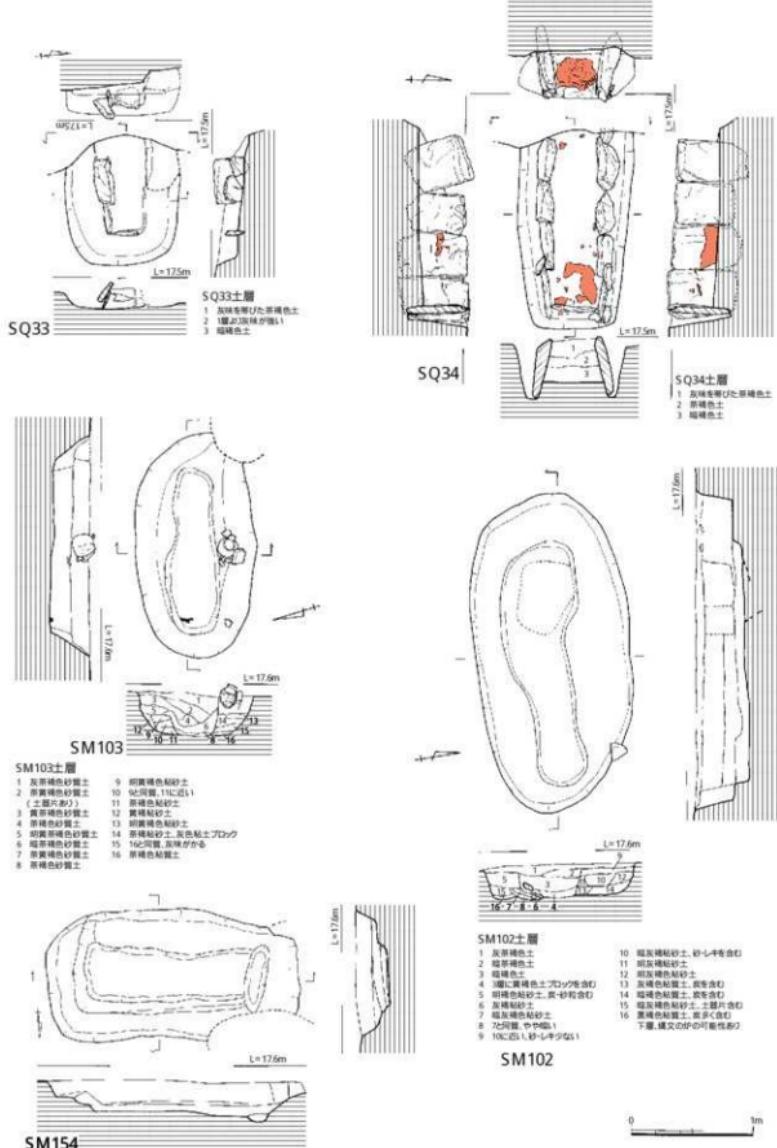


Fig.51 SQ33・34, SM102・103・154実測図 (1/40)

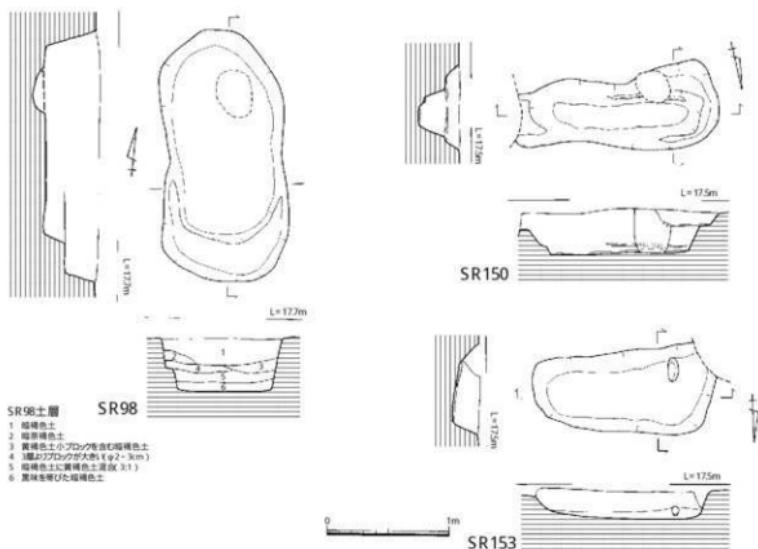


Fig.52 SR98・150・153実測図 (1/40)

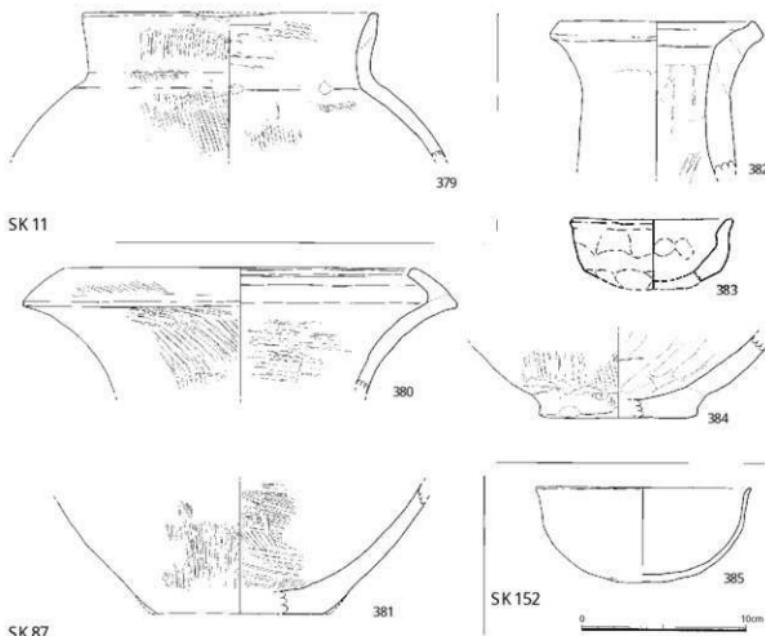


Fig.53 SK11・87・152出土遺物実測図 (1/3)

## 6. 古墳後期の調査 (Fig.54)

古墳後期は1区で土塙墓1基、生活遺構は前代の分布域を踏襲するが、竪穴住居は減少し、掘立柱建物の出現を見る。検出した遺構は、土塙墓1基と、土塙17基、溝2条、竪穴住居7軒、掘立柱建物3棟以上で、掘立柱建物はいずれも総柱の倉庫である。

竪穴住居は2区南部に集中し、これから2次調査域の集落に広がっていく。

1) 焼土塙SK284 (Fig.55) 2区の北部D11グリッドに位置する。四壁が焼け底面には炭灰層が堆積する。この上面で倒置した状態で新羅土器盤口壺388を検出している。口径8.8cmで1/3程を打ち欠き。器高12.8cm。肩部に滴下状と16弁花文のスタンプで装飾する。上面は自然釉がかかり高台内は黒色を呈す。

387はSC246出土瓦質土器鉢。須恵器I新段階環蓋、他に17~36mmの滑石臼玉素材386を供伴。378はSC257出土鐵鎌。204×42・厚8mmを測る。

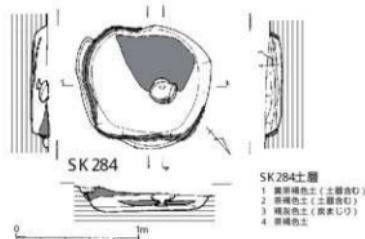


Fig.55 SK284実測図 (1/40)

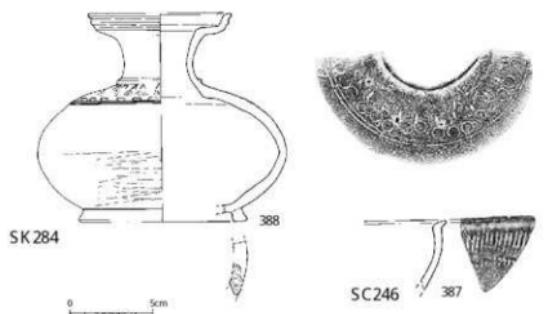
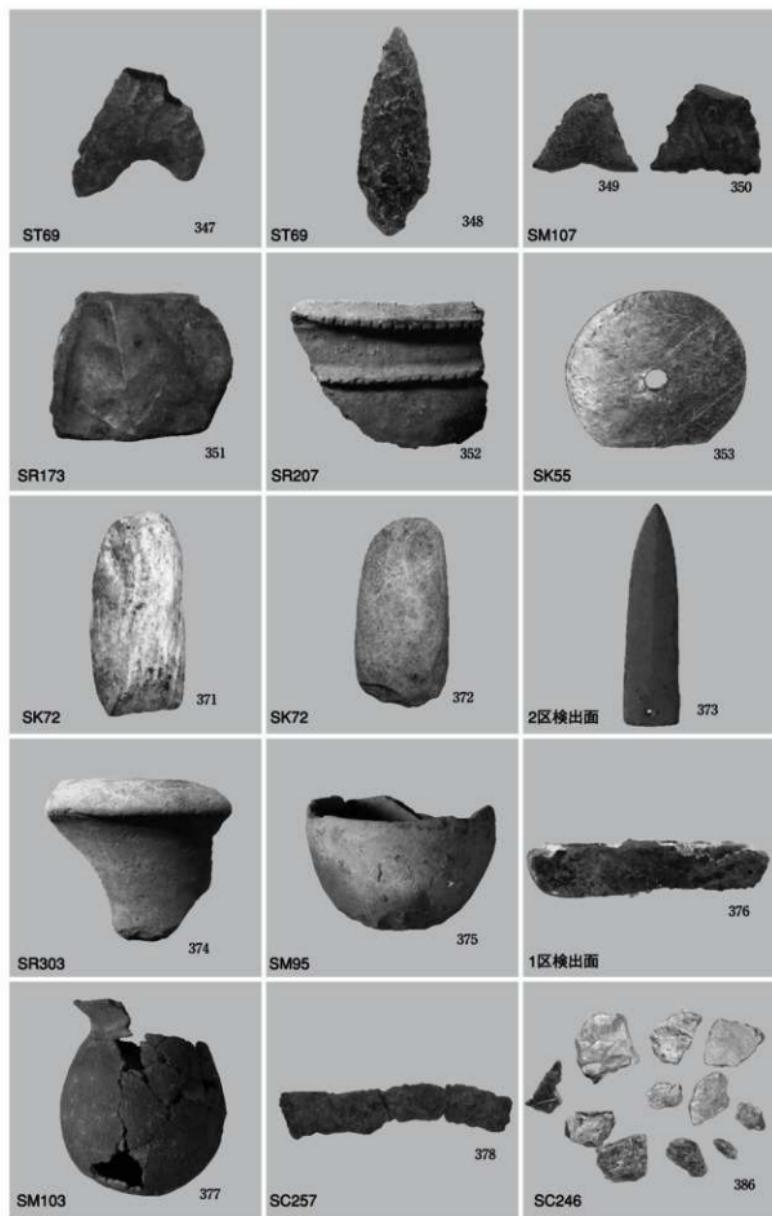


Fig.56 SC246・SK248出土遺物実測図 (1/3)



Fig.54 古墳後期遺構分布図 (1/500)



弥生中期～古墳後期出土遺物









## 報告書抄録

# 蒲田水ヶ元3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1147集

2012年(平成24)年3月16日

発行 福岡市教育委員会

〒810-0011

福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 高松印刷有限会社

〒812-0062

福岡市東区松島1丁目4-10

(092)611-0573



付図 蒲田水ヶ元 3次調査全体図 (1/200)